



097438-000-8

特9-436

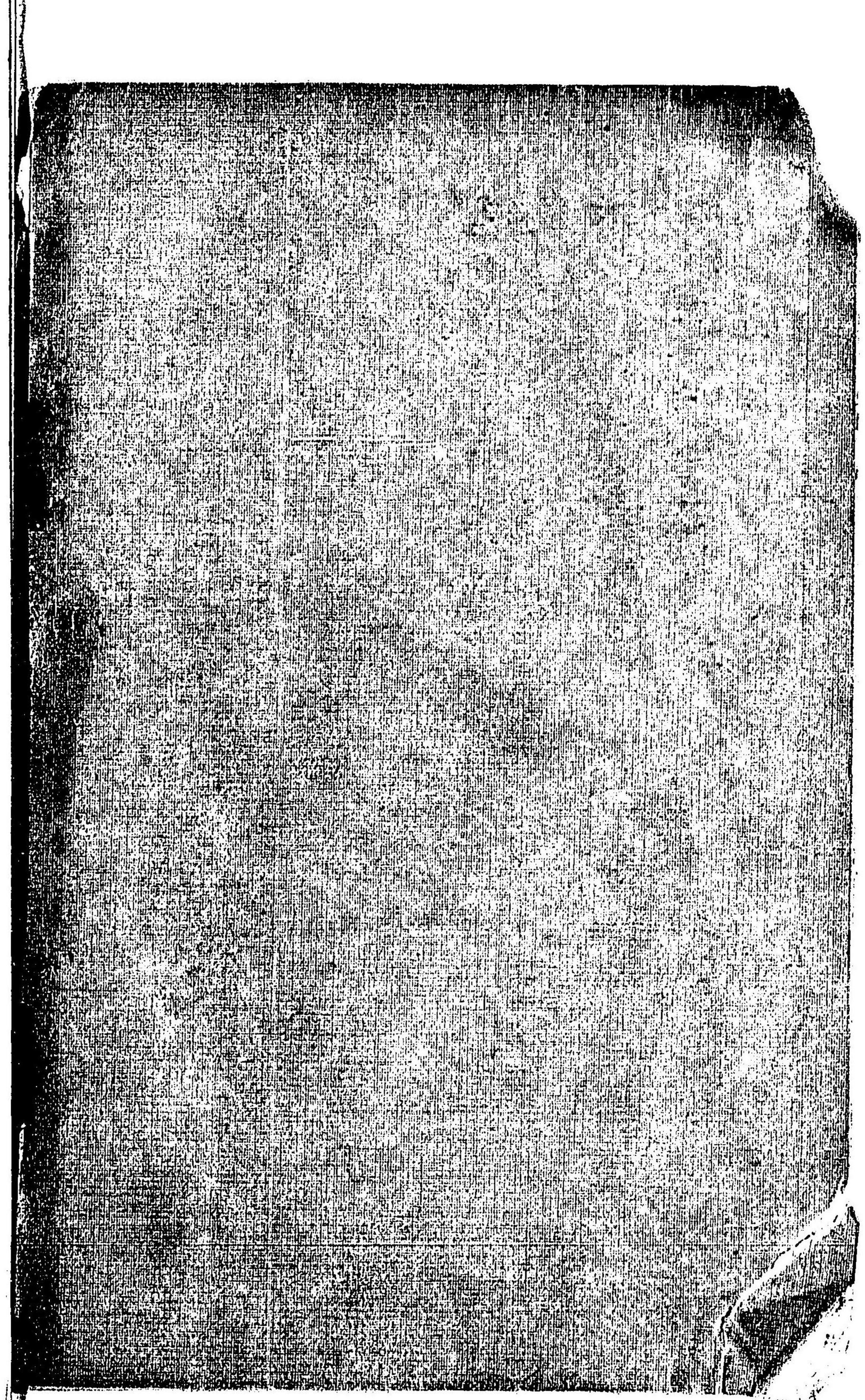
轟坊清玄 (清水寺古跡)

玉田 玉秀齋 / 講演

M44

DBS-1341







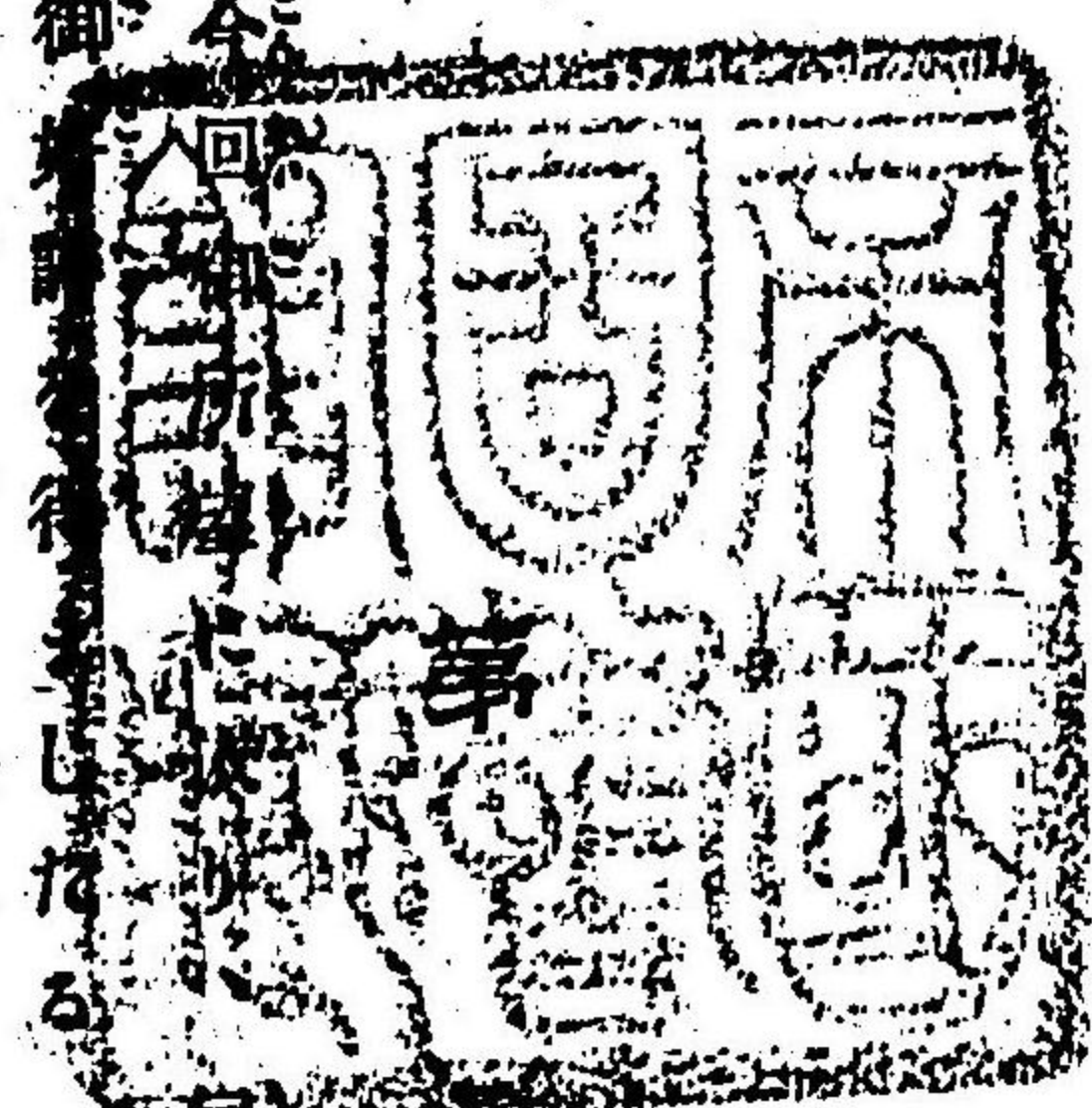
静かな夜
月夜

特

436

竊 坊 清 空

古清水寺 竊坊清空



家滅亡の悲運に出合い、勇婦山吹に連れられて、處々方々と流
來たりましたかと思ふに、尾家の息女櫻姫は、何の邊迄も我が
喝采を願つて置きます、閑居休題、偕ても前編は何の邊迄も我が
口演じ續けますれば、何うか其のお積りで、舊に倍し御愛讀に
清水寺古跡、竊坊清空「と、演題を現はし、相變らず大車輪に
御入所待たしたる、何い上げまする講談は、愛讀諸君より兼て
今何所待たしたる、何い上げまする講談は、愛讀諸君より兼て

玉田玉秀齋講演
山田唯夫速記

44. 8. 24

浪艱難の末、山城小野の里へ落ち延びて参りましたる處、思い
掛けなくも山吹とは許嫁なる、之れも鷺尾家の忠臣たる、篠村
次郎公光に出合ひ、其の詫住居へ連れられ、味氣なき浮世を忍
び居ります内、不圖櫻姫は病氣となり、兩人の介抱も其の甲斐
なく、冥途黄泉の客と相成りました、今更ながら忠臣篠村次郎
公光、まつた山吹の悲歎は一方ならず、泣く／＼櫻姫の亡骸を
棺に入れ、鳥邊野の茶里所へ差て送り込む、然るに奇縁なるか
な、此の茶里所の墓守は誰あろう、先年櫻姫を見初めて煩惱の
心を起し、清水寺を迷いでたる、轟坊の清玄でございまする
清玄は櫻姫の死骸を見て屹驚仰天、ハラ／＼と落涙する、其の
涙が姫の口の中へ流れ込むと、不思議や櫻姫は、ウンと一聲呼吸
吹き返した、清玄大いに喜びんで、再び煩惱の犬は追へども去
らず、頻りに掻き口説く其の言葉に、櫻姫は身も世もあられす
逃つ惑いつして居る折柄、豈に剛らんや表より、バラリ飛び込

んだる身の丈け抜群の男あり、清玄が櫻姫を手込みになさんと
凄まじき形相にて追つ駈けて居るを見るより早く、兎角の猶豫
もあらせず、バツと飛び掛り、清玄の首筋掴み、頭顱倒と其の
場へ差て投げ出しますると云ふ處迄、申し述べ置きましたる事
にございまする、然るに今しも乗り込み来たつたる件は、男は、
猛り狂ふ清玄坊を投げ付けて置いて、ヒヨイと櫻姫の顔打ち眺
め、男ヤ、貴女様は鷺尾家の御息女櫻姫ツ……之りや何うじ
や……と、一時は余りの意外に、タラ／＼と背後へ踏跟き、暫
し茫然として居りましたが、纏て氣を取り直して聲荒らげ、男
ヤイ、汝法師の身として憎き振舞を爲す奴じや、假りにも佛道
に入る身を以て、斯かる所業に及ぶとは何事ぞ、此の姫君こそ
は、我が御主君鷺尾十郎左衛門様の御息女なるわい、生命ばか
りは助けてやる、ソモ此の男は之れ何者であるかと申し立ち出で
んとする、ソモ此の男は之れ何者であるかと申し立ち出で

轟ふ姫を渡してなるものか、三世の諸佛に憎まれて、天魔の見
 入りし此の清玄、假令生皮を剥かれ、ズタ／＼に切り刻まれて
 も、思い込んだる一念は、ヤツカ通さで置くべきかッ、逆も奈
 落に沈む汚れた我が身、イデヤ姫諸共に伴れ行かん……其處放
 せ／＼……と、叫びながら荒れに荒れて飛び掛る、間野彌陀次
 郎も今は詮方なく、之れが大江山で自分が拾い取つた、赤坊の
 戒刀引き抜き、ヤツと一聲振り廻はすと、手先き狂つて清玄の
 肩口深く切り込んだ、何かは以て堪るべき、清玄はアツと叫ん
 で、挫乎と其の場へ打ち倒れる、陀彌次郎も屹然仰天して、彌
 ヤ、失策つた、切る積りではなかつたが、誤つた事いたした
 思はぬ殺生をして不憫である……左りながら姫君の御身には代
 へがたし……と、お姫様、決して御心配には及びません、手前は間
 彌サア、お姫様、決して御心配には及びません、手前は間

れぞ間野彌陀次郎でありまして、諸國漫遊より立ち歸り、粟生
 野の光明寺に足を留めて居りましたが、主君鷲尾十郎左衛門義
 治公は、信太平太夫の爲めに討たれ給い、鷲尾家は滅亡、一家
 郎黨はチリ／＼バラ／＼になつて行衛不明と聞いて、大いに悲
 しみ、何とぞして平太夫を討ち倒し、主家を再興なさんものと
 思い立ち、殊勝にも念佛修行者に身を扮し、彼方此方に徘徊し
 て、密かに同志の忠臣義士と語り、互いに氣脈を通じて、復
 讐を謀らんもの、時の到るを待ち、今宵圖らすも此の鳥邊野
 原を通り掛り、婦女の悲鳴を聞いて、馳せ付けて来た次第で
 さいます、櫻姫も彌陀次郎の顔は今迄見知らねども、我が家
 の忠臣と思ひましたる處より、大いに喜び、地獄で佛に逢つ
 たる心地して、其の儘手を引かれて行かんとする、倒れたる清
 玄はムク／＼と起き上がるが早い、周章て、彌陀次郎の前に立
 ち塞がり、清ヤア、邪魔すると許しは置かぬぞッ、之れ迄戀い

竊 坊 清 空

かりなし、豪氣の彌陀次郎は大喝一聲叫びもあへず、
不埒な坊主奴ッ、其處動くなッ、と、振り下した太刀の下に、
憫れ清玄坊は悲鳴の聲共、合破と其の場へ打つ倒れる、櫻姫
は此の体見るより、魂も身に添はず、裾も袖も清玄の爲めに引
き裂かれ喰い破られ、夢路をたざる心地して、歩み兼たる手を
取つて、彌陀次郎は一町ばかり驅け出したる其の折しも、一
俄かに掻き曇り、大雨は車軸を流すが如く、ザア／＼と降
り頻り、お負けに暴風さへ加はつて、一步も進み難く、兩人は
吹き戻されて、行く途端に、斯はソモ如何に、一團の陰火炎
と背後の方を振り向く途端に、燃へ上る、彌ハテ怪しや、偕て
は今切り殺した墓守の怨靈なるかッ、と、驚いて居る刹那、
傍への柳の梢に、朦朧と現はれたる清玄の姿は、手を垂れて恨
めしそうに兩人を眺め、清恨めしや櫻姫、死んでも思いを遂げ

竊 坊 清 空

野彌陀次郎と申しまして、御父君には大恩受けたるもの、一刻
も早く此の處を落ち延びませう、と、勢わり慰めながら、手を
引いてバラ／＼と駆け出たす、飽造思い込んだる清玄は、之れ
が現在自分の異腹りの妹とは神ならぬ身の知る由もなく、朱に
染まつたる肩先を押しへてムックと起き上り、同じく後より走り
掛つて、櫻姫の袖を捉へ、清ア、苦しい……恨めしや櫻姫、
腹立たしや其處な男、彼様な目に遭はされるも之れも誰ゆへぞ
や、生きながら地獄の苦痛を見る此の恨み、生かわり死にかわ
り……思い知らさで止むべきかッ……と、云ひつ、又もや、
を目掛けて武者振り附く、流石の間野彌陀次郎も、或いは呆れ
且つ怒り、彌ヤア、執念深い坊主奴ッ、最ふ此の上は仕方がな
い、覺悟せよッ、と、云ふより早く、ヤッ、とばかりに抜き討ち
に切り付けると、清玄は二ヶ處の深手に、向も屈せず、又も驅け
寄り立ち塞がり、ハッタと睨んだ其の顔色、恐ろしなると云ふば

其の姿が月光りに際子へ映つたのを見た應舉は、
 へ垂れたので、見る影もない姿でございませう、
 せ衰へて、頭髪と云つたら、蓬々として散らなり、
 病氣で、其の姿がヒヨイと障子へ映つた、何んしろ永らくの
 りました、其の姿がヒヨイと障子へ映つた、何んしろ永らくの
 せ、手洗鉢で手を洗い、水の着いた手を力なげに下へ向けて振
 つて、トボくと柱につかまり障子に絶つて、漸々用便を済ま
 氣であつて、永らく煩い付いて居る、今しも雪隠へ行こうと思
 る月影を眺めて、考へ込んで居ります、折柄、丁度應舉の妻君は病
 敷に座り、燈火も付けず、細目に障子を開いて、庭に映つて居
 あると思ひ立ち、種々と苦心をした末、或る夜の事、應舉が座
 を見た事が、い、其處で何うか一つ幽霊の繪を書きたいもので
 はメン、苦心をいたしましたもので、應舉自身も幽霊の正体に
 ます、何故應舉が幽霊の繪が上手か、と云ひまするに、之れに
 ます、何故應舉が幽霊の繪が上手か、と云ひまするに、之れに

斯の有名人なる丸山應舉は、幽霊の繪が天下第一品であつたと申し、
 て置き、其の場を落ち、御世に於きましては、幽霊の様なものは、能く繪なぞでは見
 奇、怪なる事は、イロ／＼あつた者と見へます、序に一寸申し上げ
 あり、方今明治の御世に於きましては、幽霊の様なものは、能く繪なぞでは見
 其の、血刀振り立て、切り拂い、首尾早く姫を脊負つて、漸々
 と、間野彌陀次郎の一刀喰つて、手早く姫を脊負つて、漸々
 幽霊になつて迄、姫君を惱まし奉つるとは、憎き振舞、忠義に凝つ
 は、叫はじと、怒りの聲を荒らげて、彌陀次郎は、心弱くて
 らず、タシ、後ろ髪を引き戻される、彌陀次郎は、思はず知
 手を振り廻はすよと見へたるが、櫻姫と彌陀次郎は、思はず知
 る積りじや、一足も向ふへ違つてなるものか……と、云ひつ、

竊 坊 清 空

て 應 之 曲 靈 には 以て 來い である 一と、直 其の 姿を 寫し 取り 之れ 曲 靈 には 以て 來い である 一と、直 一つ も ない、皆 下へ 垂れて 居り ます 手 を 上へ 揚 げて 居る 奴は 一 始まつた の あり ませ して、 隨分 工夫 を 凝し た もの と 見へ ます イヤ 之れ は 餘計 の お話 して、 然る 間 野 彌 陀 次 郎 は、 櫻 姫 を 脊 負 つて、 雨も 晴れ 風も 止んだ 様子 に、 彼 是れ 十町 ばかり も 來ると、 何う 降し 彌 陀 次 郎 は、 人 間の 執念 と云ふ もの は、 恐ろしい 者で ござ います、 然し 手前 が お附き 添い 申して 居ります、 以上 は、 少し も お氣遣い には 及び ませ せん、 と、 櫻 姫 を 胸 まで 抱き 寄 せ、 向ふ より 來掛る 二人 の 足音、 樹にも 萱にも 心を 置く 間 野 彌 陀 次 郎 は、 姫 を 背 後に 庇ふ て 途を 除け、 何者 やら んと スレ 違 います、 然し 手前 が お附き 添い 申して 居ります、 以上 は、 少し

竊 坊 清 空

ます から、 彌 陀 次 郎 は 聲 を 掛け、 彌 陀 次 郎 は、 御身 は 篠村 氏 で ござ らぬ か、 オ、 山 吹殿 も、 呼び 留め られて 篠村 次 郎 は、 立ち 留り、 次 子ニ、 拙者 を 篠村 次 郎 と 御存 知の 貴殿 は、 彌 陀 次 郎 で ござ る、 次 エ、 ツ、 借て は 間 野 氏 か、 ツ、 珍らしい 對面 似合 はん でお 公光 と ざら んか、 之れ は 總尾 家の 御息 女、 櫻 姫、 似合 はん でお 公光 と ざら んか、 之れ は 總尾 家の 御息 女、 櫻 姫、 聞いた 次 郎 公光 と ざら んか、 之れ は 總尾 家の 御息 女、 櫻 姫、 元談 も 時に、 こそ よれ、 姫 君 は 確かに お無 くなり 遊ばし、 今頃 は 鳥邊 野の 茶 毘所 で、 お痛 はし や灰になつて ござ る時 分だ、 何の 馬鹿 な 事 を、 云ふ 言葉 の 後より 山 吹は、 半信 半疑 で 走り 寄り、 ツク、 櫻 姫 の 顔 を 覗き 込み、 山 ヤ、 ツ、 正しく 姫 君 様 之り、 何う じや、 次 ナニ、 姫 君 と な、 何れ ツ、 次 オ、 櫻 姫 君 光も 驅け 寄り、 ながら、 櫻 姫 の 姿 を 見上げ 見下し、 次 オ、 櫻 姫 君

じやく、借て合點の行かぬ事である、一体間野氏、之れは如何いたされたのでござる、我々兩人は更らに不審が晴れません、何いたされたのでござる、山吹に絶り付き、櫻オ、公光と山吹、スルト櫻姫も次郎公光と山吹に絶り付き、櫻オ、公光と山吹、逢いたかつた、實は斯様くである、と、涙と共に一伍一什を物語られる、彌陀次郎も今宵圖らず、鳥邊野の庵室へ行つた事より、姫君の危難を救いまいらせられた顛末を話し、彌夫れに、たても、貴殿は此の山吹殿と何處へ参られた、次イヤ、某し、姫の御棺を茶毘所へ送りまいらせ、守護なし居りし處、下僕藤六の報知により、思ひ掛けなく珍事出来、云々の次第でござつて、唯今漸々山吹を取り返し、立ち戻る途中でござる、と、主従四人は互いに身の上を語り合ひ、或いは喜び又は驚き、皆々櫻姫の安泰を祝して居ります、此の時、篠村次郎公光の詔住居へ立ち歸つた、彌陀次郎に向い、次鬼に角、間野氏の忠義は天晴れ威服を仕まつた、然しお話し申したき義は、數々ござるが、此處は往來で都合

第 二 席

が悪い、某しの住家迄お越しあれ、彌イヤ、御同道申そう、と、三人は櫻姫を守護して、篠村次郎公光の詔住居へ立ち歸つて参ります、と云ふ、之れより忠臣の面々が、総尾家再興の旗擧げに及ぶの御物語りは、順々と口演じ上げませう……、借ても篠村次郎公光と山吹は、櫻姫と間野彌陀次郎を伴ない、小野の里へ戻つて参り、次何うも、世の中には不思議の事もあ、るものだ、一旦御死去になつた櫻姫が蘇生遊ばすとは思ひ掛け、ない事とござる、斯く恙なく入りせられたも、之れ偏へに間野、氏のお蔭と云ふもの、有り難く御禮申す、彌何んの、下、の身として、主君をお救い申し上げるは當然の事、お禮には、びませぬ、と、夫より兩人は、彼の相摸の竹の下道にて、一別、以來の事柄を、委細詳しく語り合ひ、又清玄が執着の悪念深く

櫻姫を惱ましたること、之れを殺して姫君を救いたる願末を話
し、櫻姫も傍より、蘇生して清玄に苦しみめられた仔細を語り、
一同無事に合いたるを喜び合つて居る、然るに其の翌日と
相成ると、彌陀次郎は篠村次郎公光と相談して、田島造酒之丞
を始めといひし、此處彼處に隠れて居る、同志の者を訪問なし
信太、平太夫を打つて、亡君、驚尾十郎、左衛門義治公に手向け奉つ
らんと、協議を爲す、め、出立をする、彼れ是れ十日ばかりも
つと、驚尾家忠臣の面々、は、我れ一に、篠村次郎の隠れ家にも
ねて参り、中にも彼の播州の豪族、伴三木之助宗雄も、驚尾家
再興の企謀ありと聞き、勇十郎、左衛門義治の仇を報はんものと
ドシ、乗り込んで来る、人数も十分揃いましたる處より、
一騎當千勇士の連中は、三木の助宗雄を以て大將となし、夫れ
に續いて篠村次郎公光、間野彌陀次郎、田島造酒之丞を始めと
して、荒部三郎、前山四郎、栗村善太、雀部強助、志摩勇平、

船井橋次、和久郎八郎、横引惠六、船城十郎、其の外伴三木
之助の家、數十名、篠村の妻山吹、家來藤六も之れに加はり、
或る暴風の夜に乘じて、ドツとばかりに、信太、平太夫の館に亂
入、なし、惣大将伴三木之助宗雄は、天地に轟く大音聲を張り上
げて、宗ヤア、信太の奴、原確かに聞け、我れこそは驚尾家
忠臣の面々である、お家再興の首途に於いて、信太、平太夫の首
を申し受け、義治公の靈前に手向けん爲め、今夜ワザ、推參
いたしたり、我れと思はんものは、出會へ、今夜ワザ、呼はり、
縦横無盡に切つて廻はる、何んしろ寝入り鼻の事と云ひ、不意
討ちでありますから、信太家の一門郎黨は、周章狼狽してワア
く、騒ぎ立ち、大将信太、平太夫迄が、汚なくも素裸体で飛び
出し、目を擦り、信ソ、レ、驚尾家の餘類の奴等が切り入
つたるぞッ、負けるな掛れい、敵の首を一つ取つたら五兩を遣
る……と、宛で懸賞附きで以て士卒を罵りましたが、勝ち誇

つたる驚尾勢に如何でか敵いませうや、信太勢はサンに討
ち取られ、大將信太夫は三木の助宗雄と一騎打ちの勝負に
及んで、之れ又脆くも最後を遂げる、大將討たれて残兵全から
す、残り奴原は右往左往に散らばり、踏み留つて立ち向ふ者
とてはございませぬ、到頭信太家は滅亡に及ぶ、驚尾勢はドツ
と関の聲を三度挙げ、平太夫の首を切つて其處を引き揚げ、其
の首級を驚尾十郎左衛門義治公の靈前に手向けて、最と懇ろに
追善供養をいたし、夫れより夜を日に次いで、舊の館の跡へ立
派な館を建て、櫻姫を移しまいらせ、上、伴三木之助は一門郎
黨に打ち向い、宗此の上は、草を分け、樹の根を掘つて、野分
方の行方を尋ね出さねば相成らぬ、殊には源九郎判官殿より、
驚尾家に賜はつたる太刀と系圖の一卷を持つて立ち退かれしゆ
へ、此の二つの寶物なき時は、家名相續なり難し、誰れを遣は
したものであろうと、一座を見廻はしますると、道か未席よ

り進み出でたる此の一人は、之れを餘人にあらず、田島造酒之
丞でございませぬ、造アイヤ、野分の方探索の御役目は、某し
に命せられ下されたし、信と御行方を尋ね出して御覽に入れま
する、……と、申し出で、三木の助宗雄は打ち點頭き、宗ウム
誰かと思へば、田島造酒之丞であるか、成程其の方は適當の役目
である、進んで望むとは僥倖であるか、速かに捜し出してお連れ
申して、進んで望むとは僥倖であるか、速かに捜し出してお連れ
は、急ぎ旅立ちの準備を整へ、館を立ち去り、何處を的ともなく出
立する、然るにお話し變つて、怪賊蝦蟇丸に於きましては、都
近くは、呑みであると思ひ、野分の方、秋雨と相談して、日向の
國に趣き、住家を構へて置いて直様歸つて参りますと、野分の
方の秋雨は打ち喜び、野之れは、お歸りなさい、大層早かつ
たではございませぬか、……蝦ウム、實は日向へ行つた處、手下
の奴も深山居つて、直に住家も出来、お客を連れに戻つて来た

のだ、留守中は別に變つた事はなかつたか」と尋ねられて秋
雨は、濟まぬ顔して蝦蟇丸に打ち向い野「イエ、ナニ其の……
申し譯のない事が起つて夫れが爲め夜も寐らく寢る事も出来ず、
大層心配して居りますので……蝦「ナニ、申し譯のない事は一
休何んなことじや……野「ハイ、他でもありませんが、松虫鈴虫
の姉妹の事でござんす、毎日「柴を刈りに山へ遣つて居り
しれた處、此の四五日以前も、何日も通つて行つた儘、夕暮
れ迄も戻つて來ず、何處かへ出奔したもので、お前が歸つて何う云ひ
探しましたかが、皆目行術が判らぬので、お前が歸つて何う云ひ
譯をしたら宜いかと、妾は氣が氣でありませぬ……と、悄然と
して申しますると、蝦蟇丸は舌打ちして「蝦「エ、イ、其奴は惜
しい事をした、斯んな事になろうと知つたら、早く兩女とも賣
り飛ばして置かうものがない……手の内の珠を取られた様なものだ
と、悔みましても仕方がない、其處で蝦蟇丸は思案をいたし、

蝦「イヤ、乃公は之れから直にお前を連れて、日向の國へ行く者
へであつたが、十日や二十日遅れた處で仔細はない、夫よりは
折角の球を無くしては大變だ、年齢は若いが嫖好しの姉妹だ
から、今賣り飛ばしては五十兩や七十兩にはなる代物だ、今迄
養つて置いて、此の儘打放つて置くは惜しいものだ、倍度遠
方へ行くと氣遣いはない、界限に徘徊つて居るだろう、五日や十
日掛つても、他に探し出し、賣り飛ばさなくつちやア承知が出
來ない、お前も寂しがるうが、待ち序に留守して居つてくれな
いか……と、聞いた野「分の方も打ち頭さ野「イエ、妾は何ん
なに叱られるかと心配して居たに、お叱りでないとは忝けない
假令十日でも二十日でも、留守をして居りますから、早く尋ね
て来て下さい……と、快く承知をする、野「分の方には早く尋ね
抜いて居る蝦蟇丸は、大いに喜び、蝦「夫では、之れが行つ
て來るよ……と、仕度をして立ち出で、山中を渡る限なく探し

廻つた末、ボツ／＼黒谷の近傍へ歩つて参り、一軒の百姓家へ
出て参り、蝦「アイヤ、一寸物を尋ねる男へい、何んな御用で
も、イヤ、外ではないが、此の邊りへ年の頃は十二三歳の姉妹の
たろうか……」と、聞いた百姓はハタと膝を叩き「百へエ、其の
姉妹なら存知て居ます、此の五六日以前に、黒谷の法然上人
様の、お弟子の常照坊様が、何處かの山奥で助けて戻つたと云ふ
話し、確か松虫鈴虫とか奇体な名前でございます……」蝦「ナニ
借しては、黒谷の常照坊が連れて歸つたと申すか、夫れは忝けない
イヤ彼の姉妹は大事の代物……」ナニ乃公の娘であるのだ……百
ない……」蝦「ウム、繼母だから斯様に苛めて困つて居る、夫では
黒谷へ尋ねて行つたら居るだらうか」百「へい居りますともく
昨日お寺詣りの時にチラと見ました處、最ふチャンと頭を剃つ

て頭を丸め、手に珠數を持つて姉妹が喜悅んで居りました。蝦「
エ、ツ、ジャア厄になたのかッ」百「へエ、其様な様子でござい
ます、蝦「其奴は、甚だ以て怪しからん、現在親の乃公に知らせ
もせず、勝手の手の眞似を爲れて堪るものか、ヨシ之れより一番乗
り込んで、生佛けも法然上人もあるものか、坊主首を引つ捉へ
一論判に及んで遣らなきや相成らん」と、蝦「蠶丸はバラリ百姓
家を飛び出て、急ぎ黒谷へ出て参り、ドス／＼と血相變へて山
門へ乗り込み、玄關へ立ち張開つて、蝦「頼もう……」スルト
奥より、アイと優しい聲がして、出て参つたは之れぞ餘人にあ
らず、姉の松虫でございませう、青々と削りたての可愛らしい
坊主頭を燦かに下げ、兩手を疊についで、松「ハイ、何に御用に
ございませう」と、云ひつゝ、ヒョイと面を上げると、豈に圖ら
んや蠶丸でありませうから、アツとばかりに仰天なし、其の儘
奥へ駆け込まんとする、何處い遣らしと、猿臂を延した蠶丸

アがれツ、と、蝦蟇丸は慘散に悪口雜言に及んだ末、ドシ、
歸るに、誰が文句を云ふ奴があるものか、黙つて退引んで居や
る慰もうとは、彼の此處な生くる坊主奴、旨い事を吐いて姉妹二人
立ち去れの、佛罰が當るのとは何たる事だ、罰は大鼓の皮に當
に頭を削り落し、見る影もない姿にして置いて、速かに置いて
ろ、う、法然上人も絲瓜もあるものか、人の娘を誘拐して、勝手
丸はカラ、と嘲笑い、蝦蟇丸ハ、貴様が常照阿闍梨であ
其の松虫鈴虫は上人様の大事な御弟子である、と、聞いた蝦蟇
狼藉に及ぶと佛罰を蒙るぞ、速かに姉妹を置いて立ち去れ
コレ、其方は何者じや、法然上人の御在ます御寺にも憚らず、
て現はれ出でたる常照阿闍梨、上人の御在ます御寺にも憚らず、
りの小脇に抱いたのだ、泣面さらすと承知しないぞ、と、右左
いに來てやつたのだ、泣面さらすと承知しないぞ、と、右左

は、グイと松虫の襟頭掴み、蝦蟇丸、此處な松虫奴、能くも
此の養父に黙つて、尼法師になりやアがつたな、サア妹の鈴虫
は何處に居る……之れへ出る、ワザ、取り戻しに來たのだぞ
ッ、と、大聲で怒鳴り付けて居る、松虫は驚に捕られた小雀の
如く、と、松ア、何うぞ阿父さん助け下さいませ、妾等には
知らせせす、阿母さんを手に掛け殺すとは胸慾でござんす、
之れ迄御養育を受けた御恩を思へば、別に恨みとは存じません
其の代り歸る事丈けは許して下さいませ、蝦蟇丸、イ、勝手な口
を利きやアがるな、手前等の身体は煮て喰ほうと焼いて食ほ
うと、此の養父の自由自在……汝ツ藻掻きやアがるな、と
悲鳴を擧げて泣き叫ぶ事をせす、手許にズル、と引き寄
せて、突然小脇に引つ抱へ、奥へ踏み込まんとする出合い頭に
妹の鈴虫は姉の泣き聲を聞き付けて、何事やらんと立ち出で來る
奴、同じくグツと捕へて動かさず、蝦蟇丸、イ、鈴虫奴、乃公が迎

と門前へ立ち出でんとする其の折柄、表より入り込み来たつた此の一人は、矢張り坊主姿ではありませんが、身の丈七尺有餘寸にいたして、眼孔爛々人射り、手に十五六貫の鐵杖を突き鳴らし、搖ぐ様に夫れへ参りました。此の場の有様を見る等しく、スックと蝦蟇丸の面前に立ち塞り、左手を延して蝦蟇丸の首筋ムンツと引つ掴み、物をも云はずグイと宙に提げますると云ふ、サア此の豪僧は一体之れ何人でありませうや、ソハ次席に伺い上げまする……

第三席

豪僧は爛々たる眼を怒らし、ハツタと蝦蟇丸を睨まへて、僧黙ア、痛い……何奴だ、思はず胸に抱へて居る松虫鈴虫を放し、蝦蟇丸は爛々たる眼を怒らし、ハツタと蝦蟇丸を睨まへて、僧黙

れッ此奴、猥りに當寺へ踏ん込み、上人御秘藏の弟子を奪い去らんとは言語同断、我が目に掛つたる以上は、見遁す譯に相成らん、其の方は一体何者だッ……蝦イヤ、何者でも宜い、放し外弱い奴だ、序に愚僧の名を語つて聞かす、耳を埃つて能く聞げッ、我れこそは保元平治の年間に於いて、普ねく天下に其の名を轟かしたる、坂東一の旗頭熊谷次郎直實の身の果てたぞッ今は運生坊と云つて佛門に歸依なし、當時我が手に掛けて討死いたしたる者の善提を吊はん爲め、諸國漫遊の折柄、當黒谷に開居遊ばす、法然上人の高徳を慕ひ、數日を前より逗留して、佛道修行に及んで居るのである……と云ふを聞いたる蝦蟇丸は、アツと屹然仰天して、蝦エ、ッ、借ては源家に於いて名題の坂東武者、殊に一の谷の合戦に拔群の功名を爲したと云ふ、熊谷次郎直實とは貴様かッ、運生坊と云ふ豪僧は手前であつた

の 葉 傑 に 掛 つ て は 叶 は ない、健 かに 腰 骨 打 つ て、暫 ら く は 起 き
も 上 ら ず 蠢 動 いて 居 る、寺 内 で は 蓮 生 坊 が、松 虫 鈴 虫 の 手 を 取
つ て 助 け 起 し 蓮 生 坊 は 切 れ、天 下 晴 れ て 立 派 の 身 体 と な っ た の
い、之 れ で 親 子 の 縁 は 切 れ、天 下 晴 れ て 立 派 の 身 体 と な っ た の
じ や、今 迄 は 悪 徒 を 親 に 持 つ て、嗚 情 か つ た であ ろ う、此 の 後
は 一 心 不 亂 に 佛 の 道 に 仕 へ る が 宜 い、イ ヤ 宜 い 氣 味 であ つ た、
ア ム、表 には 蝦 蟇 丸 が 漸 々 起 き 上 つ て 跋 足 引 き、
る、表 には 蝦 蟇 丸 が 漸 々 起 き 上 つ て 跋 足 引 き、
忌 々 し い 野 郎 だ、折 角 手 に 入 つ た 姉 妹 を、取 り 返 さ れ た 上 に 投
げ 出 さ れ る と は 情 ない、然 し 彼 奴 が 坂 東 一 の 旗 頭 熊 谷 次 郎 直 實
の 成 れ の 果 と は 驚 いた、イ ヤ 畢 圖 く して 居 て は 一 命 に 關 は る
生 命 あ つ て の 物 種 だ、道 々 の 体 で 殘 念 そ う に 立 ち 去 つ た、
應 て 蝦 蟇 丸 は 自 分 の 隠 れ 家 近 く と 相 成 る と、何 に 喰 は ぬ 顔 して
戻 つ て 參 り 蝦 蟇 丸 は 自 分 の 隠 れ 家 近 く と 相 成 る と、何 に 喰 は ぬ 顔 して

か ッ …… 蓮 生 坊 …… 今 更 ら 驚 く に 及 ば ん、一 旦 佛 門 に 入 り し
と 雖 も、悪 人 と 見 れ ば 遠 慮 會 釋 も ない 蓮 生 坊 だ、サ ア 何 う だ、
此 の 後 二 度 と 再 び 當 山 へ 足 踏 み 込 ま ぬ と あ ら ば 許 して や る、左
も ない 時 には 即 座 に 素 首 を 引 き 抜 き、佛 符 を 加 へ る か ら 覺 悟 し
ろ う …… 當 山 へ は 決 して 足 を 踏 み 込 ま ぬ、松 虫 鈴 虫 と は 親 子 の
縁 を 切 つ て 赤 の 他 人 だ、途 中 で 出 合 つ て も 言 葉 も 交 さ ぬ …… 蓮
ア ハ、然 ら ば 其 の 方 は 松 虫 鈴 虫 の 養 父 と か 云 へ る、海 賊
の 張 本 蝦 蟇 丸 と は 汝 よ な、諸 人 の 難 義 を 救 ふ 爲 め、此 の 處 に 於
い て 捨 り 潰 す 筈 な れ ど、兩 人 の 孝 女 に 對 して、一 度 は 助 け て 遣
は す、キ リ、此 の 場 を 立 ち 去 れ …… 蓮 生 坊 …… 今 更 ら 驚 く に 及 ば ん、
谷 次 郎 直 實 の 蓮 生 坊 は、ヤ ツ と 一 聲 掛 け る と 等 し く、蝦 蟇 丸 の
身 体 は キ リ、筋 斗 打 つ て、七 八 間 向 ふ の 高 塚 越 して、
大 道 へ 控 乎 と 落 ち る、流 石 豪 膽 不 敵 の 怪 賊 蝦 蟇 丸 も、天 下 名 題

はありませんか、十日も二十日も掛るとお云ひだつたが、僅か
二三日で判りましたかへ……蝦ウム、イヤ何うしても判らないが
乃公の考へでは多分姉妹は山の中ぞ、狼にでも噛み殺されて死ん
だ者と考へる、夫れゆへ探す事は最ふ廢して、早く日向へ行
積りだ、野成程、夫れも宜ふござんせう、夫では急ぎ仕度をし
やうではありませんか、蝦ウム、手前も荷物を片付けてくれ、
野ア、合點でござんす、野分の方は甲斐なく、旅荷
物を取り、片付けて居る、何んしろ尾家の奥方野分の方もあ
ろ、う身が、海賊の張本蝦蕨に身を任せて、早や一ケ年ばかり
の星霜が経ちますので、大分世帯じみて、言葉使いさへ悉皆變
つて仕舞つた、今しも野分の方は、蝦蕨の行李を開き、衣
を取り出して居ると、底の方から尾長の蝦蕨が澤山に出て來た
と、野分の方は心中にハツと驚き、野ヤ、此の尾長の蝦蕨は……
と、既かしく思つたが、根が奸智に長けた婦女であるから、何

氣なき体にて取り片付けを済まし、其の夜蝦蕨と枕を並べて
打ち臥しましたる時に、野分の方は蝦蕨に向つて野コレ平
五郎殿、御身と妾は斯様な交情になつて居るに、未だ隠し立て
をして居られるとは水臭いではありませんか……と、突然に云
はれて、蝦蕨丸は一圓合點が行かず、蝦オヤッ、手前は何を云
ふのじや、お前は乃公の戀女房だから、之れ迄少しも隠し立て
をした事はなすが……野イエ、夫れが隠し立てを爲さるの
です、では尋ねますか、御身は先年丹波の國桑田郡鷺尾の館へ捕
はれて、獄舎を破つて逃げ出された事はありませんか……と、問
はれて、蝦蕨丸は棒をいじりました、之れも何に喰はぬ顔し
て、蝦アハ、何を云ふかと思へば、少とも覺へぬ事
を尋ねるわい、乃公は左様な覺へは會てない、満らぬ事を聞く
ものじや、一体夫れが何うしたのだ、野イエ、他ではありませ
んが、御身の行李の中にある尾長の蝦蕨は、尋常のものが持つ

りに近海を荒し居つたる處、後白河院の御時、鷲尾十郎左衛門
 義治の曾祖父に當る、鷲尾大郎維綱に征伐されて、敢なく最後
 を遂げられた、シテ見れば鷲尾家は父の仇敵も同然である、依
 つて當主十郎左衛門義治を討つて、我が父の安執を晴し奉つら
 んと、種々様々苦心をいたした末、當時信太平太夫と鷲尾家と
 仲悪きを幸い、智慧のない平太夫を巧く説き付け、首尾能く鷲
 尾家を滅ぼしたの理由も、云は、乃公の計略だ、まつた此の蝦
 澤山持つて居る理由は、新たに手下の出來たる時、之れを與へ
 て仲間の印しといたす手段である、シテ御身は何う云ふ譯で、
 蝦蟇の事を見知り居るぞと、問い返されて野分の方は、野
 ンと返答に差し詰りましたが、左あらぬ体で笑いに紛らし、野
 ハ、返答に差し詰りましたが、左あらぬ体で笑いに紛らし、野
 マア左様な事は何うでも宜いではございませぬか、久しぶり、快
 よく腹みませう……と、淫婦の本性を現はして、巧く其の場は

て居る筈がない、彼れは蝦蟇使いと云ふ仲間の盗賊が、互いに
 目證しの爲め携へて居るとか聞きました、先年鷲尾家へ捕はれ
 た四人の盗賊は、何れも蝦蟇使いの仲間、蝦蟇丸と云ふ張本
 が逃げ出したと聞いて居りましたゆへ、夫れで尋ねたのでござ
 います……夫婦の間柄で包み隠しては、隔て心があつて誠に氣
 持の悪いもの……眞實を話して下さつても宜いではありません
 か……と、蝦蟇丸を呈して口説き立てますと、蝦蟇丸は暫らく黙然
 として何か考へ込んで居りましたが、應て莞爾といたし、如何
 ヤ、左様問い詰められては、最早や包み隠す都合でない、如何
 にも乃公は蝦蟇丸と云つて、今天下に名高き蝦蟇使の盗賊の首
 領である……イヤチ驚くには及ばない、今こそ盗賊となり下つ
 ては居るが、之れにはダン／＼仔細のある事、元我が家は旭將
 軍木曾冠者義仲公の血緒にいたして、義仲公滅亡の後、我が父
 木曾冠者利光殿には、西海に落ち延びて海賊の張本となり、頻

り出まし、手早く開いて見ると、豈に圖らんや驚尾家の系圖が出
 でましたから、流石の蝦蟇丸もアツと仰天なし、サテこそ、何
 尋常の婦女にあらずと思つたが、驚尾家の内室とは驚いた、何
 うも今迄の振舞を見るに、男子に勝つた腕前ある上に、膽の太
 い婦女だと思つて居た、之れでは、劍を抱いて寝て居る様なもの
 だ、イヤ劍呑く、何日何時寝首を掻かれるやも判らん、之れ
 なら身の素性を名乗るのではなかつた、然し幾等惚れた婦女で
 も、驚尾家の内室と知つては、生かして置く譯には行かない、
 酔つ拂つて寝て居るを幸い、後日の愛いを除くに如すと、斯
 様に思いましたる處より、其の夜は一緒に枕を並べて床に附き
 翌日になつて野分の方は、何心なく鏡臺に向い、化粧をして居
 る油断を見澄まし、蝦蟇丸は背後より窺い寄り、パツと飛び掛
 つて捻じ伏せ、悲鳴を上げる事もせず、高小手に縋り上
 げました、野分の方は屹驚仰天して、野コレ、蝦蟇丸殿、御身は

誤魔化し附けました、然るに翌日より蝦蟇丸は、秋雨の胸中を
 疑がい、蝦何うも、昨夜秋雨が尋ねた事は、ダシ、腑に落ち
 ない事がある、彼の持つて居る太刀と云ひ、最初から普通の婦女
 肌身離さず大切に、彼の持つて居る守り袋と云ひ、最初から普通
 ではないと睨んで居るのだが、問ふた處で容易に實事は云ふ氣
 遣いが無い、ヨシ一ツ計略に掛けてやろうと、胸中に思案を
 いたして、其の翌日と相成ると、蝦蟇丸は最も機嫌よく、蝦サ
 ア、最ふ此の家に居るのも二三日だ、今日はウンと酔つて見や
 うでは無いか、野ホ、野、宜ふござんす、夫ではお肴を何か
 拵へませう、と、野分の方は直に一鉢二鉢の肴を料理して、
 酒の爛して持つて来る、兩人差し向いとなつて、差しつ献され
 つ、面白可笑しく笑い興じ、酒酌み交はして居りましたが、蝦
 蟇丸は胸に一物ありますからして、充分に野分の方を酔はし、
 前後正体もなく寝入つたる頃を窺い、窺つと彼の錦の守袋を取
 り出し、手早く開いて見ると、豈に圖らんや驚尾家の系圖が出

ある、最早通れぬ處だ、不慣ながら観念せよ、今迄抱いて寝た
情けを思い、痛くない様に殺してやる、と云はれて野分の方
は、齒噛みをして残念がりに、野夫では、其の方に先を越され
か、一昨夜の素性を聞き、良人義殿を討つたる當の仇と始
めて知り、如何にもして隙を窺い、首掻き切つて遣らんもの
夫れとはなく、規ふて居たのである、妻一旦其の方か愛情の切あ
るに心迷い、肌身を任せて自由になり、斯様な荒屋に月日を送
つて居るとは云へ、此の度日向の國へ連れ行かん事出さず、
若し遠國に參りなば、此の頃戀しと思ふ娘に逢ふ事も出さず、
出立の時迄に汝を殺して此處を逃げ出で、娘櫻姫の行方を尋ね
んもの、密かに機り待つて居たのであるぞ、ア、口惜し
い情けない、其の方に先んせられて見す、生命を取られね
ばならんか、卑怯者奴ッ……早く組を解き立て、尋常の勝負をせよ
ツ、柳眉を逆立て、狂氣の如く喚き立てる、之れを聞いた

氣でも狂つたか、妾に何の罪あつて、斯んなに括ります、早ふ
解いて下さんせ……と、呼べど叫べど、蝦蟇丸は答へもせず、
柱へ手早く縛り付けて、秋雨と云つたは眞赤な偽はり、眞實は丹波
皇居に仕へたる官女、秋雨と云つたは眞赤な偽はり、眞實は丹波
の國桑原郡の豪族、鷲尾十郎左衛門義治の妻であらうがな、昨
夜其の方の酔つ拂つたる隙に、守り袋を開いて見ると、鷲尾家
に無く叶はぬ系圖の一巻が出たわやい、斯くなる上は、鷲尾家
かし置くと譯には行かん、之れ迄平田平四郎の一子平五郎と偽つ
て居つたが、鷲尾家とは重ね、信太平太夫を説き付け、彼れに加擔し
以て上は、鷲尾家とは重ね、信太平太夫を説き付け、彼れに加擔し
骨髄に徹して忘れ難く、主入義治を討つて日頃の望を遂げたの
で、鷲尾の館に亂入し、難く、主入義治を討つて日頃の望を遂げたの
一命に關するは、然るに仇の片割れ同然なる汝を生け置いては、乃公の

之丞なるかツ、能くぞ妾の危難を救い呉れた、嬉しいぞよ造酒
する一と、云ふ顔眺めた野分の方には野オ、其方は田島造酒
しく一禮なし、武ハツ、御健勝の体を拜し、恐悦至極に存じま
方の側に進み、手早く縛めの細を解き上座に据へて、ウヤク
み、悠然と現はれ出で、倒れし蝦蟇丸は見向きもせず、野分の
松林の中より旅装束せし一人の武士、重藤の弓を小脇に抱い込
見るより野分の方には、何うした事かと打ち驚いて居る其の折柄
べき、アツと一聲叫びもあへず、忽ち倒れて即死する、此の体
豪氣極まる蝦蟇丸も、屈竟の矢坪を遣られて、何かは以て堪る
る…

第 四 席

ばかりに射貫きますると云ふ、サア此の場の始末は何うなりま
せうや、一寸一吹いたしまして、次席のお物語りといたします
る…

いて、彼の時、一筋の白羽の箭飛び来り、蝦蟇丸の胸板を深く、グサと
下、に、何れ野分の方には真二ツになつたかと思いの外、此の時遅
であるから、勇氣を勵まし、蛇を掴んで足下に投げ捨て、刀の
なく相成つた、アツと驚いた蝦蟇丸は、素より極悪非道の怪賊
九の利腕に纏い附くと、忽ち蝦蟇丸の腕は痺れて、自由が利か
ると見る間に、一ツの蛇が何處からともなく現はれ出で、蝦蟇丸
折こそあれや、一天俄かに振り上げて、一陣の怪風サツと吹き來
唯一討ちとヤツとばかりに振上げて、咄嗟切り下さんとする
の冥途へ行けいーと、云ふより早く、氷なす一刀引き抜き、
儘で殺すのが一番早いわ、兎や角云はずと觀念して、死出三途
構はん、籠を開いて鳥を飛ばして仕舞ほうよりは、入れてある
蝦蟇丸はカラ／＼と打ち笑い、アハハハハハ、単怯でも何でも

造之丞... 奥方... 喜悦... 事限... 打ち喜悦び 野夫... 目
造ハツ、奥方の御行衛を尋ねんもの、造酒之丞は夫れへ手を支へ、
る末、漸く此の山中に隠れ住み給ふ由しを聞き出し、勇み返
つて此の處迄参りしに、思い掛けなく危急の御場合、幸い携へ
し矢弓を以て悪人を射倒し、御救い奉つりしは誠に御運の盡き
ざる處、シテ奥様には、何故あつて斯かる山中にお越し遊
ばされました... 尋ねられて野分の方は、眞實虚言打ち交
せて、一伍一什を物語つた上、野夫より、第一に聞きたいは娘
の身の上、櫻姫は無事で居るか... 造ハ、第一に聞きたいは娘
下されたし、先の日三木の助宗雄様を大將となし、篤尾家一門
勇士の面々、信太平大夫の館に夜襲を掛け、首尾能く彼れを討
ち取り、桑田の庄を取り戻して御館を新築なし、姫上を移しま
いらせ、其の上にて拙者は奥様の御行衛詮索の命を受け、斯く
處々方々と徘徊して居る次第... 始終の様子を事も詳かに

申し上げる、野分の方はマヌク、打ち喜悦び 野夫... 目
出度い事である、此の蝦蟇丸と云ふは、信太平大夫の味方とな
り、主君を討つたるものであるぞ、聞いて造酒之丞も大い
に喜悦び、造ナニ、此奴が御主君様を討ち奉つた蝦蟇丸で
ざるかツ、剛らすも亡君の仇を報い、斯様な嬉しい事はござい
ません... 主従兩人は互いに其の無事なるを祝し合つて居
る、此の時造酒之丞は野分の方に向つて、造時に奥様、何故貴
女は蝦蟇丸なぞと一緒に、永の月日をお暮しでございました
と、問はれて野分の方は思はず顔赤らめ、暫し返答に詰つて居
り、問はれたが、左あらぬ体で眞實しやかに、野イヤ、實は云々斯
様、である、蝦蟇丸の爲めに此の隠れ家へ連れ込まれ、無体
の戀慕を云ひ掛ければ、夫れを飽き聞き入れぬゆへ、今日も今
日とて斯様な責苦、察してたも造酒之丞... 造酒之丞は、今日も今
なつて居つた事は包み隠して云はず、源九郎判官より賜はつた

轟 坊 清 空

立てて... 物の前後を圍み、云ふ聲に應じて家來の面々は、ハツと答へて乗る寶刀、及び系圖を取り出して野此の二品は、幸いに肌身に附けて居りましたので、蝦蟇九にも取り上げられず、無事であつたは、何よりの幸福... 田島造酒之丞は立ち出で、扇を上げて差招く、押し頂いて取り納め、應て表へ立ち出で、扇を上げて差し、招く、と、林の中より十五七人の供人が、梨地に高時繪をして、カ、光つて居る立派な乗物を擔いで参り、又一人が一襲ねの衣物を持つて立ち現はれ、件人の荒屋へ静々練り込み、野分の方に着物を奉つる、野分の方には、夫れと着代へられ、今迄着て居る、田島造酒之丞は、其の衣服を脱ぎ捨て、一刻も早く御歸國あつて然るべし、と、島造酒之丞は、莞爾として嬉しうに、徐々と乗物に乗り移ると、野分の方には、莞爾として嬉しうに、徐々と乗物を千切つて之れに包み、自身に小脇へ抱い込んで、造者共、

轟 坊 清 空

立てて... 物の前後を圍み、云ふ聲に應じて家來の面々は、ハツと答へて乗る寶刀、及び系圖を取り出して野此の二品は、幸いに肌身に附けて居りましたので、蝦蟇九にも取り上げられず、無事であつたは、何よりの幸福... 田島造酒之丞は立ち出で、扇を上げて差招く、押し頂いて取り納め、應て表へ立ち出で、扇を上げて差し、招く、と、林の中より十五七人の供人が、梨地に高時繪をして、カ、光つて居る立派な乗物を擔いで参り、又一人が一襲ねの衣物を持つて立ち現はれ、件人の荒屋へ静々練り込み、野分の方に着物を奉つる、野分の方には、夫れと着代へられ、今迄着て居る、田島造酒之丞は、其の衣服を脱ぎ捨て、一刻も早く御歸國あつて然るべし、と、島造酒之丞は、莞爾として嬉しうに、徐々と乗物に乗り移ると、野分の方には、莞爾として嬉しうに、徐々と乗物を千切つて之れに包み、自身に小脇へ抱い込んで、造者共、

高木彌曾太郎と云ふは、鷲尾家の老臣高木玄蕃光成の長男であ
した、イハハヤ何うも、我が子の櫻姫より若い彌曾太郎の事
の威光を以て聞かぬ、密かに不義の快楽に耽つて居りま
す、獨り寝の闇に、有る事か、小姓の高木彌
曾太郎と云つて、當年十八歳になる美男子に思ひ懸け、
て、髪化粧と云ふ、梅であるから五ッ六ッは若く見へる、
でありまして、年齢は四十五歳の姥櫻ではございませぬ、
や一つの珍事出来と申しすまるは、全体野分の方には非常な淫婦
め、餘念ございませぬ、夫れは借て置き、茲に鷲尾の家にも
結び、之れに往つて佛堂建立の志願を貫かんと、専ら勸化に勤
どなり、頭を剃つて法衣を纏ひ、粟生野光明寺の境内に庵を
建て、瓢然と鷲尾の館を立ち出で、夫より常照阿闍梨の徒弟
く暇を取らせまする、間野彌陀次郎は大いに喜び、厚く禮を
述べ、瓢然と鷲尾の館を立ち出で、夫より常照阿闍梨の徒弟
となり、頭を剃つて法衣を纏ひ、粟生野光明寺の境内に庵を
建て、瓢然と鷲尾の館を立ち出で、夫より常照阿闍梨の徒弟
め、餘念ございませぬ、夫れは借て置き、茲に鷲尾の家にも
結び、之れに往つて佛堂建立の志願を貫かんと、専ら勸化に勤
どなり、頭を剃つて法衣を纏ひ、粟生野光明寺の境内に庵を
建て、瓢然と鷲尾の館を立ち出で、夫より常照阿闍梨の徒弟
く暇を取らせまする、間野彌陀次郎は大いに喜び、厚く禮を
述べ、瓢然と鷲尾の館を立ち出で、夫より常照阿闍梨の徒弟
となり、頭を剃つて法衣を纏ひ、粟生野光明寺の境内に庵を
建て、瓢然と鷲尾の館を立ち出で、夫より常照阿闍梨の徒弟

ッ、申し上げます、宗何事じや、彌餘の義でもございませぬ、
某し、若年の砌り、身持ち宜しからざるに依つて、亡君の御勘氣
を蒙り、御在世にお許しを受けませぬ事か、誠に遺憾千萬と
心得ます、仰ぎ願はくば、殿様が亡君に代り給ひ、御赦免賜は
る様偏へに願ひ奉つる、宗、尤もなる汝の願ひ、今改めて予が許す
は打ち點頭さ、宗、義治公の靈前に於いて、間野彌陀次郎の勘氣
を許しました、此の時、後村次郎公光の勘氣も同じく許される、
彌陀次郎は喜ぶ事一方ならず、再び宗雄に向ひ、彌某し、豫
てより出家となる望みでございませぬ、今、早や萬事思い通り
る、後存じ、是れ迄過しました、今、早や萬事思い通り叶つ
て、最早名利の望みとては少しもござらん、何卒御暇を賜はり
度存じます、到底志しを翻へす模様が見へませぬ、宗雄は一旦は止
めました、が、到底志しを翻へす模様が見へませぬ、宗雄は一旦は止

りました。が、両親は十五歳の時に世を去り、親族身寄りとしては一人もありません。處より、鷲尾の館へ引き取つて、小姓に召使つて居るのでございますが、生れ附いての美男子の上、武術も一通りは辨へて居り、男であつて糸竹管絃の道に堪能にいたして、就中尺八の笛に尤も妙を得て居ります。夫れゆへ野分の方方は、時々笛を吹かせて其の音に聞き惚れ、男勝りの野分の方も、彌曾太郎に掛つては、目も鼻もないと云ふ始末、誠に苦く、しい事でありませぬ、處が丁度八月十五日の夜の事、鷲尾家の館に於きましては、月見の宴も終つて、野分の方は微酔機織の足許も踏限めさながら、彌曾太郎に手を引かれて、自分の居間に立ち歸り、野分彌曾太郎の未だ寝むのは早からう、笛を一曲所望じや、鶴の巢籠りを聞かして、たもハ、長まりました。と、彌曾太郎は云はれる儘に、尺八の笛取り出し、庭を照らす月を眺めて、頻りに吹き鳴らして居りますと、不圖彌曾

太郎の袖より、朝がり落ちたものがある、本人の彌曾太郎は、しも存知ませんが、野分の方は早く之れを認め、手に取り上げて見ますと、豈に圖らんや女中の糸袂より、彌曾太郎に送つた玉章でありますから、野分の方の顔色は見、彌曾太郎の笛を奪い取つて、ハツタと腕め附け、野分彌曾太郎、其方は妾の寵愛を有り難いと思はず、不義をするとは何事じや、と、突然に云はれて、彌曾太郎は一圓合點が行かず、彌曾之れは、忍、御後室様のお言葉と覺へませぬ、私は何も不義などには、野分彌曾太郎の目の前に突つき附けた件の玉章、野分彌曾太郎は打たれたながらに、彌曾太郎を引寄せ、て、何うか、踏み付けて、糸袂と好い交情になつて居つたな、能ふも己れ何うか、と、打ち据へる、彌曾太郎は打たれたながらに、彌曾何うか、

暫らくお待ち下さいませぬ様……成程此の玉章は糸萩より私に
送つたものには相違ございませぬが、何時の間にか袖へ入れたや
ら、夫れさへ少しも存知ませず、殊に封が切つてないのを見て
何卒御疑いを晴して戴きたふ存じまする、中の文面を讀んで見
れば、之れ迄不義をして居たか居ないかは、能く判る事と心得
ます……と、聞いた野分の方も、打擲する手を止め、野ウム、
左様云やれば尤もこの處もある、左らば開いて讀んだ上の事……
と、手早く封押し切つて讀み下すと、彌會太郎の云つた通り、
文面の趣きでは未だ一回も出合つた様子もなく、惚れた腫れた
何うぞ色好い返事を呉れと書いてあるばかり、野此の玉章の
梅では、其方は少しも知らぬらしい、之れで其方への疑いは晴
れたが、糸萩は不届の婦女じや、妾が寵愛をして居る其方とも
憚からず、大膽にも玉章を附けるとは何事ぞ、思い知らせて呉
れん」と、立ち上るを彌會太郎は押し止め、彌イヤ、夫れは返

つてお宜しくございませぬ、暗闇の耻を世間へ洒すも同じ事、
何うか思い留まり下さいませぬ様……と、サマ、に利害を説
いて申し述べますと、素より才智發明なる野分の方も、彌會太
郎の道理ある言葉に、漸々氣色を和らげ、野成程、其方の云や
る通り、若しも之れが爲めに、妾と其方の關係が知れる様な事
あつては、宗雄や娘の手前に對しても面目ない、未だ一回も出
合はぬとあらば、妾も胸を擦つて堪へるであらう、去る代りに
糸萩は暇を出さねば相成らぬ……と、年は取つても剛氣は人
倍でございませぬ、其の夜は彌會太郎を捉へて、サマ、の怨
言を云つた上、何時とはなく睡入つて仕舞つた、處が其の翌日
になる、三木の助宗雄は彌會太郎を招き寄せ、密かに耳に
寄せ、何事かを囁かす、暫らく呼吸入れまして、次席のお樂み……
白き眼目講談は、暫らく呼吸入れまして、次席のお樂み……

轟 坊 清 空

若殿三木之助宗雄より、何事やらんと彌曾太郎は
 急ぎお目通りへ来たつて見ると、宗雄は人拂いに及んだる上、
 彌曾太郎を側近く招き寄せ、耳に口寄せ申しまするに、宗
 彌曾太郎、昨夜月見の宴席に於いて、糸萩より其の方に玉章を
 附けたるは、之れ皆予が指圖であるぞッ」と、聞いた彌曾太郎
 は打ち驚き、彌借ては、若殿様が……宗如何にも左様じや、定
 めて母上に見付けられ、お叱りを受けたであらうが、實は彌曾
 太郎、彼の糸萩には疾より予が手を附けて、今は懐妊四ヶ月の
 身の上、然るに予は養子の事なれば、萬一此の事知れるに於て
 は、夫れこそ由々しき一大事、誰も知らないのを幸い、早く片
 を付けんと日夜心を苦しめて居る内、圖らずも其の方が養母上
 の御寵愛を蒙むつて居ると聞き、お諫め申さんにも予が糸萩の

第 五 席

轟 坊 清 空

手前もあれば、夫れも公然とは出来難く、寧ろ其の方に糸萩を
 與へ、密かに當家を立ち退かせ、其の上にて母上の不身持ちを
 諫言なさる予の心底、彌曾太郎其の方には氣の毒であるが、懐
 妊と承知の上で妻になし、若し男子出生せば、追つて親子の對面
 をいたし、女子なれば、其の方が娘として、養育なし呉れよ、偏
 へに頼み入る……と云はれて彌曾太郎は迷惑とは思いました
 が、主君の命だから背く譯に參りませず、彌ハ、イ、鬼に角にも
 お言葉に従い、糸萩殿を連れて、當お館を立ち退く事にいたし
 ませう、主の御命令とありませば、如何なる汚名を受けても
 苦しむございませんと、快よく引き受ける、其處で宗雄は多
 分の金子を取らせ、其の夜に乘じて糸萩と彌曾太郎を落しや
 ました、跡にて此の事を知つたる野分の方は、狂氣の如く相成
 つて、頻りに八方へ追手を差し向けました、皆目兩人の行術
 は判りません、宗雄と櫻姫、田島造酒之丞、篠村次郎等は、交

婦の本性は何時しか現はれ、彌曾太郎の家來松村源吾も
のに思ひを通はし、折りを見て掻き口説きますと、全体松村源
吾と云ふ奴は、恥と、心の好くない人物であり、密通に及び、彌曾太郎
は、ぬは男の耻と、頻りに密會を續けて居ります、吾と情を通じてより
の目を忍んで、巧者な婦女であり、呈し、彌曾太郎が夜遅く戻つて
手練手管の巧者な婦女であり、呈し、彌曾太郎が夜遅く戻つて
は、マヌく、彌曾太郎が夜遅く戻つて
來た晩なぞは、殊更ら焼餅がまし、彌曾太郎が夜遅く戻つて
な、夜の更ける迄、何處に遊んで居られ、若し彌曾太郎殿、斯ん
交情は、且の事で、は、お情けないお心じや、と、聞中の
妾に、秋風を吹かせ給ふとはお情けないお心じや、と、聞中の
さ、め言は、日に増し細やかには、連理のこすへイロ、と、茂く、
糸萩が不義密通をして居るとは、彌曾太郎夢にも存知ません、
實に謹むべきは色の道でござい、彌曾太郎夢にも存知ません、
實に謹むべきは色の道でござい、彌曾太郎夢にも存知ません、

る、野の方の目通りへ出で、種々と諫言に及びましたから
して、野の方の不承承に、胸中に燃ゆる炎を押しへて、泣き
入りの姿と相成つて仕舞つた、話したつて、此方高木彌曾太郎
と糸萩は、矢張り驚尾家の近邊に身を密め、夫婦となつて居り
ました、が、全體糸萩は古今の淫婦であつて、彌曾太郎より二
歳の姉女房ではあるし、彌曾太郎の男振り好きに惚れ込み、暫
らくは最も睦まじく暮して居る程なく、月満ちて、糸萩は玉の
如き女の兒を産み落し、したから、彌曾太郎は主人三木の助宗
雄の命を通り、産み落したから、彌曾太郎は主人三木の助宗
云ふ事を深く包み隠し、寵愛限りなく養育いたして居ります
る、夫へ召し使ひのものも誰あつて、驚尾三木の助宗雄の胤
と云ふ事は、知るものも誰あつて、驚尾三木の助宗雄の胤
ありし時は、戀焦れし彌曾太郎と夫婦となり、最初の中こ
そ、睦言に夜の明け安きを欺つと云ふ有様でござい、
そ、睦言に夜の明け安きを欺つと云ふ有様でござい、

待て源吾、云ひ聞かす事あれば静かにせよ、出来た事は是非が
 げ出さんとするを、彌曾太郎は襟頭掴んで引き戻し、彌ヤイ、
 添はず源ヤ、御主人のお歸りか、之りや堪らん……と、逃
 人を睨み付けると、松村源吾はハツと屹驚仰天して、魂も身に
 木彌曾太郎でございませう、屏風をハツと跳倒し、ハツタと兩
 ツ、源吾の膝にもたれ、互いに酒汲み交はして居ります折柄、
 て、源吾の膝にもたれ、互いに酒汲み交はして居ります折柄、
 襖をグワラリと引き開け、互いに酒汲み交はして居ります折柄、
 呑ませ、自分で上帯を解いて屏風に打ちかけ、肌着の儘となつ
 と、手を取つて間に連れ込み、用意の酒肴を取り出して源吾に
 遠へ来て下さつた嬉しさに、シツポリ居間で呑みませう……
 は之れ丈けにして、嚙宵の中から寒かつたでござんせう、約束
 討首位いは覺悟の前ではござんせぬか……ホ、ホ、ホ、苛めるの
 は何事ぞ、チト確りしやんせ、何うせ人の花を手折つたら

別の殿が戻られた處で、重ねて置いて四ツにせられる迄の成敗、
 郎殿が戻られた處で、重ねて置いて四ツにせられる迄の成敗、
 身体をブルブルと震はして居るとは意苦地のない事、假令彌曾太
 大膽不敵の糸萩は打ち笑ひ、糸ホ、ホ、ホ、男の僻に見苦しい、
 源吾は足音忍んで四邊りに氣を配り、密かに椽側へ這い寄ると
 之れなん餘人にあらす、糸萩の隠し男松村源吾でございませう
 て、庭先の群竹の中より、ヌツと現はれ出でたる一人の男あり
 パツと向ふの小柴垣へ投げ附けると等しく、夫れが相圖と見へ
 し、椽先へ立ち出で、後先見廻はし、庭へ降りて小石を拾ひ、
 女中始め召し使いを先に寝かせて仕舞い、自分は聽て手燭を黙
 お前等も勝手次第に寝むが宜い……イ、エ遠慮はいらぬ……と
 で、明日でなくばお歸りでないこの事、妾は之れから寝る程に
 り、殊に良人彌曾太郎殿は、田島造酒之丞様のお屋敷へお越し
 いの女中に向い、糸コレ松路や、今宵は雨が降つて寂しふはあ

不義を知りつ、打ち捨て置く時は、世の人の口の端にかゝり、
 は思へども、此處に一つの難義と云ふは、此の糸萩は云々斯様
 す道理、此の上は糸萩を汝に與へ、兩人の望みを叶へさせたく
 屑至極である、成敗するは最と安けれど、返つて耻を世間に流
 派吾、其の方は我れを若年の主人と侮どり、不義を働くと不
 がありますからして、見向きもやらず源吾に向つて、彌コリヤ
 リ寄せる、彌曾太郎は己れ不埒な婦女奴とは思へども、思ふ處
 御存分になさつて下さいますと、返つて彌曾太郎に身をス
 とは、兼てより承知の上でございませう、隠すより現はるゝはなし
 憎い婦女と思はれるでございませう、隠すより現はるゝはなし
 く糸オヤツ、貴公は今頃お歸りでございませう、隠すより現はるゝはなし
 青くなつて平倒り込む、糸萩は度胸を据へて更らに驚く色もな
 ない、悪い様には計らはぬ……と、意外の言葉に松村源吾は、

イロくの噂を立てられては尙更ら大變である、夫れゆへ斯く
 は計らつたのであるが、誰も知らぬを幸い、今より糸萩の事は
 思い切り、當地を退散なし呉れよ……と、云ひつゝ、金子百兩を
 取り出して、源吾の前に置く、源吾は案に相違の其の言葉に
 胸撫で下して安心なし、且つは大いに喜んで源ハイ、誠に
 恐れ入りました、一寸刻み五分試しにしたられても、飽き足らざ
 る大罪を許した、一寸刻み五分試しにしたられても、飽き足らざ
 の程は死んでも忘れるはいたしません……と、伴の金を押し頂
 源旨い、此の金が手に入る上は、隙を窺い糸萩を奪い取り
 當地を逐電するに限る、お日様と米の飯は、何處へ行つても附
 きものだ、糸萩早くも夫れと悟り、同じく目で物云はせ、片頬
 ち上ると、糸萩早くも夫れと悟り、同じく目で物云はせ、片頬
 に笑みを含んで居りますは、憎みても尙ほ餘りある淫婦でござ
 います、今しも源吾は一禮述べて立ち出でんといいたしま

竊 坊 清 空

聞かす、糸、裁、は、漸、々、心、に、耻、ぢ、入、り、糸、ハ、イ、誠、に、悪、い、事、を、い、
 如、何、と、考、へ、許、し、難、き、處、を、助、け、置、く、の、で、あ、る、と、恐、ろ、に、云、ひ、
 主、君、の、御、胤、を、生、み、落、せ、し、其、の、方、一、命、を、絶、た、ば、宗、雄、公、の、御、心、も、
 助、宗、雄、公、の、一、度、手、の、掛、り、し、其、方、殊、に、は、我、が、主、君、龍、尾、三、木、之、
 る、は、何、で、も、な、い、が、源、吾、に、も、云、ふ、た、通、り、我、が、主、君、龍、尾、三、木、之、
 が、世、間、に、現、は、れ、ず、無、事、に、治、ま、る、道、理、で、あ、る、其、方、の、心、一、つ、に、て、耻、
 て、源、吾、は、泥、棒、に、事、が、濟、ん、だ、此、の、上、は、其、方、の、心、一、つ、に、て、耻、
 裁、を、静、か、な、る、奥、の、一、間、に、連、れ、込、み、彌、コ、レ、糸、裁、、我、が、計、ら、い、に、
 さ、い、ま、せ、ん、其、處、で、彌、會、太、郎、は、死、骸、を、取、り、片、付、け、さ、せ、て、糸、
 も、天、罰、だ、宜、い、氣、味、だ、好、く、な、い、奴、れ、一、人、不、憫、と、思、ふ、も、の、は、こ、
 だ、此、奴、は、日、頃、よ、り、心、の、好、く、な、い、奴、れ、一、人、不、憫、と、思、ふ、も、の、は、こ、
 し、甲、オ、ヤ、ツ、泥、棒、は、松、村、源、吾、で、な、い、か、乙、オ、ヤ、ツ、左、様、だ、源、吾、
 之、れ、な、ん、家、來、の、松、村、源、吾、で、あ、り、ま、す、ゆ、へ、何、れ、も、ア、ツ、と、仰、天、な、
 々、は、漸、々、安、心、し、て、静、ま、り、倒、れ、た、る、死、骸、に、近、寄、つ、て、見、る、と、
 之、れ、な、ん、家、來、の、松、村、源、吾、で、あ、り、ま、す、ゆ、へ、何、れ、も、ア、ツ、と、仰、天、な、

竊 坊 清 空

と、彌、會、太、郎、は、暫、し、と、引、き、留、め、彌、待、て、源、吾、表、へ、廻、ら、ば、人、目、
 に、掛、る、恐、れ、あ、り、裏、よ、り、彼、の、塚、へ、攀、ち、登、り、密、か、に、立、ち、去、る、が、
 宜、か、ろ、う、源、ハ、ツ、畏、ま、り、ま、し、た、と、源、吾、は、喜、び、返、つ、
 て、ツ、カ、と、高、塚、の、側、へ、寄、り、見、越、し、の、松、ケ、枝、に、ス、ル、と、
 登、り、彌、會、太、郎、の、屋、根、へ、片、足、掛、け、ん、と、す、る、一、刹、那、時、分、は、宜、し、と、高、木、
 彌、會、太、郎、は、短、刀、抜、く、手、も、見、せ、ず、ヤ、ツ、と、一、聲、規、い、澄、し、て、投、げ、
 附、く、れ、ば、手、練、の、腕、前、過、た、ず、源、吾、の、脾、腹、へ、グ、サ、と、ば、か、り、に、突、
 つ、立、つ、た、何、か、は、以、て、堪、る、べ、き、源、吾、は、ア、ツ、と、悲、鳴、の、聲、諸、共、突、
 頭、顛、倒、と、真、逆、様、に、墜、落、ち、る、折、柄、表、へ、八、ツ、刻、限、の、火、の、廻、り、番、通、
 り、掛、り、泥、棒、と、聲、を、限、り、に、呼、び、立、つ、れ、ば、高、木、屋、敷、の、召、し、
 使、い、の、面、々、は、俄、か、に、ア、と、騒、ぎ、立、ち、各、自、に、得、物、を、提、げ、
 て、飛、ん、で、來、る、彌、會、太、郎、は、一、同、の、騒、ぎ、を、制、し、源、ヤ、ア、者、共、靜、
 ま、れ、唯、一、人、の、盜、人、で、あ、る、殊、に、乃、公、が、脾、腹、に、短、刀、を、投、げ、
 付、け、て、居、る、か、ら、逃、げ、失、せ、る、氣、遣、い、更、ら、に、な、し、と、聞、い、た、面、

たしました、ツイ出来心で……と、詫び入る言葉に、彌曾太郎も安堵の思いをして、其の場は夫れで相済みましたが、一旦不義をした婦女は、同衾するも身の汚れと、妻と云ふは名のみにて、其の後は添い伏しもせず、彌曾太郎は田島造酒之丞の妹初潮と云ふを妻に迎へ、屋敷へは連れ歸らず、矢張り造酒之丞の屋敷へ預け置き、自分は月の内に半分以上は、其の方へ泊ると云ふ有様でございまして、糸萩は口惜しふは思いますが、之れも我が身の過より起つた事でありますから、今更ら恨むべき様も無く、果ては彌曾太郎も初潮を家へ引き取り、本妻となし、糸萩を妾とこそはいたしました、全体源吾を欺き殺しましたは甚だ彌曾太郎の振舞い卑怯には似て居りますが、若し此奴を生け置く時は、或いは糸萩を誘い出し、一人の口より萬人の笑い草となるのみならず、引いて鷲尾家の名が出てはならんと、年は若いが彌曾太郎の心使いの程を、後に聞き傳へたものは、或

せぬものこそございませぬ、然るに本妻初潮は彌曾太郎の寵に誇らず、糸萩を姉の如く敬ひ、家來や召し使いを憫れみする處より、非常に評判は好く、彌曾太郎とも仲睦まじく、程なく姦娠の身となつて、早や五月の岩田帯も相済みましたが、茲に國らずも一つの珍事出来に及びまする活劇講談は、例に依つて例の如し……

第六席

去る程に糸萩は、イヨク其の身を謹み、本妻初潮が懐妊して後は、サマシクに氣を付けて、少しも嫉妬がましき振舞はなく自分には侍女の如く立ち働いて居りましたが、茲に彌曾太郎の隠れ家の近處に、田村宗庵と云ふ町醫者があつて、醫術にはナカ一計を廻らし、糸萩を左様じや、何れほど妾に落度があるにもせよ

後から来た初瀬を可愛がつて、主公より下された妾を有つてな
いがしろにするとは、彌曾太郎殿も餘りじや、先方が左様云ふ
考へなら、此方にも思惑がある……と、思案の末病氣と云ひ立
て、自分の閨房へ引つ籠り、田村宗庵を招き寄せて診察をさせ
る事と相成つた、宗庵は直様歩つて来て、糸萩の閨房へ打ち通
り、糸萩の脈をうか、い眉をひそめ、宗ハテナ、御身は平脈で
少しも御病氣とは見へませんが、一体何處がお悪ふござるぞッ
と、尋ねられて糸萩は、四邊りに誰も居らぬを見澄し、グイと
宗庵の手を握つて莞爾と打ち笑み、糸ホ、ハ、ハ、ハ、お前様のお見
立通り、妾の病氣と云ふは偽りでござんす……宗エ、ッ、糸イ
ヤ、驚きは御尤も、前世如何なる因縁にや、何日ぞや御身を垣
間見てより、戀の關路に踏み迷ひ、露忘れる暇もなく、之れが
世に云ふ戀病でございませう、何うか不束なる妾ではあります
が、一度の情けを掛けて下さいます……と、婦女の方から口説

き立てる、イヤ驚いたのは宗庵でございます、生れついたら
醜男であつて、之れ迄婦女に手を握られた事もなく、早三十歳
以上になるが、女房の來人がないこと云ふ程の代物でございま
す、夫れに有る事か有るまい事か、絶世の美人に戀をしかけ
る、夫れに有る事か有るまい事か、絶世の美人に戀をしかけ
ら、宗庵の屹驚したのも無理はございませぬ、手前は見
御元談を仰しやつて……滅相もない事をなさいませ、手前は見
られ、通りの顔で……糸イエ、色は思案の外、夢喰ふ虫も
好々、雪のやうな手で宗庵を引き寄せ、心に惚れました……と、云
ひつ、雪のやうな手で宗庵を引き寄せ、心に惚れました……と、云
夢見し心地して、ワナ、震へて居りました、到頭何う云ふ
話の段取りになつたか、チヨンと柏子木が鳴ると、黒幕がパッ
と下りたので、無粋な玉秀齋には薩張り判りませぬ、其處は何
うか賢明なる讀者諸君の御判断に任せ置きます、稍あつて糸
萩は髪の後毛を撫で上げながら、糸若し宗庵殿、妾と斯様にな

つた上は、決して他方の婦女に手を出すと否ですよ、全体男心と
秋の空は、何時變るか判らないもの、妾の心を安める爲め、末
始終見捨てんと云ふ起誓を書いて下さいますと、云はれて
宗庵は、嬉しさの余り前後の思慮分別もなく、宗イエ、書きま
すとも、何枚でもお望み通り書いて進めます、手前よりも
御身が直に心變りが……、妾の方から据膝して、
思いを叶へた此の妾し、何んの變つて宜いものですか……、夫で
は書いて下さる……、宗心得ました……、宗庵は起誓をサラ
く、と書いて糸萩に渡す、糸萩は夫れを納めて再び宗庵に向い
「妾は、お前様と末の契りを結びたいと思つては居りますが、
彌曾太郎と云ふ良人があつては、思ふ様に逢ふ事も出来ず、寧
ろ一思いに毒を盛つて、片付けて仕舞い、天下晴れて添い遂げ
やうではありませんか……」と、聞いた宗庵も、一時は愕とい
しました、飽迄糸萩の色に迷つた悲しさには、快よく承知を

いたし、宗イヤ、宜しいとも、幸い茲に砥霜斑猫を以て調
合なしたる毒薬があります、之れをお渡し申すに依り、密かに
食事の時吞まして頂きたい、糸オ、夫れは早速の御承知、有
り難ふ存じます、斯く秘密を打ち明けた上からは、決して他
はせぬと云ふ、誠ある心を見せて下さいます……、宗イヤ、夫れ
も宜しい、宗庵の心中立ては、之れ此の通り……、脇差を抜
いて指を切らんとする、糸萩見るより咄嗟と飛び付き、糸ア、
待つて下され、宗庵殿、夫れで心底は見へました、嬉しふござい
ます……、と、云ひつ、短刀握つたる宗庵の腕を掴み、反對に宗
庵の脇腹へ差して、グサとばかりに突き通す、何條堪らん宗庵は
アツと叫んで打つ倒れ、七瀬八倒の苦しみなり、此の物音に召
使の女中共は、何事やらんと馳せ集まり、宗庵の血汐に染ま
つて倒れて居るのを見て、口「ヤ、之れは何うなされました」
と、口々に尋ねますと、糸萩はワザと眼に涙を浮かべ、糸オ、

居間へ出て参り、幸い病いもダン、快よくなり、御機嫌伺いの爲め
しまし、参上いたしまして、此のお菓子はお口には叶いますまいが、何
うか召食つて下さいませ、初オヤ、御機嫌伺いなぞ
氣の毒そりに糸萩を上座へ通し、初オヤ、御機嫌伺いなぞ
とは恐れ入ります、妾も女中を以て度々御病氣のお尋ねはさせ
ました、が、ワザと御無沙汰をして居りました、結構なるお菓子
添けなふ頂きます、糸萩が志しの厚きを喜び、尙サマ
の物語りをして、糸萩は立ち歸る、跡に初瀬は櫻木と云ふ
女中に云ひ付け、件のお菓子を取り納めさす、櫻木は心得へ、
夫れを向ふへ持ち行かんとする、其の折しも、餌に餓へし山鳥が
庭の松ヶ枝に飛び来り、カア、と鳴く聲の如何にも悲しもう
に聞へます、櫻木は不圖立ち留つて、件を鳥を見上げて居りま
す、何とやらん胸騒ぎがいたしますから、櫻ハテ心得ね、鳥

皆の者能く来てくれました、實は此の宗庵と云ふ醫者、妾の脈
を見る、と云つて手を握り、側へ引き寄せて、云ふ事聞けの女房
になれ、と云つて、サマ、に口説き立てたが、長袖同前と思つて、柳
に風を受け流して居ると、果ては以前より企んで来た、と見へ、
斯んな起誓を出して云ひ寄り、其の上、自分の脇差を抜いて、威
しに掛り、絶体絶命の場合となつたから、油断を見澄し、斯様
に、脾腹へ突き差した譯、と、涙ながらに物語る、と、女中共は眞
實と思ひ、女オヤ、此の醜い顔で能うも、色の戀の、と云
へたものじや、夫れにしても、貴女のお手際は、お美事でございま
す、と、皆々、糸萩の手の内を賞め、又は宗庵が顔に似合はぬ色
好み、を笑つて居ります、彌曾太郎も此の事を聞いて、深き企
みあり、とは知らず、宗庵の死骸は夫れ、手織の上役所へ差して引
渡す、糸萩は仕澄したりと、ベロリと舌を出して打ち喜び、
密かに機会を待ち受けて居る、或日の事、糸萩はワザ、初瀬の

給い、妊娠中の糸萩を我れに賜い、密かに館を抜け出でよとの
御詮、快よくお受けをして糸萩を連れ、御存知ないとは云へど、
を密めては居るもの、野分の方様は御存知ないとは云へど、
一家中誰知らぬものなく、今は公然の秘密となつて居る有様
然るに糸萩の心得悪き爲め、タビ／＼騒動を引き起さんせし
を、我慢に我慢をして堪へ忍んで居るも、之れ皆御館を思へば
こそである、傳へ聞く唐朝元敬が妻は、妻と子を引寄せ、責
め殺して胸を安せんと云ひしとかや、オサ／＼夫れに劣らざる
糸萩の性根、其の菓子の中には定めし毒薬を仕込んで居るであ
ろ、初瀬は孕んで大切の身体である、能く包み隠して呉れ
た、櫻木の氣轉を賞め讚やし、夫より直様初瀬を兄の田島
造酒之丞に預けて仕舞いしました、糸萩は之れを聞いて、企みが
露現たと思つて、安さ心もございませんだが、元來不敵の婦女
であるから、素知らぬ顔で澄し返つて居りますが、程なく月満

の泣聲と云ひ、不意に胸騒ぎがするとは……と、云ひつ、初瀬
には知らさず、菓子を一ツ摘んで、パツと庭へ投げ遣りますと
鳥は直様羽叩きして庭に降り來り、嬉しそうに食つて居ると見
る間に、倍ても不思議や、鳥は憫れな悲鳴と共に、バタ／＼と
打つ倒れて、其の儘死んで仕舞つた、櫻木は此の体見るよりア
ツと驚き、暫し件の菓子を見詰めて居りました、悪かろうと、密か
たる婦女でありますから、初瀬に知らせず、悪かろうと、密か
に菓子を藏い、此の事彌曾太郎に囁きますと、流石の彌曾太郎
も驚く事大方ならず、彌フ、ム、何うも心の好くない婦女であ
る、若しも彼女が主君より賜はり、何うも心の好くない婦女であ
つて捨てるは最と安けれど、我れ野分の方様の御寵愛を蒙むり、心
なれに於ても、落度あり、我れ野分の方様の御寵愛を蒙むり、心
何れも安からぬ事の思はれ、夫れが爲め遂に若殿は見るに見兼ね

空 清 坊 轟

孝心深き初之丞は、糸萩を眞實の親と思つて居りますから、云
 ないよ、宜いかい……初アイ阿母さん、畏まりました……と、
 なりません、五把の中が一把欠けても、御飯を食へさす事では
 は之れから毎日の大江山へ行つて、五把の柴を刈つて來ねば
 相成つた、スルト糸萩は初之丞に向つて、糸コレ初之丞、お前
 早くも六年の月日は夢の如く過ぎ去つて、初之丞は六歳の春と
 な、い、今日と過ぎ明日と暮して居る内に、光陰に關守なく、
 して居りまするが、夫れでも壽命のあるものは、ナカクに死
 此の餓鬼奴がツと、東西知らぬ乳呑み兒を打つたり叩いたり
 めて上げるから、早く大きくなるが宜い、エ、イ何を泣んだい
 自由はない、糊湯や貰い乳で初之丞を育て、糸今に、お前は昔
 屋敷を出る時に二百兩ばかりも持つて出ましたから、少しも不
 でございまする、人に頼んで一軒の小さい家を借り受け、金は
 せて歩つて参りましたるは、此處は大江山の麓大江村と云ふ處

空 清 坊 轟

ちて、初瀬は男子を生み落し、之れを初之丞と名付けて、蝶よ
 花よと可愛がつて居りまする、然るに此の事を聞き及んだる糸
 萩は、自分の生んだる花野か婦女であるから、逆も高木の家の
 相續はさせてくれまい、寧ろ初瀬の生んだ初之丞を盗み出し、
 苦しめて無念を晴しくれんもの、密かに悪計を企み、或夜の
 事田島造酒之丞の屋敷へ、氣に入りの下部を忍び込ませ、首尾
 能く初之丞を奪い取り、糸萩は夫れを抱へて屋敷を逐電なし、
 何處ともなく立ち去りました、彌曾太郎初瀬は申すに及ばず、
 田島造酒之丞に到る迄、初之丞と糸萩の居なくなつたのを見て
 大いに驚き八方詮索に及んだが、更に其の行術は判りません、
 鰐尾三木の叻宗雄も、之れを聞いて誠に氣の毒の事に思ひ、イ
 ロ、野分の方に詫をいたした上、高木彌曾太郎を館へ呼び戻
 し、今度は宗雄附きの家來として、頻りに寵愛に及んで居る、
 夫れは借て置き、此方淫婦の糸萩は、初之丞を連れて、足に任

はれる儘に大江山へ分け登り、一生懸命に柴を刈りますが、云ふても僅か六歳の小供、ナカ〜五把の柴が刈れそうな事がございませぬ、漸々二把ばかり刈つて日の暮れに戻つて来ると、糸萩は目に角立て、糸コレ初之丞、お前はブラ〜遊んで居たのであろう、初イ、エ阿母さん坊は一生懸命に... 糸イエ〜左様ではない、二把位いでは御飯を食へさす事は出来ん、アノ此處な不孝者が奴がッ〜と、首筋取つて引き倒し、叩く跳ると云ふ惨酷な目に遭はす、初之丞はヒイ〜と悲鳴を擧げて、泣叫んで近處隣りが遠いから、誰も挨拶に來て呉れるものはない斯様な有様で毎日〜、味氣なき日を送つて居ります内、圖らずも初之丞が一つの手柄を現はし、鷲尾三木之助宗雄の恩賞に預ると云ふお話し、ソハ次席に群しく口演じませう

第七席

然るに此の頃鷲尾家に於きましては、野分の方が病いとなつて、醫藥の手當で怠りなくいたすと雖も、何うしても全快をいたしません、其處で櫻姫は三木之助宗雄と相談をして、加持祈禱は申すに及ばず、神社佛閣に祈願を籠め、一日も早く野分の病氣全快を祈つて居る、スルト誰れ云ふとなく、五百年以上を経たる杉の古木の皮を煎じ、之れを吞ますと病氣は立處に癒ると云ひ出した、方今から考へると馬鹿らしい話してはあります、昔の醫者は大抵草根木皮で人の病いは癒したものでありますから、三木之助宗雄も心が迷ひ、或いは全快する事がないとも限らん、五百年以上の杉の古木は、何處にあるであらうと、家來に命じてイロ〜詮索をさせますと、大江山の絶頂に一本あると云ふ事が判つた、宗雄は大いに喜び、直ちに家來兩三名に命じて、大江山へ向けて差し遣はした、處が翌日になつて、家來の者は遠々の体で馳せ歸り、家ハツ、申し

て、倒れたる者を介抱して助け起し、暴風に吹き捲くられて、
たる三木の助宗雄は、アツと驚いて立ち竦み、他の家來に命じ
と打つ倒れ、ウソと唸いて居る、目の邊り此の不思議を見
議や、俄かに山鳴り震動して、斧を携へたる家來はパツタ
の大木を取り圍み、ヤツと一打ち打ち込みますと、偕ても不
てる民を憐れ、心を得て候と、面々手に斧を持つて、件杉
ア、民を憐れ、早く此の杉の木を切り倒せ、如何に神木とも
摩するの杉の大木が登へて居る、宗雄は之れを見、如何に
ドス、大江山差て乗り込み、絶頂へ登つて見ると、成程天を
勇士の謀め聞き入れず、忽ち人数五十名ばかりを引率なし、
れん、温厚なる三木の助宗雄も、其の日に限つて、老臣
ては、下々の迷惑であらう、我れ自ら乗り込んで切り拂つて
て堪るものではない、ヨシ予が傾分地に斯かる怪しき大木あつ

上げます 宗何事じや、杉の皮は持ち歸つたか……家、イエ、何
う仕つりまして……實は我々三名大江山の麓へ参り、人足を履
つて道案内さんと存せし處、人足は之れを聞いて大いに驚き
彼の古き杉の樹は、大江山の神木であつて、若し皮でも剥こう
ものなら、即座に死んで仕舞ふか、大熱を發して病氣となる、
之れ迄瘦我慢の奴が乗り込んで、切り倒そうとした事が何度あ
つたか知らないが、誰も満足で歸つたものはないと云ふ不思議
の樹だから、是非に疲せと申します 宗、成程……家、其れ
を、我々三人は嘲笑いながら時に登り、杉の大木に近づき、皮
を剥こうといたしますと、俄かに山鳴り震動して、我々三名は
何時の間にもやら麓へ投げ落されました始末、之れでは逆も皮を
持ち歸る事は思ひも依りません……と、青くなつて申します
宗雄は聞き終つて、カラ／＼と打ち笑い、宗アハ、ハ、ハ、ハ、怪力
鬼神を語らずとは聖人の誠め、世の中に左様な馬鹿な事があつ

へ酒ぎ掛ける造作なく切れる事の之れは吃度神様のお告げに違いない、左様じや御領主様が杉を切るに付いて、大變のお困りとやら、苦しみを遁れる事が出来、初之丞の宅へ歩つて來て見やう、...と、君江は表へ走り出で、初之丞の居る處へ出掛けて、初之丞の取次を以て宗雄に對面の upper 君ハ、妾は此のお村の百姓甚作の娘君江と申します、實は此の初之丞に杉の木を切らせ、家來の面々は、何れも顔見合はして、宗アイヤ、夫れなる娘め江とやら、其の方氣でも狂つて居るのである、見受ける君江とやら、少年は未だ漸々六七歳ではなにか、夫れに何ぞや彼の處、杉の大木を切るとは、何うじや、君イェ、小供ではございませぬ、倍度切らせて、御覽に入れます、若し夫れが出来ませぬ時

逆も絶頂に居る事も出来ませぬ處より、早々駒を返して麓へ引取り、イロく、君江と云つて、非常に孝心深き百姓の娘が、話變つて此の大江村に、君江の糸萩に背められて、苦痛に堪へ兼ねて居るたが、初之丞が繼母の糸萩に背められて、苦痛に堪へ兼ねて居るのを、毎山へ登つては、初之丞を助け、柴を刈つてやり、五把づつ居り、して門口迄擔いで戻つて遣ると云ふ様に、頻りに勞わつて居り、或夜の事、不圖夢を見て、大江山の杉の木へは、谷間の水を酒ぎ掛けると、少しも不思議はない、容易く切る事が出来る、神のお告げを蒙り、別々に氣にも止めず、妙な夢を見た者だと思つて居り、然るに此の度、御領主が杉の大木、其の儘打ち捨て、置きまして、然るに此の度、御領主が杉の大木を切り、参られて、置きまして、然るに此の度、御領主が杉の大木を聞き、ヒョイと思ひ出し、たは此の間の夢、君オ、薩張り、忘れて居たが、先夜の夢で見ると、谷間の水を取つて、杉の木

動するかと、思ひの外、少しも其の模様の見へぬと云ふは、イヨイヨ以て合點が行かぬ、と、家來に命じて切らせますに、變つた様子は更にない、到頭一同は寄つて集つて、サシモの杉の大木を切り倒して仕舞い、其處で君江を呼び寄せ、事情をお尋ねに相成ると、君江も包み隠さず、夢に見た一伍一什を申し上げた、宗雄は大いに感心をいたして、老臣坂口重左衛門に命じて、宗其の方、之れなる初之丞を召連れ歸り、充分氣を附けて養ひ取らせよ、坂ハツ、仰せではございませすが、無断で召連れ歸りましては、宗イヤ苦しふない、継子苛めをする位であつて見ると、居なくなつた處で、別に歎き悲しむ事もあるまい、其の少年の顔色を見るに、人品も賤しからず、育て様に依つては立派な人物ともなるであらう、斯んな草深い田舎に打ち捨て置くは惜しいものだ、此の度の功に賞で、行々は武士に取り立て、得さすであらうと、真逆之れが高木彌會太郎の悴とは御

には、兩人の生命を差上げましても苦しむはございませんと申す言葉は、満更ら發狂人とも覺へませんから、宗雄は莞爾といたし、少年に切り役を命ずる、明日と云はす之れより罷り越さん其の少年に、直様用意を整へ、家來に取り捲かせて、君江と初之丞……と、直様用意を整へ、家來に取り捲かせて、君江と初之丞……と、谷間に降りて、密かに携へたる竹筒の水を入れ、懸て絶頂へ着くと、君サア、初坊、生命掛けの仕事じや、確りしておくれよ、此の竹筒を持つて宜いかいと、弟に物を救へる様に云つて聞かせ、竹筒の水をザブくと、杉の周圍に振り掛けて、君ソレ、切つてお見よ、心配ないから……と、云はれる儘に初之丞は、二斧三斧と一斧打ち込みますと、何の異つた事もございませ宗雄を始め一同は呆れ果て、宗ヤ、之りや何うじや、山鳴り震

て召使つて置きまし、スルト初之丞は我が身の素性を知りま
じ年輩であらうと、丁度我が子の重太郎の相手として、目を掛け
なるものであらうと、今度我が子の重太郎と云ふが、初之丞と同
いものを入れた、重左衛門は大きい喜び、重左衛門は立派な人物に
でありますから、重左衛門は大きい喜び、重左衛門は立派な人物に
才智から度胸迄、他々少年とは優つて、天晴未頼もしき少年
初之丞の心を試して見ると、ナカ／＼の利發者であつて、其の
主君の命に依り舞つた、夫れは倍て置き此方老臣坂口重左衛門は
皆全快して仕舞つた、夫れは倍て置き此方老臣坂口重左衛門は
不思議や病氣は日増しに快くなり、僅か五日ばかりの間に、悉
田那の館へ歸つて参り、其の皮を煎じて野分の方に吞ますと、
は杉の皮を剣いで家來に持たせ、少年初之丞を召連れ、急ぎ桑
尚も呉々と頼み込み、褒美の金を頂戴して立ち歸る、跡に宗雄
存知なく、有り難き仰せ出でと相成つた、君江は深くも喜び

せんから、同じ館に我が両親が居るとは知らず、此の時から重
左衛門と重太郎を大事の主入り、重太郎も又二なき兄弟
まするので、大層重左衛門の氣に入りに、重太郎も又二なき兄弟
を得た積りで喜んで居る、處が大江村の糸萩の宅に於きまし
ては、不意に初之丞が居無くなつたので、イロ／＼と詮索をし
て見ると、桑田郡は鷲尾家の老臣、坂口重左衛門が連れ歸つて
養つて居ると聞き、糸ア、失策つた事をした、彼奴を取られ
ては、斯んな草深い田舎に居る必要もないが、今更オメ／＼
居りますと、或夜圖らずのものであらうと、夢の中、初之丞が
切り倒した杉の木精が現はれ、木ヤヨ糸萩、其の方は初之丞を
苦しめて、彌曾太郎に情なくしられた恨みを晴らす積りと見
るが、我れは初之丞に切り倒され、必竟初之丞の爲せる業である、唯
なく相成つた、之れと云ふも必竟初之丞の爲せる業である、唯

れたに依つて、之れを返さぬとは申さぬが、何んと物は相談じ
た、成程初之丞は當家に罷りある、鬼にも角にも、折角見へられ
り、かいたして、重イヤ、之れは、遠方の處能くこそ見へられ
う、かいたして、重イヤ、之れは、遠方の處能くこそ見へられ
葉は、賊に秘かた、初之丞を屋敷に留めて置きたせんと、重左衛門は
し、の程を願いたく、別々に見せしめ、何うぞ初之丞をお引き渡
ます、初之丞の總母でございませう、何うぞ初之丞をお引き渡
の、初之丞は素知らぬ顔で重左衛門に向い、糸ハ、妾は大江村
と、糸萩は素知らぬ顔で重左衛門に向い、糸ハ、妾は大江村
た、事のあら様な顔であるから、重左衛門はイロ、考へて居る
心、に思案を定めて、一間に通し、面會に及びますと、何うやら見
然、し一應對面して、屹と申し付けて置く事もあるから、何うやら見
武、士に取立、て、やろうと思つたが、夫れも叶はぬ事となつた
れ、迄である、如何にもして初之丞を立派に育て上げ、一人前の

丞、重左衛門は、返りに來たか、ア、世の中は儘ならぬものだ、最ふ之
と、ごい、申し込、んだ、取り次、の、から、糸萩の來た事を聞いた坂口
で、ごい、申し込、んだ、取り次、の、から、糸萩の來た事を聞いた坂口
先、日、より、此、方、様、に、御、厄、介、になつて居ります、初之丞の母、糸萩
は、國、迂、で、狂、氣、の、如、く、坂、口、重、左、衛、門、の、屋、敷、へ、訪、ね、て、參、り、糸、萩
と、宛、で、狂、氣、の、如、く、坂、口、重、左、衛、門、の、屋、敷、へ、訪、ね、て、參、り、糸、萩
片、付、て、お、い、て、追、つ、て、彌、曾、太、郎、初、瀬、も、取、り、殺、し、て、や、る、迄、だ
殺、し、て、や、ら、ね、ば、木、精、に、對、し、申、し、譯、が、な、い、先、づ、初、之、丞、か
此、の、上、は、初、之、丞、を、捨、て、置、く、譯、に、相、成、ら、ん、取、り、戻、し、た、上、で、食、い
と、變、つ、て、仕、舞、つ、て、邪、見、な、上、が、イ、ヨ、く、邪、見、に、な、り、糸、オ、ハ、リ
覺、め、ま、し、た、サ、ア、之、れ、か、ら、と、云、ふ、も、の、は、糸、萩、の、氣、分、は、ガ、ラ、リ
ね、ば、相、成、ら、ん、心、得、た、ら、か、ッ、と、云、ふ、か、と、思、へ、ば、遂、に、夢、は
今、よ、り、我、が、木、精、が、其、の、方、に、乘、り、移、り、飽、迄、初、之、丞、を、苦、め、て、貫、は

第 八 席

やが、當人を拙者へ貰ひ受ける云ふ譯にはなるまいか、本人も今更大江村へ歸るより、當屋敷に留まつて居る事を好んで罷りある様な次第、若し承知なら相當の謝禮はいたす積り……と聞いた糸萩は、鼻の先きでフ、ンと冷笑い、糸ハイ、折角の御所望ではございますが、夫れはお辭退り申しませう……と、空嘯いて居りますと云ふ、益々奇々妙々なる珍説奇談は、何時もながら次席に譲つて伺い上げませう……

糸萩は尙も言葉を繼ぎ、糸實は、お言葉にお従い申す事の出來ん譯と申しまするは、妾には初之丞の外に、今一人の娘がございます、ナレド我が子であつて我が子でなし、杖とも柱ともいいたすべき子と云ふのは、初之丞より外にはございませんから、之れを差上げましては、行末が案じられますので……重イヤイ

ヤ、其の義なれば決して氣遣ふ事はない、及ばずながら其方へ行末の手當は、拙者より充分に致すであらう、糸假令、何の様なお手當を下さいまして、我が子を他家へ遣はしましては何んの樂みもございませぬ、是非、お返しを願いたふ存じます、夫れとも何うあつてもお返し下さらぬとございますれば、最早勢も力もございませぬ、淵川へなと身を投げて、相果てまする所存でございます、重夫れは又、以ての外、此の上は、初之丞に申すものを、此方にも強て申すべき筈はない、此の上は、初之丞を御身に引き合せ、其の上の事といたそツと、重左衛門は落膽しながら、召使いの者に命じて、初之丞を呼び寄せ、初之丞は何事やらんだ出て参り、次の間から兩手を支へ、初之丞がお召でございますか……重オ、初之丞、近ふ、其方の、お母が見へたのじや……と、云はれて初之丞は屹驚いたし、糸萩の顔を眺めて青くなり、ブル、と震つて居る、糸萩は進み

斯様に思つたので、初之丞に向い、重之れ初之丞、義理ある母
 が迎へに來て、大江村へ連れ歸ると云ふが、其方は何うする考
 へじや、初ハ、私には今迄通り、此のお屋敷へ置いて頂きたふ
 存じます、と、立派に云つたので、重左衛門は左もあらんと云
 はぬばかりに、重ア、彼の通り初之丞は申しして居る、斯様に
 申すものは無理に連れ歸ればとて、左程に嬉しい事もあるまい
 永くとは申さぬ、責めて十歳になる迄預けて貰いたい、是非聞
 き入れては下さるまいか、と、重左衛門も初之丞不憚りと思へば
 こそ、有らん限りの言葉を書き付けたが、糸萩は胸
 に一物、初之丞は我が手に掛けて生れ取りであるから、
 更に重左衛門の情けある言葉も初之丞をお預けする事は出来
 申されども、一時半時も初之丞を預けず、糸イエ、何ん
 夫れでも波さぬと仰せあらば、斯うしてお預けする事は出来
 云ふかと思へば、今迄穩かであつた糸萩の顔色は、忽ち悪鬼羅

寄り、糸オ、初之丞か、其方はよう達者で居てくれたと、
 云へど初之丞は物を云はず、唯茫然として居るばかり、重左
 衛門は此處ぞと思つて、重ソ、見ろ、初之丞は當家に居るを好
 んで居る様子、連れ歸つた處が仕方もあるまい、身共の申す通
 り、暫らく初之丞は當家へ預け置く譯には相成らぬかッ、糸イ
 エ、其様な事はなりませぬ、何うかお返し下さいませ、コ
 レ、初之丞、繼母と一緒に歸りませうと、云ひつ、手を取
 らんとすると、何處へも參るの否でございませうと、云へば坂
 居ります、何處へも參るの否でございませうと、云へば坂
 重左衛門も打ち點頭き、心の中は何うしても初之丞を糸萩に
 渡したくない、夫れも糸萩が初之丞の實母であつて、慈悲のあ
 るものなら鬼にも角、以前初之丞が大江村の家に居た時分は、
 糸萩が慘酷に取り扱ふた、と云ふ事を聞いて居るので、今初之丞
 を彼れに渡すのは、云は、谷底へ突き落すのと同じ事である
 と、

我れは此の大江山の杉の木の本精なり、汝嘗て君江と心を合せ
きたるに、投げ出した、初之丞は鬼に等しき糸に、打つ倒れて居る
來るに、任せて、漸々足を止め、忽ち初之丞を切り株の上へ、控とばかり
足に、任せて、漸々足を止め、忽ち初之丞を切り株の上へ、控とばかり
が、糸は、我が家へは歸らすいたして、何に思ひけん其の儘に
萩の足は、空を走るばかりの勢いで、大江村に、戻つて來ました
提つさげて、飛ぶが如くに坂口重左衛門の屋敷を、駆け出した糸
ア、レヨ、と云ふばかりでございまして、此方初之丞を、片手に
事は、出来ません、餘りの不思議に、家來一同は、唯呆氣に取られ
背後へ振り散らし、虚空を浮いて走る様に、見へ、逆も追つ驅ける
は、雲霞と二丁ばかり、彼方に見へて、糸萩の身体は、黒髪サツと
げて、表へ差して追つて出でました、が、早此の時は、既に糸萩の姿

利の如き有様と變じ、面上朱を注ぎ、兩眼を怒らし、咄嗟と云ふ
間もあらばこそ、スツクと突つ立ち、バラリ初之丞に、飛び掛る
よと見へたるが、ムツと襟頭取るより、早く、宙に提げ、バラ
門は、猿臂を延して、確かと糸萩の袂を掴み、ズル、と、重左衛
き、戻す、糸、エ、イ、面、倒、な、ツ、と、叫ぶと共に、ハラツと音がして
糸萩の片袖は、重左衛門の手に残り、叫ぶと共に、ハラツと音がして
ぶが、如くに走り出る、其の素早き事は、左ながら風の如く、手に
も取られず、目に、も、まらぬ位、いでござい、ます、殊に、初之丞に
を、軽く、提げ、た有様は、ナ、カ、カ、以て、容易ならぬ、力、量、で、走
足は、地に、附かず、眞一文、字、に、大江村の、方向、差、て、飛、び、出、し、た、重
左衛門は、驚き、な、が、ら、一、重、ア、大、江、村、の、方、向、差、て、飛、び、出、し、た、重
ド、シ、レ、ッ、跡、を、追、つ、驅、け、る、透、す、な、遣、る、な、ッ、と、此、の、物、音、を、聞、き、附、け、と
家、ン、レ、ッ、怪、し、き、婦、女、の、透、す、な、遣、る、な、ッ、と、此、の、物、音、を、聞、き、附、け、と

今度は左りの手を伸ばさして、同じく大釘をズブリと貫く、初
 之丞の苦痛は譬ふるに物なく、生きながら地獄の責めも、斯く
 やど、思ふばかりであり、左れど何んしろ昔は鬼が住んだ
 と云ふ、深山の事ではあるし、人も通はぬ魔所であり、糸萩は
 誰一人として救いに來るものは、無論あるう筈がない、糸萩は
 心地よげにニタ／＼と笑いながら、今度は兩足とも釘付けにし
 て仕舞い、憫れ初之丞は切り様の上へ仰向けに張り付けられた
 譯でございませぬ、素より少しの身動も出ない、糸萩は打ち
 眺めて、糸萩初之丞の痛いか、苦しいか、嘲り笑
 つて居る、初之丞の兩手兩足からは、玉の様な血がポタリ／＼
 と溢れて流れる、初之丞は懸て何處からか、一挺の斧を持ち來
 り、初之丞の側へスツク突つ立つた時には、憐れや初之丞は
 既に半死の有様で、悲鳴もダン／＼と細り行く、實に此の世から
 なる地獄の責苦でございませぬ、糸萩はハツタと初之丞を睨ま

我れに斧を入れたる爲め、到頭切り倒されて、枝も葉も枯れて
 仕舞つた、此の怨みを返さんとして、假りに糸萩の手を借りて、
 斯くは汝を奪い取つたのである、最早其の方の運命も、今は之
 れ迄なり、我れが幹や根を切られたる苦しみを、今汝の手足を
 断つて思い知らさん、アナ心地よや、一尺ばかりもあろうと見
 ふかと思ふと、糸萩は懐中より初之丞の髻を掴んで、切り株
 の上に仰向けに引き倒し、先づ右の手を擡げて置いて、切り株
 件の大釘をプスツと突き刺して、初之丞の手を株へ縫い付けて
 し、また、何かは以て堪るべきや、初之丞はアツと一聲悲鳴諸
 共、飛び起さやうに堪えられ、初之丞はアツと一聲悲鳴諸
 へ三寸ばかり打ち付けられたが、釘は掌を貫いて、切り株
 りは、何うしても逃出す事が出来ません、糸萩は何んの情け容
 赦もなく、糸萩も、逃出す事が出来ません、糸萩は何んの情け容

へて 糸 初之丞 今こそ最後の苦しみを 見せてやるぞッ、 思い知
れいッ、と云ふより早く、ヤツと振り上げたる斧を、 發止と
力に任せて打ち下すと、何條堪りませうや、初之丞の左の足は
膝の處からザツクと切り放された、ワツと叫ぶ悲鳴、血は泉の
如く迸り出で、切株の上からメラ／＼と流れ落ちるを、糸萩は
左も氣持好さそうに打ち眺めて、又も二度目に、エ、ッ、と切り
付ける、今度は右の腕を肩口から切り放された、初之丞の苦
痛は如何ばかり、身体をビクビクと動かし居る、飽きたが、未だ虫
の呼吸にて、身と物とを浮べ、サア、痛ふ二度の痛さを糸萩は
は、ケラ／＼と物凄き笑いを浮かして居る、痛ふ二度の痛さを
辛棒するのじや、之れでもか、と、到頭兩手兩足を切り
落して仕舞つた、初之丞の身体は、血塗となり、見るも無惨や、胴体と手
盜れ出で、其處等一面は血塗となり、苦痛と悲鳴の中に、到頭
足とは、チリ／＼、バラ／＼となり、苦痛と悲鳴の中に、到頭

吸は絶へ果てました、糸萩は此の体を見て、ホッ、と溜息を吐き
糸ア、之れ少しは怨みが晴れた、何れ首打ち落して遣らう
と、生血の滴る大斧を、真向にヤツと振り上げて、咄嗟打ち下
さんとする間一髪、何れよりともなく、鈴の音が響き、夫れが
糸萩の耳に遠入ると、流石の糸萩も思はず、タジ／＼と背後に陥
眼めき、危ふく斧を取り落そうとしたが、心を勵し、又振り
し、ヤツと打ち下すと、腕は痺れ、身体は自由は利かなくなり、何う
る、スルと糸萩の腕は痺れ、身体は自由は利かなくなり、何う
して、打ち下す事が出来ない、糸エッ、残念なッ、と、三度
目に遣らうとすると、之れも鈴の音に妨げられ、到頭斧を放り
出し、背後に控乎と尻餅搦き、唯フツ／＼と云つて居るばかり
然るに鈴の音はダン／＼、近付いて来る様子に、糸萩は怒りの顔
色、凄まじく、糸オ、と彼の鈴の音の爲めに妨げられ、何うして
も首を切る事が出来んとは情けない、何者なるか先づ彼奴の生

命を取つてくれん」と、懐劍逆手に抜き放ち、樹蔭に身を忍ばして居りますると云ふ、サア之れは何者でございませうや、イ

第九 席

茲に又粟生野の光明寺に庵を結んで住んで居る間野彌陀次郎は一心不乱と佛道に歸依して、念佛三昧に其の日を送つて居りま

すと、額は依然として別條もないが、表の方で雞の鳴く聲が聞

空 清 坊 轟

切りの見も恐ろしき婦女が大木の切り株の上には、
 人の上へ出て参り、ヒヨイと向ふを見るとき、
 の上へ出て参り、ヒヨイと向ふを見るとき、
 へ、何處迄も追つて行く、漸々に裏山を右に廻り、
 行つて遺るぞツ、と、果ては意地になつて、木の根岩角踏み越
 様に相成つた、彌陀次郎は夫れにも屈せず、
 聲が山の半腹所へて居つたのが、次第に奥深く聞へる
 任せ、ズン、と山中へ分け登り、今迄、
 任せて、半腹所へて居つたのが、次第に奥深く聞へる
 す之れ迄歩つて来たのでございませう、左れば彌陀次郎は足に
 依つて、夫れを救はうと云ふ考へがあるばかりで、
 し、雞の鳴聲を聞いて、何か變な事があるで、
 んだら、一命に關はるなると、怯々する様な氣象ではない、
 神となつて居りますから、大江山の魔處は何うの足を踏み込
 信仰の力は恐ろしいもの、道心堅固に物を疑はず、大丈夫の精

空 清 坊 轟

は、居る、前編にも申し述べる、
 居る、前編にも申し述べる、
 も、天運と諦めて、事の望んで少し居る、
 と、登つて行く、斯うの野望で少し居る、
 て、居る、位、左に彌陀次郎は少し居る、
 てる、兎も角、左に彌陀次郎は少し居る、
 て、ら、れ、て、立、入、る、命、を、失、ふ、か、
 に、裏、山、に、立、ち、入、る、命、を、失、ふ、か、
 者、は、あ、り、ま、せ、ん、若、し、一、年、二、度、の、山、許、し、の、日、を、除、く、の、外、は、立、ち、入、る、
 た、處、で、あ、つ、て、實、に、物、凄、い、魔、處、で、滅、多、に、奥、の、方、へ、は、立、ち、入、る、
 大、江、山、へ、と、分、け、登、る、此、の、大、江、山、は、人、も、知、つ、た、る、鬼、の、住、ん、で、居、
 べ、て、く、れ、ん、と、豪、膽、極、ま、る、間、野、彌、陀、次、郎、は、鈴、を、打、ち、振、り、
 い、假、令、日、が、暮、れ、た、處、で、何、か、あ、ら、ん、イ、デ、ヤ、乗、り、込、ん、で、取、り、調、

三に切り掛つた、彌陀次郎は口に念佛唱へながら、ヒラリと身を駈けて居りました、今しもヤツと叫んで、件の鈴を發止とばかり、糸萩望んで投げ附けた、規いは遠はず、鈴は忽ち糸萩の右の肩口に當つたと思ふ一刹那、糸萩はアツと悲鳴の聲共、頭顛倒と打つ倒れ、其の儘氣絶して仕舞つた、彌陀次郎は夫れには目も掛けず、急ぎ切り株の側へ駆け依つて見ると、豊に圓らんなや見るも無慘に少年が、切株の上へ横たへられ、手兩足を大きな釘で打ち付けられた上、手足四ツ共切り放され唯胸体ばかりとなり、血鹽は物凄さばかりに流れ出で、最早や呼吸絶へて居りますから、彌陀次郎は此の有様を見て、アツとばかりに仰天なし、彌ヤ、之りや何うじや、餘りと云へは慘酷な殺し方である、然し死んで仕舞つた上は仕方がない、今一足早く來れば、斯く淺ましき殺し様はさせまいもの、ア、惜しい事をいたした、此の上は何處の少年かは知らないが、死後の

を睨んで居る形相、其の物凄さは何に譬へん様もございませぬ大抵の者であつたら、アツと腰を抜かして氣絶をする處であります、彌ヤ、借ては雞の鳴く音が此處へ來ると同時に、バツタリ止まつたのは、我れを此の處へ導いた印しであらう、夫れにしても斯かる深山の中、不思議の事を見る者だ、一体之れは何うしたのであらうと、隣踏して居る其の折柄、彼方にあつては糸萩が、今初之丞の首を打ち落さうとする途端に、鈴の音に妨げられ、利へ思ひも依らぬ法師体の男が來ましたから、糸萩は怒るまい事か、糸オ、借ては此の法師が振つて居つた鈴の音が腹に堪へ、何うしても斧を打ち下す事が出来なだのかッ、己れッ能くも此處へ出て來せた、此の上は彼奴も一緒に殺して遣らねば置かん、と、惡鬼の如く狂い廻り、斧を投げ捨て懐劍抜くよと見へたるが、バラ／＼と彌陀次郎に走り寄り、物をも云はず無二無

空 清 坊 轟

此處に何うして居りましたので……確かに阿母さんの爲めに手
 足を切り放され、死んだに違ひございませぬが……彌ウム、思
 僧も左様思つて居る、夫れに谷間の水を其方に賤ぎ掛けると、
 手足は元の様にクツ着き、唐紅に流れて居つた血汐も、跡方も
 なく消へ失せるとは……借ても不思議を見るものじや」と、兩
 人は唯々驚くばかりでございませぬ、然し之れは佛の御力に依
 つて、斯かる不思議を現はされたのであつて、鷲尾家の忠臣高
 木彌會太郎の一人初之丞を、同じ鷲尾家に縁因のある間野彌
 次郎が助ける、と云ふは、之れ所謂觀世音菩薩の爲せる所業で
 ございます、初之丞は彌陀次郎に向つて「初モシ、此處は何處
 でございます、私は何うしたのでございませう」と尋ねられ
 て彌陀次郎も、初之丞に問いたのでございませう、と尋ねられ
 ば、大江山の裏山で、俗に魔處と云ふて人の通はぬ深山じや
 シテお前は何と云ふ名じや、初ハイ、私は初之丞と申しまして

空 清 坊 轟

供養を營んで遣るより外はない」と、打ち附けたる鐵の大釘を
 抜き取り、手足と胴体とを継ぎ合せ、落ちたる鈴を拾い取り、
 二度三度打ち振つて稱名唱へ、彌陀何れ、一滴の水でも手向け
 遣らうと、月光を便りとして谷間へ下り來り、水を鈴に盛
 つて元の處へ戻つて參り、夫れを初之丞の身体に賤ぎかけると
 不思議や切り放されたる手足は、自然と胴体へクツ付いて元の
 如くなり、初之丞はムクムクと起き上り、氣抜けがした様に黙
 然と切株の上に座つて居る、流石の彌陀次郎も餘りの事に呆れ
 果て、彌オヤ、奇体な不思議を見るものじや……と、初之
 丞の顔ばかりを見詰めて居る、稍あつて初之丞は、キョト、
 四邊りを見廻しながら、漸々正氣に立ち返つた様な風で、頻り
 に手足を動かさしめて、小首を傾げて居りますから、彌陀次郎は
 イヨ、不思議の思ひを爲し、彌コレ少、其方は一体何うし
 たのじや……と、初之丞は始めて口を開き、初ハイ、私は今迄

門に入り、尼法師となり、切めて今迄の罪を滅ぼしたふ存じま
す。……と云ふかと思ふと、側に落ちたる短刀拾い取り、我れ
と我が黒髪を根元から、ブツ、ブツと切り拂つた、彌陀次郎は之
れを見、彌陀次郎は直に眞如の境に到ると、眞心佛名を唱へる時
は、深き罪ありと雖も、斯く懺悔を爲し、佛の道に歸依する心
生じたる以上は、其の罪滅びて善根を萌したるも同じ事、左
は、今迄の事を残らず坂口重左衛門殿に物語るが宜からうと、
云はれ、糸萩は承知をいたし、彌陀次郎が剃刀を取つて、糸萩の黒
髪を剃り落し、其の名も圓妙尼と改めて、茲に糸萩は尼法師の
姿となり、黒髪の名も圓妙尼と改めて、茲に糸萩は尼法師の
之の丞の手を引いて坂口重左衛門の屋敷へ差ぎ行く、間野彌
陀次郎は兩人に別れを告げ、粟生野の光妙寺へと戻つて参りま

悔をいたしました。彌陀次郎は、後悔をしたと云ふか、シテ、佛
の爲めに、鈴を右の肩口に打ち附けられ、其の儘氣絶いたしま
した。……彌陀次郎は、其の恐ろしい者とは何んな者であつた……と、
問ひ詰めて居るばかり、彌陀次郎は、顔に深き懺悔の色を現はし、只悄然と
打ち萎れて居るばかり、彌陀次郎は、如何な素性であるかと
いから、素より何う云ふ婦人であるか、如何な素性であるかと
云ふ事は、勿論知る筈はない、夫れゆへ重ねて尋ねますと、糸
萩は我が身の素性を詳しく語り、夫れ只今、氣を失ふて居まし
た中に、夢ともなく幻ともなく、觀世音菩薩が御姿を現はされ
ました。……論し給ふと思ひますと、其の儘フと蘇生いたしました
蘇生り、論し給ふと思ひますと、其の儘フと蘇生いたしました
した罪の数々、恐ろしく、今迄の悪い心は悉く消へ失せ、之れより佛

れたか、夫れは又能くこそ届けてくれた、早く此方へ案内せよ
ど、圓妙尼と初之丞を奥へ通す、重左衛門は勿論圓妙尼を糸萩
どは氣が附かぬ、眞逆糸萩が頭を刺りこぼつて、俄かに青道心
となつて此處へ來やうとは思ひも寄らぬ事であり、立ち歸つ
が附きそふな事はありませぬ、重オ、初之丞か能く立ち歸つ
た、シテ尼僧どのには、何處で此の者をお助け下さつた、厚く
お禮を申し上げる「スルト圓妙尼は顔赤らめて頭を下げ、圓
イ、如何にも初めてお目通りを給はりました者どの思召かは存
じませぬが、妾は之なる初之丞の繼母で一昨日無理矢理攫つ
て歸りました、糸萩の成れの果てございませぬ、云ふを
聞いた重左衛門は、打ち驚いて眠つと見ると、成程姿こそ變つ
ては居りますが、糸萩に違ひありませんから、一刀引き寄せ借
つと身構へた、夫れも其の筈でございませぬ、糸萩が普通の婦
女ならば、多寡が婦女一人、別に恐ろしくも怖くもありません

すると云ふ、轟坊の清玄、まつた母の小萩が亡靈、尾家に附き
纏ひ、種々様々なる祟りをいたします、怪談は、之れより順次
口演じ上げませう……

第十席

坂口重左衛門の屋敷門前へ出て參つたる糸萩の圓妙尼は、玄關
へ差し掛つて「圓ハイ、妾は圓妙尼と申しますもの、初之丞
を伴れて參りました、何うか御主人様へ御面會いたしたふ存じ
まする」と、申し入れた、坂口の屋敷では、初之丞を糸萩の爲
めに昨日奪い去られ、未だに大騒ぎの最中でありました、今
計らずも其の初之丞が、一人の尼法師に手を取られ、立ち歸つ
て來たので、取次のものが、大に驚き且は喜び、直様此の趣
きを奥の間に居る主人重左衛門に申しますと、重左衛門も夢か
とばかり打ち喜び、主人重左衛門に「尼法師が初之丞を連れて
來たので、取次のものが、大に驚き且は喜び、直様此の趣

が、昨日初之丞を攫つて逃げ出した鹽梅は、逆も人間ではなく
つて怪物であるから、油断も隙もあつた者ではない、夫れゆへ
重左衛門は、一刀取つて思はず身構へ、重ヤア、借ては怪物奴
又も姿を變へて我が屋敷へ入り込み、何んとかする所存である
う、己れッ今度は其の手は食はぬぞッ」と、聲荒げて罵ります
と、糸裁の圓妙尼は手を舉げて押し留め、圓妻を、怪しいもの
との思召し、御立腹は左る事ながら、暫らく御猶豫下さいまし
て、妾の申し述べたる事を、一通りお聞き取り下さいませ……重
エ、ッ、何に申すか……早く云へッ其處で圓妙尼は、我が
身の上が初之丞の事、まつた杉の木に魅入られた事、初
之丞を杉の切株の上で殺害なしたる事、間野彌陀次郎の事から
觀世音菩薩のお告げを蒙むつた事なぞ、殘らず物語り、圓今
全たく後悔懺悔いたしまして、此の様に俄か道心となり、お詫
の爲めに押し出てきました、何うか御安心下さいませ、此

の上は之れなる初之丞を、高木彌會太郎殿のお屋敷へ、何うか
お届けの程を願います、唯一目逢いたいは、娘の花野でござい
ます、彼れは妾と彌會太郎殿の間に出来た子の様に披露はして
ございませうが、實は御主君様のお胤でございませう……と、聞
いた重左衛門は、驚き重アム、夫れで思ひ出した一昨
日御身が初之丞を受け取りに來たせつに、何處か見た様な顔だ
と存じ居つたが、借ては奥女中の糸裁であつたかッ、彌會太郎
の息女花野が、主君の御胤とは今迄知らなかつた、夫れに付い
て聞く處に依れば、花野殿は先日以來行術知れず、高木彌會太
郎も大變心配をして、八方へ人を出し大騒ぎをいたして居ると
やら、余り仰ぐしと思つたが、左様云ふ事情がある爲めとは
思ひ掛けない處である……と、聞いた圓妙尼は落膽いたじ、圓
エ、ッ、夫では花野も行方が知れませんか、之れと云ふのも妾
の罪も同然、彌會太郎殿初瀬殿に一目逢ふて、お詫も申したふ

驚き且は喜び、彌々、然らば初之丞は未だ生きて居ります。か、妻何うか、早く連れ歸つて下さいませ。……と、云ふを彌會太郎は押し留め、彌イヤ、待て初瀬、重左衛門殿のお知らせは、忝けなく存すれども、花野の行方、知れぬ中、決して初之丞を家に入れる事相叶はん、實は坂口殿お聞き下され、彼の娘花野と云ふは、主君の御胤であつて、大切なる預り物、同然、然るに、行方不明とあつては、御主公に對して申し譯なし、殊に近來、櫻姫様は御健康勝れさせ給はず、御館は殊の外、御心配の折柄、斯様な事を、お耳に入れるは如何ぞ存じ、ワザと秘密にはいたし居るもの、我々夫婦の心痛は一方ならず、處へ差して折も折、我が實子初之丞一命無事に立ち歸つたとは申せ、決して喜ばふべき場合ではござらん、御主君に御遠慮申すべきが至當と心得ます。都合に依つては養子として何れへ遣はしても苦しふはござらん。

は存じます、今更らオメ、屋敷へ行ける義理ではなし、寧ろ之れより廻國をして、花野の有家を尋ね出し、夫れを功にお詫に参りませう、此の上は何うか初之丞を高木家へお届けを願ひたふ存じます。重イヤ、宜しい、萬事は拙者が引き受けた然し、其方も花野を失ふて、定めて悲しい事であるが、今は三上で拙者屋敷へ歸るが宜い、借と宜きに計らい得さすであらう。界無庵の尼法師、之れより三年を限つて諸國を修行なし、其の上で、情けある其の言葉に、圓妙尼は涙に咽び、圓夫では、仰せに、從い、廻國修行旁々、花野の行方を探しませう。……と、重左衛門に別れを告げ、初之丞にも夫々暇乞をして、瓢然と何處にもなく立ち去ります。跡に坂口重左衛門は、重初之丞、喜ばへて置く方、父と云ふは、驚尾家の忠臣高木彌會太郎の屋敷へ参り、捨て置く譯に相成らん。……と、直様高木彌會太郎と妻の初瀬は、或いは云々、斯様く相成らんと、彌會太郎と妻の初瀬は、或いは

竊 坊 清 空

の鳩山典膳は如何なる素性の者であるかと云ふと、鷲尾家の
爲めに亡ぼされたる信太平太夫の一族でありまして、信太家の
滅亡を残念に心得、如何にもして鷲尾の館へ入り込み、機立
乗じて信太家を再興なさるものと、ワザと他國の浪人と云ひ立
て、野分の方に取入りつて、首尾能く家來となり澄し、野分の
方の淫婦なるに付け込み、旨くタラシ込んで國の伽を爲し、密
かに悪計を廻らして居るのでございまして、處が隠すより現は
る、はなし、不圖した事から此の事を知つたのが、鷲尾家無二
の大忠臣、篠村次郎公光でございまして、大いに次郎公光は鷲
さましたたが、左あらぬ体で尙も様子を探りますと、イヨ、
山典膳は信太家の一族であると言ふ事が相判つた、其處で次郎
公光は、三木之助宗雄に密かに言上なし、召し捕りの手段を廻
らして居ります、其様な事に言上なし、召し捕りの手段を廻
は、鷲尾の館へ仕官なし、野分の方の氣に入りと、此方鳩山典膳

竊 坊 清 空

重イヤ、御胸中を承まはり、誠に感服を仕つた、此の上は御望
に任せ、確かに初之丞はお預り申そう、決して御心配召さるな
...と、重左衛門は呉々も彌會太郎夫婦の者を慰めて立ち歸る
處が此の鷲尾家には、櫻姫には清玄の亡霊が常々移
り、野分の方には無惨の死様をした清玄の母小萩の怨靈が常々
祟り、爲し、目下櫻姫は病氣、野分の方は兎角亂行止まず、以
前高木彌會太郎に聞の伽を爲せて居りました爲め、三木之助宗
雄が反間苦肉の計略を以て、女中に糸萩に手を付けて懐妊させ
之れを彌會太郎にスリ付けて、殊勝氣に行い濟して居りましたが、
分意見に及んだ當時こそ、殊勝氣に行い濟して居りましたが、
日が経つに従つて、ポツと地金を現はし、五十に近き年齢
を以つて、新參召し抱への鳩山典膳と云ふものを寵愛なし、一
門郎黨の手前も耻ぢず、頻りに浮かれて居ります、然るに此

ツと庭前へ飛び込み、櫻の大枝に中つたかと思ふ間もなく、サ
 シも大きな櫻の枝は、メリ／＼と烈しき物音と共に、ポッ
 キと折れて地上へ頭顛倒と落ちて来た。此の凄まじい有様に、
 典膳と六藏はアッと云つて、思はず叫びました。六藏は杯をパツと
 イと六藏の顔を見ると、斯はソモ如何に、六藏は杯をパツと
 の上へ投げ付け、忽ち居丈け高になつて、兩眼赫つと怒らし、
 六如何に典膳、我こそは大江山に於いて、驚尾家の當主三木之
 助宗雄の命に依り、初之丞の爲めに空しく切り倒された杉の
 木の精である、能く我が申す事を聞けやツと、呼ばる聲に
 典膳は、之れはとばかり打ち驚きました。元來奸智に長けた
 奴でありますから、忽ち何か打ち點頭さし、典膳は疾く申せ、
 う云ふ事を申す積りか、典膳之れにて聞こう、疾く申せ、早く
 驚尾家に祟りを爲し、初之丞奴を殺さんと手段を施すと雖も、

り、特別の關係を附けて、新參ながら大いに權威を振い、何う
 云ふ様にして、驚尾家を乗り取つたものであろうと、毎日館より
 退りますと、屋敷に閉籠つて、頻りに肝膽を碎き、奸策を廻ら
 して居る、今日も今日とて、幸い閑でもあり、余り退屈なるま
 、に、六藏と云ふ氣に入りの下郎を相手に酒を呑みながら、
 コリヤ六藏、乃公が今に出世をしたら、其の方を立派な武士に
 取り立てて、やるぞッ、六へエ、何うかお願い申します、旦那様
 は御後室様の御寵愛を受けて入らつしやるから、今に出世は間
 違いとございませぬ、エへ、云ふ屈強の身体で、彼んな老婆の機
 すな、乃公も未だ三十八と云ふ思惑があるからだ、ア酒でも呑
 嫌を取るのではないが、少々思惑があるからだ、ア酒でも呑
 んで氣を晴らすのが何よりだ、確り呑め、と、六藏に酒
 を酌がせて、グイ／＼煽り立てながら、見るともなしに庭の方
 を眺めて居りますと、空中よりピカ／＼と光る怪しいものが、サ

天運思はしからずして、敢なく事は破れたり、殊に一旦初之丞
を取押へ、大江山にて之れを殺さんといたしたれど、間野彌
陀次郎なるもの、佛力に依つて、谷間の法水を糸萩に漲ぎ掛け
られし爲め、我れ永く糸萩の身に留る事能はず、無念ながらも
糸萩の身を離れたり、此の上は蔭ながら汝の身を守つて、幹を
切られた無念を晴らさんと覺悟せり、然るに茲に汝の身に一大
事件出来いたしたるゆへ、夫れを告げ知らせん爲め、假りに六
蔵に乗り移つたのであるぞ、典エ、ツ、一大事件とは何事な
るぞ、六夫れは、他でもない、汝が野分の方を手に入れ、驚
尾家を颯覆なさん計略破れ、今にも討手の人数差し向ふは必
早く都の土地へ逃げ延びよ、夢疑ふなツと、云ふかと思ふと
六蔵はバツタリ打つ倒れ、氣を失つて仕舞つた、典膳は余りの
不思議さに、只茫然として居ましたが、典オ、左様だ、一刻も
猶豫する場所ではない、兎に角木精の知らせに従い、都の土地

第十 一 席

へ落ち延びやうと、直様有りツ丈けの金子を路用として朋卷
に入れ、兩刀を構へるが早い、其の儘裏門より、何所ともな
く逃げ去せましたるは、誰れ一人知るものとはございません
サア此の場の次第は何うなりませうや、ソハ又次回のお話とい
たしまして、一寸休憩……

淫婦野分の方を手に入れて、次第に驚尾家を乗り取らんと、密
かに企んで居た事が、圖らずも忠臣篠村次郎公光の爲めに見破
られ、次郎公光より此の段主君三木之助宗雄に言上に及んだの
で、宗己れ、不埒至極の奴である、信太の一族とあれば一刻も
猶豫なり難し、直様取り押へて詮議に及べい……と、高木彌會
太郎に命じ、十四五人の人数を従へさせ、密かに鳩山典膳の屋
敷に乗り込み、裏表よりドツとばかりに繰り込んで見ると、豊

から、夫では鳩山典膳奴、風を喰つて逃げたのであろうと云ふ
事になり、一旦は引き揚げて主君三木之助宗雄に此の事を申し
上げると、宗雄は首を傾げ、宗何うも、不思議な事である、彼
奴を召し捕るのは最初より企んで居つたとは云へ、咄嗟の間に
遣つたのであるから、決して他へ洩れるやうな事は萬々ない筈
である、如何なる譯で典膳の耳に遁入つたであらうか、誠に解
し難い事である、と、鷲尾家の老臣勇士に到る迄、何れも首を
捻つて不思議がつて居るものばかりであり、話も何れも首を
此處に又鳩山典膳奴は、不意に下郎の六藏へ大江山の杉の木精
が乗り移り、早々此の處を立ち去つて都の土地へ行
き、密かに時節を待て、左らば信太の家を再興させてやろうと
斯様に云つたもので、直様有り丈けの金を懐中へ捻じ込
み、忽ち屋敷の裏門より飛び出しました、其の儘都へ直に行
くのも、余り早過ぎる様なきが、其の儘都へ直に行

に圓らんや、今迄居つた筈の典膳は何時の間にやら行方知れず
下郎六藏が氣を失つて打つ倒れて居りますから、彌曾太郎始め
何れも大いに驚き、六藏を引き起して蘇生させ、彌ヤア、汝は
主人典膳の行方を存知て居るであらう、何處へ行つた早く申せ
ツ……と、右左りより問い詰められ、六藏は宛ながら夢から覺
めた様な顔して、六へエ、今迄俺と一緒に酒を召し食つて居ら
れませんでした、自分には不意に氣を失ひ、其の後の事は薩張り判り
ません……と、云ふ言葉は偽りとも見へず、更らに捉へ處もあ
りませんから、一同は屋敷の隅々迄、隈なく詮索をして、家探
しに及んだが、何うしても居りません、怪之れは、怪しからん
事である、一家の主たるものが、何時まで立ち歸らぬと云ふ
事もあるまい、暫らく待ち受けて居ろ、と、云ふので、其の
儘待つて居たが、幾時待つても戻つて来ません、日が暮れて
も何の便りもない、次の日も又次の日も、更に歸つて来ませぬ

處かへ身を潜め、鷲尾家の様子を探つた上、の事にいたそうと
ドシ大江村迄逃げ参り、左る百姓家に身を隠し、夫れと
はなく鷲尾家の模様の窺ひますと、案に違はず自分か屋敷を逐
電した時に、捕方の人数が屋敷へ踏ん込み、殿重に行方を詮
中である云ふ事が分つたので、典膳は最早や此處等に魔誤
誤して居る譯には行かぬと、ドンと大江村を立ち退いた然
し飽迄奸智に長けた人物であるから、街道筋を都へ行つては、
世を忍ぶ身の甚だ氣遣はしい、萬一鷲尾家から追手が掛らぬと
も云へない、斯う思つた典膳は、大江山へ分け登つて、裏山
傳いにダンく、丹波と攝州の國境に登へたる、妙見山に差
し掛り、登りは二里、下りは二里二十丁と云ふ時へ歩つて来た
何分此の峠の近傍には、宿屋とては一軒もなく、剩へ日も既に
暮れて夜に入つて居ります、左様かと云つて後へ引返す
驛にも行きませず、暗い夜道を馳走なくも、典膳は時にダンダ

ンと登つて来る、スルト何處で何う路を踏み迷つたものか、行
けども、頂上にも出なければ、下り坂にもならない、行ける處
ツ、此奴は失策つた、道に迷つた様だ、エ、イ儘よ、行ける處
迄遣つ付けろ、と、ズン、分け登つて居ると、到頭怪しげ
なる谷の間へ迷い込んで仕舞つた、幾等構はん人間でも、日が
暮れて山中で道に迷つたほど、尙ほ道のない處へ迷い込んで仕舞ふ、暗
うと焦れば焦るほど、尙ほ道のない處へ迷い込んで仕舞ふ、暗
さは暗し、尋ねやうにも家はなし、流石豪膽不敵の鳩山典膳も
之れには一番當惑して、典ア、困つた、行けば行くほど分らな
くなる、左様かと云つて一處に罷つた、寒くはなるし、身体は疲
之りや何うしたら宜からう、ダンく、寒くはなるし、身体は疲
れて来る、何處か雨露を凌ぐ樵夫の小屋でもあれば宜い、
と、泣かんばかりの顔をして、又もや木の根や岩角を踏み越へ
、遂に山と山との間へ出て参つた、早や其の折には典膳の

ち 窪んだ目に、髭鬚々とはやし、一見身の毛も凍立つ様な面構へ、五人が車座になつて圍爐裡を取り圍み、互いに酒酌み交はして、何か類りに笑い興じて話して居りますから、少とも典膳の來た事には氣附かない、典膳は之れ幸いと、尙も四邊りを見廻はすと、其の男等の頭の上の壁には、槍や弓なぞが掛けてあり、後には剛刀が立て掛けてある。典ハ、ア、之れは樵夫や炭焼き男ではない、山賊の類かも知れない、何を云つて居るか一ツ立ち聞きをしてやろうと、密かに耳を傾けて聞きますと、五人の男は典膳の推察通り、此の妙見山の裏山に住んで居る山賊であつて、旅人を威嚇して金銭を擄き上げ、又は近國迄出稼ぎして、強盗を働いて居ると云ふ事が判つた、此の五人の内、田八、牛五郎と云ふ奴が、今より四五ヶ月前に、丹波の國桑田の郡、尾家の領分地で、一人の娘を奪ひ取つて來た、其の娘は今妙見山の麓で茶店を出して居て、密かに此強盗等と氣脈を

五体は綿の様になつて仕舞い、進退維に谷まつて、尻つと立ち凍んで居りますと、遙か向ふの樹蔭を洩れて、チラ／＼と火の光りが見へる様子、典膳は俄かに氣がシヤンとなり、典ハ、斯かる深山幽谷に於いて、火の光りが見へるとは……借ては何者か、住んで居るのであろうか、樵夫か炭焼き男の小屋か、或いは山賊の類にもあれ、何方にしても地獄に佛とは此の事だ、巧い、道なき處を踏み分けて勇氣を鼓舞し、岩を傳い木の根に攀ち、道なき處を踏み分けて勇氣を鼓舞し、岩を傳い木の根に來つて見ると、斯はソモ如何に、岩窟の前に柵を拵らへ、板を以つて入口を塞ぎ、中には五七人の聲の誰が聞へる、何うやら酒でも呑んで居る様子、典膳は心の中に少々驚きました、根が大膽な男であるから、密かに立ち寄つて、戸の隙間から覗いて見ると、中に居るのは總て五人で、何れを見ても人間か獸物か判らない様な、見分けの附かぬ荒くれ男、ヤロ／＼と光る落

れも時日が遅れると取り返しが附かなくなる、斯様に云つて
 歸つた、如何に大家でも金持ちでも、生きた人間の肝を取る事
 は出来ません、夫婦のものは大いに途方に暮れ、夫れより主人
 の七兵衛は、在方を處々方々と廻つて見たが、借て人間の肝を
 賣ろうと云ふ者は一人もない、仕方なしに立ち歸つて、夫婦は
 沈み切つて居りますと、或日の事でございまして、服装のむさ
 しく、先きへ遣入つて参り、小腰を屈めながら、老へエ、一寸伺
 の店先が、山城屋七兵衛様と云ふは此方でございますか、何う
 い、御主人に會はして下さいませ」と、云ふのを聞いた番頭は、
 ぞ御主人に會はして下さいますか、御當家の旦那様は、
 何處から何用で来たのかは知らないが、御當家の旦那様は、
 お前の様なものを知り合ひはない筈、ア何う云ふ用事で来た
 のか、夫れを云つて見るが宜い、次第に依つたら取り次いで上

大身代持ちであつて、代々主人は七兵衛と名乗つて居る、當代
 の主人は本年四十三歳で、夫婦の間は七太郎と云ふのがあ
 るばかりで、後にも先にも一粒種であるから、常に大事に大事
 をかけて養育して居ましたが、不圖した事から此の七太郎が病
 氣になり、ドツと床に附いて仕舞つた、夫婦は大いに驚いて、
 醫者よ薬よと金にあかして手當を盡しました、少しも其の効
 能がない、家内の者はイロ／＼心を傷めて、手を替へ品を替へ
 療治をいたすと雖も、何うしても癒らない、其處で其の頃栗田
 口に居る、名醫の石川元庵と云ふを迎へ、診察をして貰います
 と、最ふ此の病氣は駄目である、至快は逆も覺束ない、然し唯
 此處に一つの病氣がある、云ふのは外では、男の肝を知らぬ婦
 女、死んだもの、肝は役に立たぬ、夫れも男の肝を取り、夫れ
 へ靈薬を調合して服用したなら、信度癒る事受け合である、夫れ

げまいものでもなくと、余り風体が穢くろしいから、輕蔑し
て申しますと、老婆はフ、ンと鼻の先きで冷笑い 婆「オイ、お
前さんは番頭じやないか、イヤサ蕃的ではないか、何を云つ
てるんだ、豪そうな顔をする事はない、番公は番公らしく、唯
コレくの婆が娘の子を連れて来て、旦那に逢いたいと云つて
ると、取り次やア用事は直と分るんだよ、サツサと取り次なさ
い……と、取つてもつかぬ返答振り、番頭は己れ腐れ婆とは思
い……と、口振り考へると、何か之れには仔細がありそう
に覺へましたから、暇ながら此の事を奥の主人七兵衛に取り
次ぐと、七兵衛は小首を傾けながら 七イヤ、乃公は左様なお
方は一向に知らん、娘の子を連れて来て居ると云ふのか 番
エ、く、七ツ八ツか九ツ十位の娘の可愛らしい兒を連れて来て
居ますので…… 七「フム、マア、何う云ふ用事があるのか知ら
ないが、ヒヨツとしたら…… 生肝の…… 番「エ、ツ、生肝とは、

七イヤ、何でも宜しい、早く之れへ通すが宜い 番「ジャア
彼の乞食の様な婆が旦那のお知己なのですか…… 七イヤ、知己
と云ふ譯ではないが、少と心當りの事もあるのじや、兎も角案
内して通すが宜い 番「エ、畏まりましたと、番頭は不思議
そうに首を捻りながら店の間へ出て来て 番「オイ、其處の婆さ
ん、旦那が會つて遣らうと仰しやる、此方へ通るが宜い 婆「ソ
レ見ろ、番公等の知つた事じやアあるまい……と、憎まれ口を
叩いて、横目に店の者をシロく睨め廻はし、娘を連れてズイ
と奥へ通つた、婆は七兵衛の居間に遣入つて手を支へ 婆「ヘイ
く、御免下さいませ、妾はお勘と云ふ、御覽の通りの者でござ
います、少と御相談いたしたい事がございまして、ワザワ
ザ遠方から参りました、何うかお人拂いを願います……と、云
ふを聞いた七兵衛は、ヒヨイと婆の顔を見て 七「オ、お前は
何日ぞや、妙見山の麓の茶店で出會つた婆さんじやアないかい

申しますと、お勘婆は齒莖をムギ出して、ニタリと笑い、
「は、又、滅相もない事を仰しやいます、妾じやからと申しまし
て、何うして其様な大きな望みがございませう……」とは云ふも
の、此の孫が死んでしまへば、兩親も行末は全たく杖柱を無く
した様な譯でございますから、百や二百では差上げる事も出来
ません、切めて千兩ほどでお手渡ししたふ存じます
「ニ、千兩……」夫れは安いもの、左様なら御意の變らぬ内に……」
と、口には云はねど心に喜び、直様番頭に申し付けて、千兩
箱を持ち出した、お勘婆は金さへ受け取れば、最ふ用事は無い
と、挨拶も其處へにして、件の千兩箱を引つ背負い、急ぎ山
城屋を立ち出でる、此の悪婆こそは則ち、妙見山の麓に茶店を
出し、山賊の手引きをして居つたお勘婆である事は、讀者諸君
は既に御存知の筈、山城屋へ買い取られた娘こそは、鷲尾三木
之助宗雄の胤であつて、高木彌曾太郎の娘花野でございする

慾張りのお勘婆が、山城屋を立ち出でたのは、其の日も早や夜
に入つた宵の事でありまして、近處の居酒屋へ飛び込み、
濡手に粟の掴み取りた、心祝いに一杯飲もうと、婦女ながら
もグイ／＼と四五杯を引つ掛けて勢いを附けて居る、スルト俄
かに空模様が變つて来て、風は吹き出す、雨さへ激しく降つて
来た、お勘婆は今夜の中に都の土地を出やうとの考へで居りま
すので、件の居酒屋を立ち出でまするや、大風呂敷で千兩箱を
重たげに背負い込み、雨も風も何の其のと、足に任せて道を急
ぎ、大荒しの中をズン／＼と、今しも丹波口を出で、檜原街
道へ差掛りますと、何者とも知れず、向ふよりドン／＼と走つ
て来て、ズドンとお勘婆に突き當つた、お勘婆は重い千兩箱を
脊負つて居るから、アツと云ふ間もあらばこそ、思はずヨロヨ
ロと後へ打つ倒れたが、負けぬ氣で聲振り絞り、
「婆エ、イ、何

て大いに喜び、七、到頭、望みが叶つて、悴の病氣も癒る時節、
 來だ、不憫ではあるが、彼の娘を殺して、肝を取り、栗田口の石
 川、先生に差出したら、直に靈薬と開合して、生肝を取れる、夫れさへ、
 七、太郎、飲ませば、全快疑いなしだ、其の夜、娘の花野を殺そうと思つ
 たが、サテ生きた人間を殺すと云ふ事は、天の下の法度であるか
 ら、若し之れが他に洩れでもすると、夫れこそ大變、何う云ふ
 事にして、娘を殺し、肝を取り、先如何にも、人間を殺
 を醫者の石川元庵に相談いたしますと、御世と雖も、人間を殺
 すのは、天下の大罪である、何日如何なる御世と雖も、人間を殺
 して、差構いが無いと云ふ法はない、今は亂世とは云へど、人
 を殺すものは、矢張り殺さねばならぬ、實は拙者とても好んで、
 の、殺したくはない、取つたもの、既、無理に理屈を付ければ、生理解剖と

をしやアがる、彼の此處な盲目奴、突き當つた相手の男は、怒鳴り
 をして立ち上ると、お勘婆の肩先深く、グサとばかりに切
 立、一、刀、抜、き、打ち、お勘婆を、先、深、く、グ、サ、と、ば、か、り、に、切
 云、は、す、一、刀、抜、き、打、ち、お、勘、婆、を、先、深、く、グ、サ、と、ば、か、り、に、切
 り、付、け、た、ワ、ッ、と、お、勘、婆、は、悲、鳴、を、舉、げ、ア、レ、ー、人、殺、し、
 ……、と、聲、を、限、り、に、叫、ん、だ、が、吹、き、降、り、の、大、暴、し、で、あ、り、ま、す、か
 ら、人、の、子、一、匹、通、る、者、は、な、い、男、エ、ッ、何、を、吐、す、ツ、……、と、
 又、も、や、續、け、様、に、二、太、刀、三、太、刀、切、り、付、け、る、と、流、石、剛、慾、非、道、の、お
 勘、婆、も、重、い、千、兩、箱、を、首、か、ら、肩、へ、掛、け、て、居、る、の、で、逃、る、に、逃、ら
 れ、ず、身、動、き、さ、へ、も、出、來、な、い、處、より、曲、ア、ハ、……、と、冷、笑、い、な、が、ら、千
 生、命、を、落、す、と、曲、者、は、莞、爾、と、打、ち、笑、い、曲、ア、ハ、……、と、冷、笑、い、な、が、ら、千
 仕、舞、つ、た、曲、者、は、莞、爾、と、打、ち、笑、い、曲、ア、ハ、……、と、冷、笑、い、な、が、ら、千
 兩、箱、を、手、早、く、奪、い、取、り、其、の、儘、何、處、も、な、く、立、ち、去、つ、て、仕、舞、つ
 た、夫、れ、は、借、て、置、き、此、方、山、城、屋、七、兵、衛、の、宅、に、於、き、ま、し、て、は、
 金、で、買、ふ、事、の、出、來、な、か、つ、た、人、間、を、僅、か、千、兩、箱、一、つ、で、手、に、入、れ

來の者附き添へ、都へお乗り込みとなり、栗田口にお下邸を構
に於いて名醫に付き、暫らく御保養と云ふ事に相成り、夫々家
次郎公光、高木彌曾太郎等がサマにお勧め申し、都の土地
り、老臣坂口重左衛門、まつた忠義無類の田島造酒之丞、篠村
は、櫻姫が近頃御病氣で、ナカノ御全快の模様が見へぬ處よ
お話は又も變つて、茲に丹波桑田郡鷲尾家の御館に於きまして

第十三席

いたします、如何に相成りませうや、何時もながら次席のお楽しみと
事件は、密に心配をして居りますと云ふ、サア此の生肝取り
たし、密に心配をして居りますと云ふ、サア此の生肝取り
此の二人の話を立て聞きしたのが、石川元庵の下僕の忠助で
さいます、忠オヤツ、大變な事を相談して居る、之りや驚い
たし、密に心配をして居りますと云ふ、サア此の生肝取り
たし、密に心配をして居りますと云ふ、サア此の生肝取り

居り、命を取らぬ、左様云ふ御都合なら、何うぞ萬事宜しくお願ひ
打ち喜び、七夫れは、先生有り難ふございませ、人間一人の
貰い受け、解剖いたしたい所存でござる、又其の死骸は此の方
取る事は拙者に於いて引き受け申そう、又其の死骸は此の方
越したる喜悅はござらん、左れば其の娘の生命を断ち、生肝を
然るに今茲に年來の望み叶い、夫れが出来ると云ふは、之れに
出来る譯ではなく、何分人間を断ち切るに付いて知りた
心得て居るが、何分人間を断ち切るに付いて知りた
は、人間の五体の組み立てを、生きたる人間に付いて知りた
云はれるのじや、拙者は何うかして此の道に通ずる爲め、一度
ざる、今頃の醫者が此の事を知らないから、蓋し醫者とか
又、其の呼吸の働き等を知るは、醫者として尤も肝要な事
云つて、人間の身体を切り開き、筋骨を組み立て、臟腑の鹽梅

へ、之れへ御滞在と相成り、矢張り名醫の噂高き石川元庵に付
いて、醫藥の手當に及んで居られましたが、老臣坂口重左衛門
は、時に篠村次郎公光、まつた妻の山吹に頼んで、屋敷に預つ
て居る初之丞を一行の中に加へ、櫻姫のお側役を爲す事といた
しまして、何日か初之丞が此の櫻姫の薬を石川元庵の屋敷へ取りに行くの
は、何日か初之丞が受け持ちで、隔日に石川の處へ参つて、薬
を買つて來るのが例になつて居りました、今日も今日とて初之
丞は、藥取りの使いに石川方へ歩つて來た、然るに石川の下僕
忠助は、到つて小供好きで、初之丞の可愛らしいのを大變愛し
て、來る度に毎に坊様と愛想を云ふ、初之丞も未だ漸々八歳
ではあるが、惻愴發明な生れであるから、忠助も慕つて居
る、スルト初之丞が藥を取りに來たのを見て、忠助は何に思
いけん小蔭に招き聲を密めて、初オ、忠助、坊様、お前さんに宜い者
を見せて上げませうか……

怖いものです、初オニ怖い、構はない見せておくれ、忠
今此處にあると云ふ譯ではないのです、今夜の真夜中頃でない
と不可ません、初オ、ア、真夜中とは可笑しいな、何でも構は
ん見たいな、忠ケド、坊様は驚いて目を眩すに違ひございませ
んせ、初オアニ、坊も武士の胤だよ、驚く様な腰抜けではない
是非見せてくれ、欺すと聞かないよ、忠夫じやア、今夜此處
の裏門迄お越しなさい、珍らしいものですよ、幾等お金を出し
たからと云つて、逆も二度と見られる譯のものじやアありませ
ん、初オ、面白いな、ケド忠助、何んなものか聞かないと、
真夜中にワザ、出て來る精がないよ、一遍云ふのも同じです、夫で
てくれ、忠ハ、一遍云ふのも同じです、生肝取りです、夫で
は申しませう、屹驚しなさんな、肝取りです、生肝取りです、夫で
初オ、生肝取りと……忠ソレ、屹驚なさつたでせう、生
た人間の腹を割つて、生肝を取り出すのです、初オ、其の

忠ダカラ、人知れず遣るんですよ、實は云々斯様くの陣で殺
すのたそうで... 鬼に角人間の生肝取りなんで、容易に見られ
る陣の者じやアありません、今夜必らずお越しなさい、裏門を
ソツと開けて... 人に知られちやア不可せんせ、左様すると
俺が築山の左りの方の植込の中へ隠れて居りますから、其處へ
お出でなさい、二人が姿を隠して居て、生肝取りの有様を見ま
せう初ッム、お屋敷を抜け出る事は難かしいが、何うかして
来て見よう、忠イエ、屹度待つてますせと、お下屋敷に歸つて
之丞に勧めら、初之丞は半信半疑のまゝで、お下屋敷に歸つて
参りましたが、何うも忠助の云つた事が氣に掛つてなりました
初若しや、生肝取りが眞實であるとする、其の肝を取られる
娘の子は可哀想なものじや、何と加して助ける工夫はあるまい
か、と小供心にもイロく、と心配をしましたが、之れぞと云
つて宜い思案もございませぬ、其の日は何なく暮れて夜に入り

人間は死ぬるであらう... 忠ハ、ハ、ハ、元談じやアありません
よ、何處の世界に生肝を取られて、生きて居る奴がおりますも
のか、初夫では、人殺しではないか、忠へイ、人殺しも人殺し
並々の人殺しとは質が違ふんです、生きてきたビチくして居る人
間の腹を断ち割つて、中から肝を取ろうと云ふのだから、見や
うたつて容易に見られる、當分は違ひますよ、余り例のない珍
らしい事だから、お前さんに内証で見させて上げるんです
聞いた事、初之丞は、左様な事を誰が何處でするのじや、忠ッ、夫れは
大變な事じや、左様な事を誰が何處でするのじや、忠ッ、夫れは
大變な事じや、左様な事を誰が何處でするのじや、忠ッ、夫れは
に、裏庭の築山の蔭でソツソリと遣るんです、其の腹を断ち割
られ、裏庭の築山の蔭でソツソリと遣るんです、其の腹を断ち割
夫れは可哀想ではないか、何うかして助けてやる工夫はないか
い、人を殺すなんて、天下の御法度で自分も死なねよなるま、

之れはと初之丞はムツクり起き上り、四邊りを見たが、何も居
りません。初之丞は、イヤイヤ、不思議じや、今頃雞の啼く時分
ではなし、又此のお下屋敷には雞なぞは飼ふて居られぬのに、
枕許で啼く譯はない、夢かと思ふと夢でもなし、妙な事がある
ものじや……と、初之丞は寢床の上で起き直り、狭い胸に思案
をいたしながら、不圖思い出しましたるは、初ウム左様じや、
自分が大江山の魔處で杉の切株の上で殺されやうとした時に、
間野彌陀次郎殿が乗り込んで来て、助けて下さつた時に、何で
も雞の啼き聲で變事を知り、聲に導かれて此處迄来たか、仰しや
つた、スルト雞の啼く聲は、何か自分と因縁があるのではある
まいか、何うも氣掛かりでならぬ、若しや忠助から聞いた生肝
取りの一條、夫れに付いて雞が變事を知らせて呉れるのかも知
れん……と、斯ふ思ひ出すと、打ち捨て、置く譯に行かなくな
り、起き上ると、其の儘衣物を着込み、密かにお下屋敷を抜け出

ますと、初之丞はイヤイヤ、胸安からの思ひをして、初ア、何
うしたら宜かろ、人に話をしやうにも、忠助は誰にも云はれ
んと云つたし、左様かと云つて此の儘捨て、置いては、生きた
人間が無慘く殺される事になる、困つた事じや……と、獨
り寢床の中での氣を揉んで居る、夫れも其の筈でございませう
生肝を取られると云ふ花野と初之丞とは、云は、義理ある姉弟
同様にございませうから、虫が知らずとも云ふ者でありませう
初之丞は其機な事とは少しも存知せんから、心を悩ましな
相成りますと、不圖何處からともなく、雞の啼き聲が聞へる、
初之丞は其の聲が耳に退入ると其のま、ハツと驚いて目覺め
初オヤツ、確かに雞の啼く聲がした様だが、未だ雞の啼きそ
な時刻ではない、可笑な事があるものじや……と、枕頭で聞へる
ウト、
ますと、初之丞はイヤイヤ、胸安からの思ひをして、初ア、何
うしたら宜かろ、人に話をしやうにも、忠助は誰にも云はれ
んと云つたし、左様かと云つて此の儘捨て、置いては、生きた
人間が無慘く殺される事になる、困つた事じや……と、獨
り寢床の中での氣を揉んで居る、夫れも其の筈でございませう
生肝を取られると云ふ花野と初之丞とは、云は、義理ある姉弟
同様にございませうから、虫が知らずとも云ふ者でありませう
初之丞は其機な事とは少しも存知せんから、心を悩ましな
相成りますと、不圖何處からともなく、雞の啼き聲が聞へる、
初之丞は其の聲が耳に退入ると其のま、ハツと驚いて目覺め
初オヤツ、確かに雞の啼く聲がした様だが、未だ雞の啼きそ
な時刻ではない、可笑な事があるものじや……と、枕頭で聞へる
ウト、

して、ドン／＼と石川元庵の屋敷へ駆け附ける、間もなく歩つて来た初之丞は、晝間忠助と約束した通り、裏門へ廻り戸を押して見ると、何の苦もなくスイツと開いた、仕合せよしと初之丞は、足音忍んで内部へ這入つて見ますと、成程築山があつて、其の側に植込みがある、初ハ、ア、偕ては忠助は此の中に隠れて居るのだな、ヨシ／＼と、自分もソツと潜り込みますと、果して居るのだから忠助が聲を密めて、忠モシ、坊様ですか、初之丞様ですか……初オイ忠助、初之丞じや……忠イ、宜ふ来なさつた、早く此處へ来て静かにして居るんです、大きな聲を出しちやア不可ません、今に始まりますから……と二人は植込みの中に蹙んで、今か／＼と目を皿の様にして、瞬もせず待ち受けて居ります、此處に又石川元庵は、山城屋七兵衛方から送つて来た、花野を受け取つて、丁度其の日の真夜中過ぎ、花野には猿轡を啣ませ、両手を後手に括り、兼て晝の

中から築山の後に、場處を定めて仕度をして置いた處へ運び出した、花野は我が身が殺されると云ふ事を知つて、聲を出そうと漢掻きますが、猿轡を啣まされて居るので、ウム／＼と云ふばかりで、聲が出ない、身を悶へても手は後に縛られて居るし、兩足も括られてあるので、何うする事も出来ませぬ、元庵は夫れを横抱きにつつ抱へて、築山の蔭にソツ／＼と出て参り、梅の木の間へ確かかど括り付け、先サア、之れからだ、不憚だが何うも仕方がない、お前が死んでも人を助けるのだから、功德になる譯だ、泣いても動いても逃げる事は出来ないので、じや……と云ひつゝ、帯を解き放し、胸から腹を出して撫で廻し、手に持った籠燈提灯の灯影に照して、莞爾と打ち笑み、ズラリと抜き放したは、一尺七八寸もあるうと思はれる一刀、逆手に持つて信つと身構へ、咄嗟花野の胸許望み、ブスツとばかりに突つ込まんとする、之れ此の儘であつたならば、憫れ花野は兎及に掛つ

ち捨て置かすから、素早く走り寄り、其の細を解くと共に、物をも

大いなる驚き、次夫は、怪しからぬ事である、何は兎もあれ打

又忠助の話、始終残らず詳しく申しますと、篠村次郎は

でございませう、石川元庵の屋敷で今夜あつた一伍一什、

ハイ、篠村様、此の婦女は何處の者かは知りませんが、斯様

だ、と尋ねられて初之丞は、漸々脊負つた花野を下したの

光は、次コリヤ、其の方々は初之丞ではなにか、一体何うしたの

大呼吸ついでフウ、云つて居りますので、中にも篠村次郎公

驚いて飛び出して見ると、初之丞は一人の娘の子を脊負つた儘

たので、此の物音に皆々目を覺し、何事が起つたのであろうと

な事を考へて居る暇がないから、大慌てに慌て、駆け込んで來

人知れずソツと出たのであります、大慌てに慌て、駆け込んで來

とお下屋敷へ駆け戻つて來る、初之丞は先刻此處を出る時には

云はず引つ脊負ふて、逸散に裏門より走り出し、ドン／＼

り、全たに落命いたすのでございませうが、此の時遅し彼

の時、早し、チラリ眺めた初之丞は、アツと叫ばんとして、我れ

と我が口を押へ、思はず足許にあつた小石を拾い取り、植込の

中から龍燈目掛け、バラ／＼と投げ附ける、イヤ驚いたのは忠

助よりも元庵でございませう、四邊りに人は居ないと安心して

居た奴が、不意に暗の中から飛んで來た礫が、第一のは龍燈、

次の元庵の頭顱に當つたから堪らない、燈火はパツと消へて

元庵は屹驚仰天、龍燈夫れへ投げ出して、夢我夢中で屋敷の中

へ逃げ込んだ、餘りの事に忠助も、我れを忘れて何處ともなく姿

を隠した、初之丞は之れ又我れを忘れて、ヒラリと植込の中よ

り飛び出し、築山の蔭に來たつて見ると、自分より梅の木根

女の飛び出し、築山の蔭に來たつて見ると、自分より梅の木根

元の子が猿轡を啣まされて、後手に括り上げられ、梅の木根

元に縛り付けられ、素早く走り寄り、其の細を解くと共に、物をも

處へ差して丹波の鷲尾家の館より、高木彌會太郎が用事あつて
夜通しで都のお下屋敷へ到着した、其處で篠村次郎は彌會太郎
に面會なし、昨夜以來の顛末を物語り、初之丞の手柄を賞めて
初之丞と件の娘の子とを連れ出すと、彌會太郎は一目花野の顔
を見るより彌會、之れは娘花野でないか、花オ、阿父様
逢いたふございましたと、互いに手に手を取り交して嬉し涙
に暮れて居る、篠村次郎も初之丞も大いに驚き、初エ、ッ、夫
では阿父上様、之れは私の姉上でございませうか、彌如何にも、
姉の花野である、其の方は幼少の砌り、糸萩に連れられ家出い
たしたに依り、能くは其の顔も覺へまいが、糸萩の生み落した
花野である、乃公は最早や此の世に無きものと思つて居たに
能ふマア無事で居てくれた、現在我が子の初之丞に助けられる
とは、之れも盡せぬ何かの因縁であらう、コリヤ花野、其方は
悪者に誘拐かされて、其の後は何れへ連れられて行つたのじや

……と、尋ねられて花野は、涙ながらに事も細やかに申します
と、篠村次郎と高木彌會太郎、まつた初之丞迄も共に涙を催ふ
し、花野の恙なきを祝して居る、其處で彌會太郎は櫻姫に對面
して、野分の方が待ち詫びてござる趣きを傳へますと、櫻姫も
最早病氣は快くなつて居る時でありませうから、櫻夫では、今日
之れより立ち歸る事にいたそう……と、俄かに出立の旨仰せ出
させ、粟田口のお下屋敷を引き拂い、家來に警固されて丹波の
國へお歸りとなる、歸る途中に於いて、彌會太郎は圖らずも糸
萩の圓妙尼に出會い、花野を引き合して無理に本國へ連れ歸り
ました、圓妙尼は我が娘の無事なる姿を見て打ち喜ぶと同時
に、イヨ、彌會太郎の情けに感じ、圓之れで、妾は安心いた
りました、何うか主君様にお願ひ申し、花野は一ツ年層ではあ
りませんが、初之丞と夫婦様にしてやつて下さいます様……と、
云ひ置いて再び廻國修行に出で、二年ばかり経つて丹波の國へ

借ても、尾の館に於きましては、櫻姫が病氣全快に及び、都より立ち歸り、彌曾太郎の世話で、大江山の麓へ草の庵を結び、彌曾太郎よりの仕送りを受けて、道心堅固に行き、澄したと云ふ事、あります、イヤ之れは後日のお物語り、又彼の花野を山城屋に賣り附けて、千両を捲き上げたお勘婆を切り殺した曲者は、之れぞ鳩山典膳でありまして、千兩の大金を盗んで何處ともなく逃げ去りました、が、悪運何日迄も榮へる例しはございせん、其の年の暮れに到頭丹後の國に於いて召し捕られ、尾家へ引き渡され、直様打首の刑に行はれました、之れで此の度の一件は落着をいたしました、が、又もや、尾家に一ツの珍事出来に及びます、と云ふ、實に恐ろしき怪談のお物語りは、之れよりダンを願います、……

第十四席

借ても、尾の館に於きましては、櫻姫が病氣全快に及び、都より立ち歸り、彌曾太郎の世話で、大江山の麓へ草の庵を結び、彌曾太郎よりの仕送りを受けて、道心堅固に行き、澄したと云ふ事、あります、イヤ之れは後日のお物語り、又彼の花野を山城屋に賣り附けて、千両を捲き上げたお勘婆を切り殺した曲者は、之れぞ鳩山典膳でありまして、千兩の大金を盗んで何處ともなく逃げ去りました、が、悪運何日迄も榮へる例しはございせん、其の年の暮れに到頭丹後の國に於いて召し捕られ、尾家へ引き渡され、直様打首の刑に行はれました、之れで此の度の一件は落着をいたしました、が、又もや、尾家に一ツの珍事出来に及びます、と云ふ、實に恐ろしき怪談のお物語りは、之れよりダンを願います、……

先きが、盡く蛇となり、鎌首を立て、櫻姫の方へ打ち向つた、
何かは以て堪るべき、櫻姫は又もやキヤツと叫んで、其の儘打
つ倒れて氣絶する、大膽極まる野分の方も、暫し茫然として、
を取り落し、後に挫乎と尻餅を搦き、只フウ／＼と胸を擦つて
居ります、さばかり、聴て氣を取り直して、忙はしく侍女共を呼び
櫻姫を介抱させ、呼吸吹き返し、ホツと溜呼吸吐いて居ります
ます、其の翌日も漸々呼吸返し、病いの床に打ち臥しました、
る、其の翌日も漸々呼吸返し、病いの床に打ち臥しました、
野分の方、宗雄を始め、家臣の面々は、心配する一方ならず
サマ／＼に醫藥の養生を盡しました、櫻姫の病氣は只ウツラ
く、と夢中に如く、本性を失つて食も進まず、如何とも詮方ご
さいませ、人の全野分の方、人並より子を可愛がる性分であ
りまして、櫻姫の子は死なふが何うしやうが、更らに頼着はあり
ませんが、櫻姫に對しては殊の外可愛ゆく、堪らさ、日夜側を

覺へず涙をハラ／＼と琴の上にな流し、糸を濡しましたる爲め、
自然と音じめに濁りを生じ、憫れなる聲で唄い出しました、流
石は妙手の調へでございませぬから、夫れが返つて情を催ふし、
聞くもの何れも袖を濡さないものはございませぬ、野分の方
は、向も弾じ鳴らして居ります、影に怪しき人の姿が朦朧と現
は、燈火が暗くなり、火の影に怪しき人の姿が朦朧と現はれまし
に、燈火が暗くなり、火の影に怪しき人の姿が朦朧と現はれまし
た、相成つた、櫻姫はヒヨイと之れを見るより、アツと叫んで倚伏し
に、相成つた、櫻姫はヒヨイと之れを見るより、アツと叫んで倚伏し
怪しもののが現はれて居ります、元來氣丈の野分の方、枕
刀を取りよ、早く、抜く手も見せず、發止とばかり切り付ける
と、バツと一團の青火となつて消へ失せました、只雲でも斬
つた様にフワリと手應へなく、力余つて飛び散り、切れたる糸の
たから堪らない、琴柱は二ツになつて飛び散り、切れたる糸の

有様、櫻姫はアツと叫んで身を悶へ、手足を震はし苦しむ体に
 野分の方は大いに驚き、野「ヤ、斯は大變なり」と、姫を助け
 んと思ひ、立ち上らんといたしますと、不思議や身体痺れて腰
 立たず、頻りに氣を焦ち、蘇掻き狂ふ機會に、忽ち睡りは覺め
 ました、野分の方はホツと苦しき呼吸を吐き、野「オ、借ては
 夢であつたか、ヤレ嬉しや……」と、云ひつゝ、四邊りを見廻はす
 と、豈に圖らんや櫻姫は、仰けさまに打ち倒れて、口よりは血
 の泡を吹き出し、手足を震はし苦しんで居る……野「ヤ、夢か
 と思へば幻であつたか、之りや何うじや」と、直様次の間の侍
 女等を呼び寄せ、櫻姫を介抱いたしましたが、之れよりは毎晩
 く、或ひは床の下で人の悲しむ聲が聞へ、又は家の棟にて高笑
 いするなぞ、サマ／＼の怪しき事あり、果ては晝夜の差別なく
 怪物類りに現はれ出で、殆んど化物屋敷同然の此の有様に、侍

離れず枕許にあつて歎き悲しみ、心を盡して看病いたして居る
 然るに或夜の事、既に丑満頃とも覺しき折しも、櫻姫は病氣の
 疲れで、スヤ／＼と睡氣さして参りましたる折柄、廊下の方に人の足音が、
 物音が、野分の方は不圖目を覺して見ると、館の内には皆て目
 馴れぬ、最も美しくしき切り禿が二人、鏡櫃を掲げて入り來り、
 其方は何者じや、斯く夜中に何れより参つた、鏡櫃を何うしや
 る……と、云へど二人は返答もせず、手を延して件の鏡櫃の蓋
 を取り、莞爾と笑つてパツと消へ失せると同時に、斯はソモ如
 何に、鏡櫃の中よりは、五六百の小さき蛇が、ニロロ／＼と、
 き出し、四方より這い出で、見る／＼、中には懐裡へ這い込
 首筋、手足の嫌いななく、纏い附き／＼、中には懐裡へ這い込

へ、直様お許しと相成つた、彌曾太郎は立ち歸つて、初之丞に
姫、に伺いますと、櫻姫は至極初之丞がお氣に入りでありますゆ
と、見強へ申す、何うか一度お願い申して遣つて下さいます様
左様仰しや、者ではありませぬ、初之丞も何か考へがあるもの
す、らぬ事、申す者、初瀬は、初イエ、小供じやからと申しま
満、を、其の方、如き少年の身で、何を過ぎた事を申すのじや
者、殿、村、殿、さへ手の附けやうがないと、首を傾げて居られ
鳥、殿、村、殿、さへ手の附けやうがないと、首を傾げて居られ
云、ふ、聞いた彌曾太郎は、何々打ち笑ひ、彌アハハハ、田
君、御守、護の爲め、お館へ上げて頂く譯には、参りませんか」と、
姫、君、様、の御身体を憐れ、お館へ上げ、頂く譯には、参りませんか」と、
彌、曾、太、郎、の、御、身、体、を、憐、れ、お、館、へ、上、げ、て、頂、く、譯、に、は、参、り、ま、せ、ん、か、と、
丞、は、根、が、葉、膽、極、まる、少年、であり、ますからして、或日の事父の

居、り、ま、す、る、ス、ルト、此、の、事、を、聞、き、及、ん、だ、る、彌、曾、太、郎、の、一、子、初、之、
の、豪、傑、勇、婦、も、今、は、如、何、と、も、詮、方、な、く、大、い、に、思、案、途、方、に、暮、れ、
へ、火、が、燃、へ、附、き、サ、マ、の、齒、當、を、遣、り、出、し、ま、す、る、の、で、流、石、
び、屋、根、に、大、石、を、打、ち、付、け、る、如、き、音、が、す、る、か、と、思、ふ、と、戸、障、子、
或、ひ、は、怪、し、の、が、澤、山、現、は、れ、互、い、に、舞、い、歌、い、又、は、嘆、き、叫、
又、は、加、持、祈、願、を、い、た、す、と、雖、も、怪、異、は、マ、ス、盛、ん、に、い、た、し、て、
消、支、が、怨、靈、の、所、業、で、あ、ろ、う、と、一、決、し、て、鳴、弦、墓、目、の、法、を、行、い、
で、一、門、郎、黨、の、重、立、つ、も、の、は、評、定、を、開、き、之、れ、正、し、く、清、水、の、轟、坊、
す、警、固、し、て、居、り、ま、し、た、が、少、し、も、怪、異、し、き、事、は、止、ま、な、い、其、處、
篠、村、次、郎、公、光、高、木、彌、曾、太、郎、ま、つ、た、勇、婦、山、吹、等、が、病、床、を、離、れ、
々、は、何、れ、も、安、か、ら、ぬ、事、に、思、い、夫、よ、り、後、は、豪、傑、田、島、造、酒、之、丞、
尾、の、化、物、館、と、云、ふ、噂、が、バ、ツ、と、世、間、に、擴、ま、つ、た、一、門、郎、黨、の、面、
す、途、に、は、之、れ、が、領、分、地、は、申、す、に、及、ば、ず、近、國、に、迄、聞、へ、て、驚、
女、共、は、皆、々、恐、れ、戦、き、病、と、云、ひ、立、て、暇、ま、を、取、る、も、の、引、き、も、切、ら

も早や丑満頃と相成ると、今迄は素そうに云つて居た話も、
 夕光途切れる、何うやら館の内は森閑として、水を打つたる如
 き光景となつて来たと思ふと同時に、何處ともなく一陣の冷た
 い風が、サツと吹いて来た、一同は襟元からゾツとして、思は
 す首を縮めて目と目を見合はして居ると、何うやら雪洞の火も
 ボツ／＼暗くなつて来たと思ふ途端に、何處かでパタリと音が
 する、オヤツと六人の者は顔を上げてヒョイと見ると、座つて
 居る向ふの壁の隅が、三寸五寸づ、パタリ／＼と揚り始めた、
 丁度床の下から竹切れが木片れで以つて、突き上げるかと思ふ
 様に見へます、此の体を見た六人は、甲ウワァー、ソリヤ化物
 が……と、碌々聲さへ出なくなり、ブル／＼と縮み上がり、青く
 なつて居ります、豪氣の初之丞は泰然として少しも騒がず、
 壁の上を眺つと睨まへながら、時々襖の開いたる處より、櫻姫
 の寝處を眺め、初アム、未だ姫君のお身体には變つた事もない

申しますると、初之丞は大いに喜び、磯々しくも脇差を帯し
 て父に連れられ、御館に出で参り、櫻姫のお目通りをいたし、
 まつた野分の方にも御挨拶申し述べ、お次の間に下つて只一人
 膝へ手を置いて瞬きもせず控へて居る、スルト此の事を聞き附
 けて、老臣方の二男三男の連中が、我も／＼と化物見届けを願
 い出で、夕景迄には初之丞の外に、五六人も人数が増へた、或
 いは十二三歳から十五六歳迄の者ばかり、中で初之丞が一番年
 が若いのはありすが、氣象は一番シヤンとして居る、何れ
 も空元氣を出して、甲ナアニ、化物が出たに似た處で、何條何
 程の事やあるべき、一生に一度位いは化物を見て置くも、後學
 の爲めである、皆大層な勢いで居ります、サテ其の日の
 も暮れて、次第／＼に夜が更けて来る、初之丞を除いた他の六
 人は、イロ／＼の話をして勇氣を附けて居る、勿論此の勢いな
 らば、ナカ／＼怪物なぞが出そうにもありません、其の内に夜

之丞は喜び勇み、毎晩、館へ詣める事になる、然るに初之丞が来ない夜は、必ずす櫻姫が妖怪の爲めに惱まされて、非常にお苦み遊ばすので、野分の方と櫻姫は初之丞でなければならぬ様に相成りました、處が成夜のことで、例に依つて初之丞は唯一人櫻姫の寝處のお次の間に詰めて居りますと、彼是れ玉満頭と思ふ頃しも、何處から飛んで来たものか、ヒユヒユと生じて、一箇の短刀天井より落ち来り、初之丞の衣物の袖を少しばかり切り裂いて、尙も勢い烈しく、後ろの唐紙へズツと珍説奇談は、一寸一吹いたしまして、次席のお楽しみ……

第十五席

思い掛けなく短刀が飛んで来たので、流石に豪膽なる少年初之丞も怪といたし、自分の帯を見ると差して居つた筈の脇差がな

様であるが、何うも面白い變化じやない」と、落ち付き拂つて見て居りますと、疊は一ヶ處や二ヶ處ではない、彼方も此方もバタリと揚り始め、果ては何處ともなく、ドロ／＼と云ふ響きがしたかと思ふ間もなく、家鳴り震動して、雨戸と云はず障子と云はず、見る／＼内にバタリ／＼と倒れ掛るので、六人は生きたる心地もなく、我も／＼と残る五人も、續いてだ……と、一人が逃げ出すと、我も／＼と残る五人も、續いてバタ／＼と逃げ歸つて仕舞つた、處が不思議な事には、毎晩姫の身体に變事のある筈であるに、初之丞が来た晩に限つて、怪しい事はあつたが、少しも櫻姫に御惱みはなかつた、夜が明け、後重役の面々は寄り集まり、初之丞より事云々と聞き及んで、一同打ち揃い櫻姫の御機嫌を伺いますと、櫻姫も何日にもない顔色、魔はしく、之れよりは毎夜初之丞を伽に遣せと仰せ出で、皆々不思議に思つて、初之丞に此の事を傳へますと、初

い 初 オヤッ、何時の間に取りられたのであろう」と、云ひつ、
立ち上り、唐紙に突つ立つた短刀を抜いて見ると、自分の脇差
に相違ありませんから 初之れは、何うも怪しからん、一体鞘
は何處へ行つたのであろう」と、四邊りを尋ねましたが、何う
しても判りません、初之丞は尋ねあぐんで、茫然と元の座に戻
つて来たたり、頻りに小首捻つて考へ込んで居ります折柄、何處
ともなくコト／＼と云ふ音がする、初ハチナ、何んであろう、
お館に鼠の居そふな事は無いが」と、四邊りを見廻はして居り
ますと、確に其の音は頭の上の額の邊りでする様でございませ
から、初之丞は直様踏臺を持つて来て、額の背後を探つて見る
と、其處にチャシと鞘が置いてある、初フ、ム、之れは不思議
じや、何にもせよ油断がならぬ……と、夫れから後と云ふもの
は、初之丞は脇差の柄を握つて、昵つと身構へ、目を皿の様に
見開き、朝迄ヒリ、ともせず控へて居りました、スルト其の晩

になつて、相變らず初之丞は、櫻姫御守護の爲めお館へ出て參
りますと、驚尾家の一門ではあります、余り豪い人物でもな
い、川原茂右衛門と驚尾權十郎の兩人が待ち受けて居つて、川
イヨ、初之丞早や參つた、今夜は我々兩人が化物を見届ける
爲め、野分の方様にお願ひ申し、其の方と一緒に夜伽をするの
だ、決して氣遣はん様にしろ、ナアニ高の知れた化物、出て來
たら、搦んで袖へ入れ、土産に屋敷へ持つて歸る積りじや、アハ
、と、と、大層強よそうに申します、初之丞は大變迷惑
に思ひ、初イエ、川原様驚尾様、お伽の方が澤山見へますと、
屹度怪物が激しい悪戯をいたします、何うかお引取り下さいま
する様……私し一人で結構でございませ……驚ハ、と、小供
の僻に太い事を云ふな、夫れは化物も小供だと思つて、宜い加
減にして居るのだ、川左様、幾等化物でも、大人と小供で
は、小供の方に張り合ひがないに極つて居る、マア心配するな

用と申したのございす
 ニコ／＼と笑いながら
 今更の様に呆れ果て、互いに顔見合して居ります、初之丞は
 まつたのでありますから、驚き、之りや締じやないか、と
 気分を落ち付けて、二人は白いものをヨク／＼見ると、綿の固
 び退き、刀抜く術も打ち忘れて、青くなつて居ります、漸々
 たので、川原茂右衛門と鯨尾權十郎は、思はずツツと双方へ飛
 て居る内に、件の白い丸い物は、忽ち二人の間にフワリと落ち
 借てこそ大變……に、口には云はねど、二人の間、冷汗を流して見
 い物は、次第／＼に、二人の側へ近付いて来る様子、川オヤツ、
 聲さへ得立てず、ブル／＼と震へて睨まへて居る、處が其の白
 最初の勢いは何處へやら、寄らば切らんと刀の柄に手を掛けて
 る、之れを見た川原茂右衛門と鯨尾權十郎は、之れはとばかり
 かと思はれる、色の白い丸いものが、フワ／＼と舞込んで來

我々が正体見届けて呉れるんだと、力味返つて、搦乎と座り込
 み、夜の更けるを待ち受けて居る、然るに何うした事か、既に
 丑満近くとなつても、到つて穩か、例の壘の角も揚らず、一
 向に怪しい様子がない、川原茂右衛門と鯨尾權十郎とは、ソロ
 向に威張り出し、川原茂右衛門は、我々の威光に恐れを爲して
 流石の化物も遠慮をして居ると見へる、此の位の化物ならば、
 ナアニ多寡の知れたものだ……驚か、如何にも左様だ、皆なが臆病
 で、仰山に云ふたのであろう、之れ位なら別に恐れる事はな
 と、内云つて居る折柄、ボーンと真夜中の鐘が鳴る、初之丞は心
 の内冷笑い、初ハ、思つて居ります、其の時しも、斯はソモ如何
 ねば宜いが……と、思つて居ります、其の時しも、斯はソモ如何
 に、次の徳が人も居らぬにスーッと開きますと、今迄威張つて
 居た兩人も、ハツと驚いて頭から水を掛けられた様に、堅く
 つて目ばかり動かし居る、スルト間もなく、一抱へもあろう

果ては何十本とも知れぬ小さい手が、ウジャ〜と動き始めた
 其の氣味の悪さと云つたら、逆も響へ様がございませぬ、豪膽
 極まる少年初之丞は、忽ちヤツと一聲躍り掛つて、件の腕を掴
 もうといたし、初之丞は背後へ飛び退いて眺めて居ると、又
 失策つた〜と、初之丞は引つ捕へんとすると消へる、
 もやウジャ〜と手が湧いて出る、引つ捕へんとすると消へる、
 何度遣つても捕へる事は出来ません、初ア、化物を相手に無
 益な事をしても仕方がない、エ、イ勝手にせい〜と、片脇に寄
 つて控へて居ると、件の大きな手は、ソロ〜初之丞の顔を撫
 てる、頭の鬚を引つ張る、眠つと座つて居る事も出来せんか
 ら、初之丞は大きい怒つて、ヤツとばかりに脇差引き抜き切り
 付けますと、何處にもなくカラ〜と聲高に笑ふ物凄き聲がし
 て、摺古木手は消へて仕舞つた、スルト不思議な事には、其の
 翌日より初之丞は大火熱を發し、人事不省と相成つて、逆もお館

と氣味の悪い事である〜と、二人は高言に似もやらず、狐鼠
 と何時の間にも立ち去りました、其の夜も間もなく明け
 て、又も日が暮れると、相變らず初之丞はお館へ伺候して櫻姫
 の御機嫌を伺い、遅くまでお話し相手をして上げ、夫より次の
 間へ退ろうと、櫻姫のお目通りを立つて、次の間の入り口の
 へ來ると、驚くべし其處に入り口一杯の大きな袖が落ちてある
 初オヤツ、今夜は少々時刻を早めて來たな、然し何んな大きな
 人間の袖でも、斯んなものがある筈がない、之れは怪しからぬ
 ……と、足を舉げてポンと跳ると、其の途端に袖口から、殆ん
 ど飯櫃の丸さほどの太い大きな手が、其の途端に袖口から、殆ん
 は面白い、ズンベラポーで指がないとは可笑い、色は白いが何
 うやらグニャ〜して居るやうだ〜と、云ひつ、又もや、發止
 と件の腕を蹴ると、其の摺古木手から、不意に人間の手位いの
 手が、二三本ニヨキ〜と生へ出した、夫れがメン〜

置こうか……と、叫びながら足踏み鳴して、ハツタと野分の方
を睨まへたる其の顔色の恐ろしさ、看護の面々は思はずアツと
云つて、身の毛も竦立つばかりでございませう、然るに不意に
櫻姫が二人となりましたので、何方が本物の櫻姫やら、薩張り
判らなくなつて仕舞い、言葉の様子、聲音から身体の風体、少
しも變らなす、何れを夫れと別ち兼ます位い、皆々今更ながら呆
れ果て、△之れは、何うした事であらう、世の中に離魂病と云
ふものがあはるそうじやが、或いは其の類ではあるまいか □イ
エ、左様ではございませう、矢張り怪しいもの、爲せる
業、随分念の入つた事でございます、侍女共は囁きなが
ら、怖くながら看病申し上げて居ります、スルト二人の櫻姫
は、夜晝となく悶へ苦しんで居ります、其の間には、俄かに立ち
上つて四邊りを睨み、怒りの柳眉を逆立て、櫻アナ、恨めし
や腹立たしや、生き代り死に代り、此の恨みを晴らさで置こう

への勤めが出来なくなつた、サア其の晩からは、又もや櫻姫は
苦痛甚しく、頻りに妖怪に惱まされ給ふと云ふ有様、一門郎黨は
はイロ／＼に心配をいたして居ります、然るに或夜の事でご
さいました、野分の方を始め一同が看病をして居りますと
彼是れ真夜中頃とも思ふ頃しも、頻りに睡氣を催ふして参り、
何れもコクリ／＼と居睡りを始め、スルト間もなく櫻姫は一
聲高く、アツと悲鳴を擧げて叫ばれた聲に驚き、皆々ハツと目
を覺まして見ると、櫻姫は俯伏しに倒れて、絶へ入つて居られ
る様子に、△斯は大變、姫君は惱まれ給ふと見へる、早く御介
抱申し上げねばならん」と、一同はバラ／＼と駆け寄つて、水
よ薬よと打ち騒いで居ります、と忽ち姫はスツクと立ち上つ
たかと思つて、間に、斯は如何に、借ても不思議や、櫻姫の姿が二
人となつて、振り亂したる黒髪を左りの手に握り、櫻アナ恨め
しや……腹立たしや、生き代り死に代り、此の恨みを晴らさで

、分の、其の方等は、重き枕を掻けて、思はず聲を立てましたので、松虫鈴虫も

第 十 六 席

う、既に御承知でございませうが、ソハ次席に於いて申し述べませ

ねば、切めて常照阿闍梨でもと思つたが、之れも御不在では最

へに貴公のお蔭げ、改めてお禮を申します、夫れに付いても人
間は、假りの世に生れて居るばかり、利慾の念を捨て、功德を
計り、正直な心を持つて居れば、極樂浄土へ行かれます、今貴
女は自分の爲せる罪で、生きながらに地獄の責苦を受けて居ら
れるも、同然、姫君の憐み給ふも皆な貴公の心からでございま
す、私も同然、姫君の憐み給ふも皆な貴公の心からでございま
事、出来ません、申し上げるは之れ、表へ立ち出で、何れへ
す、いと、姉妹は、ツト立ち上り、フンと表へ立ち出で、何れへ
か立ち去つた、後に篠村次郎と田島造酒之丞は合點行かす、次
の間に下つて、聲を密め、田ノイ篠村、彼りや一体何うしたのだ
ろ、う、篠村、イヤ、拙者に、田ノイ篠村、彼りや一体何うしたのだ
野分の方様を、助けたのだから、事係は御存知あり、さうな筈だが
田ノイヤ、少しも知らない、然し今、雨人の厄の云つた事に依つて
考へると、野分の方様は蝦蟇丸にでも身を任して居られたので

不審晴れやらす、眠つと野分の方の顔打ち眺めて居りました、が
松オ、貴女は秋雨……スルト妹の鈴虫も、鈴借ても、蝦蟇丸
の妻、秋雨と云つたは偽りで、眞實は當鷲尾家の後室であつたか
ツ、眞の母上が殺されたも、其方の爲め、覺悟しやツ」と、血相
變へて飛び付かんといたしますから、姉の松虫は押し留め、松
待ちや妹、佛に仕へる身でありかがら、仇討が何ぞの様に、其
の有様は何事じや、上人様のお誠しめは、まだ判らぬかツ、假令
怨みのある者でも、夫れを善心に立ち歸らすが妾等の役目、一
度は、繼母にもせよ、親であつたお方、恨みがましい事は云ふ者で
はない……と、叱り付けて置いて、野分の方に向い、松妹の鈴虫
は、年の若い丈けに、無分別を起して困ります、何うか御許し遊
ばします、若い丈けに、無分別を起して困ります、何うか御許し遊
ます、法然上人様の御弟子となる事の出來ましたのも、之れ偏
ます、法然上人様の御弟子となる事の出來ましたのも、之れ偏

み 賦 止 し 難 く 之 れ 迄 同 道 いた した の で ござ る 我 が 力 の 及 ば
ん 丈 け は 御 佛 の 功 徳 を 借 り て 念 じ 參 ら せ る の 所 存 御 安 心
あ る べ し …… と 聞 いた 三 木 之 助 宗 雄 は 大 い に 喜 び 直 様 野
分 の 方 にも 此 の 趣 を 告 げ ます と 野 分 の 方 も 喜 び 御 祈 願 を 願 い ませ
す 野 夫 には 宜 ぶ こ そ 來 て 下 さ っ た 彌 陀 次 郎 を 迎 へ 櫻 姫
う 一 と 病 室 へ 案 内 を いた し ます 常 照 阿 闍 梨 は 行 李 の 中 上
の 病 室 へ 案 内 を いた し ます 常 照 阿 闍 梨 は 行 李 の 中 上
法 衣 を 取 り 出 して 身 に 纏 い 金 蘭 の 袈 裟 を 首 に 懸 けて 法 然 上
人 へ 特 に 授 け ら れ た 珠 數 を つ ま ぐ り な が ら 彌 陀 次 郎 道 心 を
連 れ て 靜 々 と 病 室 へ 入 り 込 み ます 野 分 の 方 は 櫻 姫 の 右 手
三 木 之 助 宗 雄 は 左 手 に 座 を 構 へ て 座 し 夫 れ に 續 いて 坂 口 重 左
衛 門 田 島 造 酒 之 丞 徐 村 次 郎 公 高 木 彌 會 太 郎 荒 部 三 郎
前 山 四 郎 栗 村 善 太 船 城 十 郎 等 代 郎 黨 平 船 井 橋 次 和 久 九
郎 八 郎 横 作 惠 六 船 城 十 郎 等 代 郎 黨 平 船 井 橋 次 和 久 九

い ら せ せ と て 上 人 の 日 頃 つ ま ぐ り 給 ふ 之 れ なる 珠 數 を 授 け 下
さ れ ま し た 又 此 の 笈 い 佛 は 先 年 某 身 持 放 埒 の 其 の 折 柄
圖 ら ず も 御 佛 け の 御 告 げ に 依 つ て 淀 川 に 於 いて 手 に 入 れ ま し
た る 紫 麻 黄 金 の 靈 佛 で ござ います 野 光 明 寺 の 住 職 に いた し 法
則 は 常 照 阿 闍 梨 と 申 して 粟 生 野 光 明 寺 の 住 職 に いた し 法
然 上 人 の 高 弟 に て あ ら せ ら れ ます …… と 委 細 を 物 語 つ て 常
照 阿 闍 梨 を 引 き 合 は ず 宗 上 人 の 珠 數 と 云 ひ 眞 身 の 御 佛 有 る う
初 對 面 の 換 抄 畢 つ て 宗 上 人 の 珠 數 と 云 ひ 眞 身 の 御 佛 有 る う
へ に 常 照 阿 闍 梨 の 徳 を 施 し 給 いて 教 化 下 さ ら ば 如 何 なる
怨 靈 怪 し の も 得 脱 する 事 疑 い な し 願 は ば 片 時 も 早 く
病 苦 を 救 い 下 さ います 様 偏 へ に 頼 み 入 る …… と 承 知 仕 つ た
聞 いた 常 照 阿 闍 梨 は 莞 爾 と いた し て 常 如 何 にも 承 知 仕 つ た
彌 陀 次 郎 道 心 の 申 す 通 り 感 僧 は 修 行 未 だ 足 ら ず 功 驗 有 る べ
き や 覺 束 な く は 思 い ます が 師 の 坊 命 と 云 ひ 次 郎 道 心 の 類

誰に遂るる琴故魂向圓借... あにはは主公義治公の御胤を懐胎し、既に野分の方の嫉妬深く、野

第十七席

梨が怨靈解脫の一段より、野分の方の舊悪露現の實に奇妙不可... 思議なる願末に引き移りまするが、ソハ後席に譲つて申し上げ

まする、常照阿闍梨は之れを聞いて、常ハ、ア、此奴は一筋細... 二の人の櫻姫は何か物語りに及びますと云ふ、イヨク常照阿闍

非 妾 彼 我 地 く て 異 左 長 末 彌 し に
業 も の が 主 道 は 腹 左 長 末 彌 し に
の 共 様 子 権 道 我 の 腹 左 長 末 彌 し に
最 に 多 立 現 力 が 兄 則 教 清 水 次 郎 成
後 世 勢 も 花 固 固 子 妹 清 阿 阿 阿 阿 阿
を 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
途 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
げ 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
る 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
の 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
み 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
な ら 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
す 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
、 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
惣 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
領 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
に 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
生 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
れ 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
し 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
甲 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
斐 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
も 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
な 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
く 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
、 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行
名 樂 の 家 正 見 行 行 行 行 行 行 行 行

れ 下 も 堅 し 薩 所 な 洩 大 弄 出 太 墓
ん に 能 き や 、 業 し 江 り さ と づ
と 流 く 御 徐 内 心 見 篠 山 殺 せ 云 かい
い れ 御 方 村 心 如 せ 村 谷 有 家 の
た 着 存 の 八 郎 夜 掛 屋 川 せ 有 家 の
せ さ 知 事 郎 公 連 敷 へ 沈 刺 へ 所
し の 管 て 殿 極 重 何 に 尾 長 の 持
折 犬 答 殿 言 言 言 言 言 言 言 言
柄 に 腹 然 然 然 然 然 然 然 然
、 腹 然 然 然 然 然 然 然 然
其 處 居 居 居 居 居 居 居 居
に 居 居 居 居 居 居 居 居
居 居 居 居 居 居 居 居
ら 居 居 居 居 居 居 居 居
れ 居 居 居 居 居 居 居 居
る 居 居 居 居 居 居 居 居
間 野 彌 陀 次 郎 殿 の お 情 け
野 彌 陀 次 郎 殿 の お 情 け
彌 陀 次 郎 殿 の お 情 け
陀 次 郎 殿 の お 情 け
次 郎 殿 の お 情 け
郎 殿 の お 情 け
殿 の お 情 け
の お 情 け
お 情 け
情 け
け

前夜の姫が琴を弾べ、其の曲の妙なるに引かれて、妾の亡霊は
再び出て来た、先きに妾が殺された時の苦痛を思い浮べ、
もや仇を為す心に、なりました、夫れのみならず野分の方は、
賊の張本蝦蟇丸に、肌を許した、其の際に、尙飽き足らず、小萩の娘を
に、毒し、盲目の先妻小萩を殺させ、尙飽き足らず、小萩の娘を
此、鈴虫の二人を苦しめ、揚句の果は、蝦蟇丸に殺さるべき處を、
妾が亡霊蛇となつて、助けやりました、又相州竹下道にて、妾が
た、上、取、殺さん所、助けやりました、又相州竹下道にて、妾が
妾の屍を埋め給は、我が子を拾い取つて、慈悲を掛け下され
し、恩人なれば、其の身も、浪人の身とならぬ、切腹ありし
の、みならず、其の身も、浪人の身とならぬ、切腹ありし
會はして、互いに助け合ひ、義治公の仇を報はす、妾の寸志であ
まじ、た、互つた野分の合は、小姓の高木彌會太郎殿の美しきに思

もなき出家となし置く事の口惜しさを、思いつ、、櫻姫の美し
き姿と、清玄の見すばらしき有様とを見比べ、見ても、一旦思い止
まつた、恨再び燃へ出で、己れツ妾を地獄へ落すからには、永
く祟りを為して仇を報い、此の恨みを晴らさで置くべきやと、
又、も、我が子清玄の胸に分け入り、現土我が子に煩悩を起させ
戒行を破らせ、たも、櫻姫殿には、先づ目前に、人の勝れて
自、分の子を思ふ野分の方、歎きを掛け、左れば、妾と清玄と、
受けさせ、野分の方、歎きを掛け、左れば、妾と清玄と、
の、方を取、殺さんと、思ふ為め、左れば、妾と清玄と、
れ、居れど、元魂魄は、一ツなり、妻は、鳥部野にて、蘇生させ、
今日迄、一命を繼いで居るも、之れを、妻が為せる業にて、蘇生させ、
蘇生で、は、命を繼いで居るも、之れを、妻が為せる業にて、蘇生させ、
罪、ない、姫を苦しめる事の痛は、野分の方、一旦は、妾が心もたゆみしが

事は心附かず居りましたが、今の物語りを聞いて大いに驚き
 驚きの面をくも、今迄は清玄の死靈なりと思ひ、玉翠が怨
 間の野彌陀次郎道心、其の他三木之助宗雄を始ゆ、常照
 の櫻姫とは、誰も見分けるも、三木の助宗雄を始ゆ、常照
 物云ふと、工合迄、二三人の櫻姫が同じであり、常照阿闍梨
 妻ましと、合迄、二三人の櫻姫が同じであり、常照阿闍梨
 柳眉を逆立て、雨眼怒らし、グツと睨んだ光景は、恐ろし
 殺じて、共に奈落に連れ行かん、思ひ知れや、と云ひつ
 上は永く此の世に止まり難し、見よ、近い内に、其の方
 怨み晴らすと云ふ事は、豈夫忘れはすまい、斯く物語つた
 が苦痛は何れほどじやと思ふて居る、生き替り死に代り、飽
 の方を睨まへ、玉コレ野分の方、妾を弄り殺して、時、妻
 り下さいます、玉コレ野分の方、妾を弄り殺して、時、妻
 かせ申します、返すも成佛の望みは更になし、早々お歸

や、野分の方を苦しめて遣らうと思つて居りましたが、常照阿闍梨
 し、た次第、此の仔細を知らせず、永く櫻姫様を惱ませ
 と、能く其の面形が似て居るゆへ、之れ迄影身に成つてお
 ふがゆへ、ありませぬ、初之丞殿を見れば、高木殿の忠義の心
 も、之れが野様の既殺の苦勞難い、夫れを大江山で彌陀次郎殿
 救ふたも、花野様の既殺の苦勞難い、夫れを大江山で彌陀次郎殿
 供なから、カマを生まみ落され、田島殿の娘御初之丞殿は小
 れ、彌太郎殿も愛想を盡され、田島殿の娘御初之丞殿は小
 れに、住居の内、糸萩は淫婦なるゆへ、不義を爲し、夫れが爲
 様の計略で、彌太郎殿も愛想を盡され、田島殿の娘御初之丞殿は小
 す、雖も、彌太郎殿は夫れが否で堪らず、遂に三木の助宗雄
 いを掛け、主人の威光で、夫れが否で堪らず、遂に三木の助宗雄

い、か、珠、敷、を、以、て、先、づ、左、り、の、方、の、櫻、姫、の、頭、を、ハ、ツ、シ、と、打、て、
 ば、豈、に、圓、ら、ん、や、忽、ち、姿、は、消、へ、失、せ、て、一、匹、の、小、蛇、と、な、り、
 頭、よ、り、ビ、カ、ノ、と、光、り、を、放、ち、何、處、と、も、な、く、飛、び、去、つ、た、續、い、
 て、右、の、方、の、櫻、姫、を、發、止、と、打、つ、と、斯、は、如、何、に、今、迄、姫、姪、た、る、花、
 の、姿、も、俄、か、に、氷、の、朝、日、に、解、け、る、が、如、く、消、へ、失、せ、て、櫻、姫、も、絶、世、の、美、
 た、る、小、袖、と、骸、骨、の、み、が、擗、の、上、に、殘、り、ま、し、た、櫻、姫、も、絶、世、の、美、
 人、で、あ、り、ま、し、た、が、骨、と、な、つ、て、は、普、通、の、人、に、少、し、も、替、ら、ず、一、
 休、和、尙、の、道、歌、に、も、
 骨、か、く、す、皮、に、は、離、れ、も、迷、ふ、ら、ん
 皮、や、お、れ、て、は、斯、く、の、姿、よ
 と、あ、り、ま、す、が、實、に、其、の、通、り、で、人、間、の、醜、美、は、唯、皮、一、枚、に、あ、り、
 ま、す、の、み、で、彼、れ、は、美、人、だ、別、嬪、だ、と、騒、い、で、居、つ、て、も、骸、骨、の、事、
 を、思、ふ、と、興、が、醒、め、て、仕、舞、い、ま、す、る、世、の、好、色、家、は、之、れ、を、悟、ら、な、
 け、れ、ば、な、り、ま、す、ま、い、イ、ヤ、之、れ、は、餘、計、な、お、口、蝶、り、居、列、ぶ、面、々、

就、中、常、照、阿、闍、梨、は、櫻、姫、の、病、床、近、く、進、み、寄、り、常、イ、ヤ、御、身、の、
 物、語、り、を、聞、け、ば、遺、恨、の、深、い、も、道、理、で、あ、る、然、し、な、が、ら、怨、恨、の、
 惡、鬼、と、な、つ、て、永、劫、人、を、苦、し、め、ん、よ、り、は、我、が、教、化、を、聞、き、分、け、
 て、早、く、成、佛、解、脱、を、せ、よ、と、云、ひ、つ、つ、句、誓、の、偈、を、二、三、遍、
 唱、へ、心、經、を、三、遍、く、り、返、し、隨、求、陀、羅、尼、光、明、真、言、顯、密、甚、深、の、神、
 呪、陀、羅、尼、を、讀、み、上、げ、ま、す、と、偕、て、も、不、思、議、や、笈、佛、の、中、よ、り、
 パ、ツ、と、光、り、が、輝、き、渡、り、櫻、姫、の、病、床、を、隈、な、く、照、し、ま、す、と、忽、ち、
 ア、ツ、と、二、人、の、櫻、姫、は、俯、伏、し、と、な、り、手、を、合、し、て、感、涙、を、流、し、櫻、
 ア、ナ、有、り、難、や、…、忝、な、や、今、は、怨、み、も、晴、れ、た、り、願、わ、く、ば、彌、
 陀、の、安、樂、淨、土、へ、導、き、た、ま、へ、と、云、ひ、終、つ、て、神、妙、に、合、掌、い、た、
 し、て、居、り、ま、す、る、阿、闍、梨、は、大、い、に、打、ち、喜、び、十、念、を、授、け、給、ふ、
 て、後、二、人、の、姫、の、背、後、に、廻、り、立、ち、聲、を、勵、ま、し、て、常、般、を、出、て、
 般、に、入、る、旅、舎、に、宿、す、る、が、如、し、地、水、火、風、一、た、び、散、す、方、盤、の、
 湯、に、落、つ、る、が、如、し、汝、從、來、之、れ、一、か、之、れ、二、か、…、と、云、ふ、が、早、